

三日市遺跡調査概要Ⅱ

昭和61年3月

三日市遺跡調査会

頁	誤	正
圖版3	1. 土壌2-201、 2. 土壌2-202、	1. 土壌2-701 2. 土壌2-702
圖版49	建物3-17 建物2-8 建物2-9	建物2-8 建物2-9 建物3-17

頁	誤	正
圖版3	1. 土壌2-201、 2. 土壌2-202、	1. 土壌2-701 2. 土壌2-702
圖版49	建物3-17 建物2-8 建物2-9	建物2-8 建物2-9 建物3-17

序 文

河内長野市は古来より生活環境に恵まれた土地であります。

ましてや三日市地区については、高野山参りの街道の宿場として栄えた土地であり、近年は、各地で宅地開発が行われ、大阪のベッドタウンとしての新興住宅地が急増し、人口増加に伴なう道路網、交通網等都市的機能を調整する必要性が強く求められてきています。

今回、住宅・都市整備公団の委託を受け南海高野線三日市町駅東側に接する地域の三日市町駅前整備に伴う片添地区特定区画整理事業を行うに当たり遺跡調査を実施するものであり、一昨年度財団法人大阪府文化財センターにおいて試掘調査がなされた結果に基づいて、本調査を昭和60年1月より実施しました。その結果、平安末～鎌倉・室町時代の遺構や遺物が出土し、当時の当地域の集落のあり方を知る貴重な資料が得られました。また古墳時代の包含層及び遺物群の検出も、それ以前の当該地域の歴史を把握する上で注目されます。

今回の調査は昭和60年度分として、前年度の結果をふまえた上で行い、新たに縄文時代～近世に至るまでの多大な成果を得、当該遺跡の重要性を理解出来たものと確信すると共に、当該地域の開発と埋蔵文化財の保護・保守について大きな役割をしたものと評価する次第です。

最後に調査を実施するにあたって御指導・御協力を賜わった地元地主・大阪府教育委員会・河内長野市・河内長野市教育委員会・住宅都市整備公団・同三日市工事事務所の関係各位に、心から感謝いたしますと共に、今後とも当調査会の事業に一層の御理解を賜りますよう御願い申し上げる次第です。

昭和61年3月

三日市遺跡調査会

理事長 平井 義信

例　　言

1. 本書は河内長野市三日市町・片添町に所在する三日市遺跡の昭和60年度発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、三日市遺跡調査会が、住宅都市整備公団の委託を受けて行った。
3. 現地調査は、昭和60年6月17日より61年3月31日まで行った。
4. 本書の執筆は、第1章—加藤博章、第2章—尾谷雅彦
第3・4章—尾谷雅彦、土師春樹、高 正龍、龜山 隆、第5章—尾谷雅彦
が各分担した。
5. 遺物整理、実測、トレースは、四宮加容子が総括担当した。
6. 本書の編集、最終的な文責は、尾谷雅彦が負う。
7. 遺構実測の1部は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
8. 調査実施にあたっては、大阪府教育委員会、河内長野市教育委員会、住宅都市整備公団関西支社、同三日市事務所、河内長野市都市整備部、南海三日市共同企業体、南海電気鉄道株式会社、(財)大阪文化財センター及び地元地主の方々の協力を得た。
9. 調査作業においては、株式会社大林組、前田建設、壹山建設、南海建設の協力を得た。
10. 本書の作成については、河内長野市教育委員会指導部社会教育課の協力を得た。

凡　　例

1. 遺構番号の頭文字は略しており、以下の通りである。
溝—溝、井戸—井、建物—建、土器溜め—土溜、集石—集、方形石組一方石、
土塙—土、住居跡—住、瓦窯—瓦、窯状遺構—窯、溜め池—溜
2. 報告書使用の遺構番号は仮称である。
3. 遺構実測の区割は国土座標軸を用いた。
4. 遺物写真番号、実測図番号は、遺物観察表を参照されたい。

目 次

序文

例言

凡例

目次

調査組織体制

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	3
第3章	遺構	6
第1節	縄文・弥生時代の遺構	6
土塙・竪穴式住居・溝		
第2節	古墳時代の遺構	8
竪穴式住居・土塙墓・古墳及びその関連遺構・小型窯状遺構		
窯状遺構3-1		
第3節	中世の遺構	15
袋状土塙・井戸・土塙・ピット		
第4節	近世の遺構	19
土塙・溜池・瓦窯		
第4章	遺物	22
第1節	縄文・弥生時代の遺物	22
縄文時代の土器・弥生時代の土器・石器		
第2節	古墳時代の遺物	25
土師器・製塙土器・韓式系土器・埴輪・須恵器・鉄器		
第3節	中世の遺物	31
瓦器塊・瓦器皿・土師質皿・羽釜・輸入陶磁器・瓦類・木製品		
第4節	近世の遺物	37
国内製陶磁器(美濃・瀬戸)・伊万里・唐津製品・その他の土器		
木製品・土製品・銅製品・瓦		
第5章	まとめ	39

挿 図 目 次

- 第1図 調査区配置図
- 第2図 遺跡全景航空写真
- 第3図 河内長野市遺跡分布図
- 第4図 土塹4-902
- 第5図 溝4-23出土高杯
- 第6図 溝4-23鉄鎌・馬具出土状況
- 第7図 溝4-901
- 第8図 溝池遺物出土状況
- 第9図 瓦窯3-1断面
- 第10図 出土鉄鎌模式図
- 第11図 溝4-23出土素環鏡板・轡
- 第12図 出土瓦器法量
- 第13図 溝3-87出土土師質小皿
- 第14図 出土輸入銭拓影

表 目 次

- 表1 穴式住居一覧（古墳時代）
- 表2 出土輸入銭一覧
- 表3 掘立柱建物一覧
- 表4 須恵器観察表
- 表5 中近世遺物観察表

図 版 目 次

- 図版1 遺構 実測図 土塙 5-1
- 図版2 遺構 実測図 住居 5-1、住居 5-2
- 図版3 遺構 実測図 土塙 2-701、土塙 2-702
- 図版4 遺構 実測図 溝 4-23
- 図版5 遺構 実測図 窯状遺構 3-1
- 図版6 遺構 実測図 小型窯状遺構 1、2号窯
- 図版7 遺構 実測図 井戸 3-1
- 図版8 遺構 実測図 井戸 3-2
- 図版9 遺構 実測図 井戸 3-9、井戸 4-307
- 図版10 遺構 実測図 土塙 3-96、袋状土塙
- 図版11 遺構 実測図 土塙 3-60、土塙 3-156
- 図版12 遺構 実測図 瓦窯 3-1
- 図版13 遺物 実測図 繩文式土器
- 図版14 遺物 実測図 弥生式土器、石器、韓式系土器、製塩土器、土師器
- 図版15 遺物 実測図 韓式系土器、土師器
- 図版16 遺物 実測図 韓式系土器、土師器
- 図版17 遺物 実測図 須恵器
- 図版18 遺物 実測図 須恵器、埴輪
- 図版19 遺物 実測図 増輪、馬具、鉄劍、鉄鎌
- 図版20 遺物 実測図 鉄鎌、土師質土器、瓦器
- 図版21 遺物 実測図 瓦器
- 図版22 遺物 実測図 瓦器
- 図版23 遺物 実測図 瓦器
- 図版24 遺物 実測図 瓦器、瓦質鉢
- 図版25 遺物 実測図 瓦器
- 図版26 遺物 実測図 瓦器、土師質土器、青磁碗、白磁碗
- 図版27 遺物 実測図 羽釜

図版28	遺物	実測図	羽釜
図版29	遺物	実測図	羽釜
図版30	遺物	実測図	羽釜、土師質鍋、須恵質練り鉢
図版31	遺物	実測図	天目茶碗、施釉小皿、菊皿、織部鉢、青花小皿、おろし皿、施釉皿、磁器碗、唐津碗
図版32	遺物	実測図	染付
図版33	遺物	実測図	染付
図版34	遺物	実測図	軒平瓦、軒丸瓦、火舍、ミニチュア土製品
図版35	遺物	実測図	木製品
図版36	遺構	写真	土塙 5-1 (東から)、土塙 5-1 繩文式土器出土状況
図版37	遺構	写真	住居 5-1、住居 5-1 土器出土状況
図版38	遺構	写真	住居 5-2 (南から)、住居 5-2 土器出土状況
図版39	遺構	写真	周溝 2-701 (南から)、周溝 2-702 (北から)
図版40	遺構	写真	溝 2-701 (東から)、溝 2-702 境輪出土状況
図版41	遺構	写真	土塙 2-701 (南から)、土塙 2-702 (南から)
図版42	遺構	写真	土塙 4-902 (北東から)、土塙 4-902 鉄劍出土状況
図版43	遺構	写真	溝 4-23 (南東から)、溝 4-23 鉄鎌・馬具出土状況
図版44	遺構	写真	溝 4-901 土師器出土状況、小型窯状遺構 1 号窯
図版45	遺構	写真	窯状遺構 3-1、窯状遺構 3-1 土器出土状況
図版46	遺構	写真	建物 5-1、建物 5-2
図版47	遺構	写真	建物 4-801、建物 3-3
図版48	遺構	写真	建物 3-6、建物 3-7
図版49	遺構	写真	建物 3-17、建物 2-8、建物 2-9
図版50	遺構	写真	袋状土塙羽釜出土状況、袋状土塙完掘
図版51	遺構	写真	井戸 3-1、井戸 3-9
図版52	遺構	写真	井戸 3-2、井戸 3-2 完掘
図版53	遺構	写真	井戸 4-307 瓦器出土状況、ピット 4-511
図版54	遺構	写真	土塙 3-60、土塙 3-96
図版55	遺構	写真	瓦窯 3-1、土塙 3-156
図版56	遺物	写真	繩文式土器、弥生式土器甕

図版57	遺物 写真	韓式系土器甌、土師器壺・高杯・甕・小型丸底壺
図版58	遺物 写真	土師器壺、須恵器杯蓋・杯身・壺・高杯・甕
図版59	遺物 写真	須恵器台付壺・短頸壺・平瓶・埴輪
図版60	遺物 写真	土師質皿・瓦器皿・壺
図版61	遺物 写真	瓦器塊・台付皿
図版62	遺物 写真	瓦器塊・青磁碗・瓦質羽釜
図版63	遺物 写真	天目茶碗・近世陶磁器
図版64	遺物 写真	馬具・鉄鎌・鉄剣・ミニチュア土製品

付 図 目 次

- 付図 1 調査区No.2遺構全体図
- 付図 2 調査区No.3遺構全体図
- 付図 3 調査区No.4遺構全体図(1)
- 付図 4 調査区No.4遺構全体図(2)
- 付図 5 調査区No.5遺構全体図

調査組織体制

当該発掘調査を円滑に推進するため、大阪府教育委員会、河内長野市教育委員会、及び住宅都市整備公団との協議により、河内長野市教育委員会教育長を理事長に迎え、「三日市遺跡調査会」を昭和59年10月18日付で設立した。

調査会には、理事として関係行政機関の職員及び学術経験者10名をもって構成し、調査部と事務局を設置し、発掘調査を実施している。

理事長 平井 義信 河内長野市教育委員会教育長

理事 吉房 康幸 大阪府教育委員会文化財保護課長

タ 綱千 善教 関西大学教授

タ 中村 浩 大谷女子大学助教授

タ 峯 清勝 河内長野市教育委員会管理部長

タ 石橋 勝 タ 指導部長

タ 向井 亨 河内長野市都市整備部長

タ 野手 正夫 タ 市長公室長

タ 西久保弘成 タ 総務部長

タ 大谷 隆彦 タ 教育委員会社会教育課長

事務局長 上野 英一

調査部長 井藤 徹 大阪府教育委員会文化財保護課主幹

調査主任 尾谷 雅彦 河内長野市教育委員会社会教育課

調査員 土師 春樹、高 正龍、亀山 隆、松本 高志、四宮加容子

補助員 田中 良明、坂村 秀彦、安本 真治、松本 准一、東尾 明美

平岡 祐子、平井 香、熊野 裕美、明地奈緒美、柳山 典子

橋本美和子、清田 実保、八木 理子、鈴木 雅子、福武世志子

奥田 紀子、佐々木恵里、田路 幸子、小泉 雅代、向 博子

岡山かおり、金田 佳子、越膳静都子、東野麻衣子、古池 陽子

大北 素代、加嶋 廉子、北野 哲也、松田 友克、谷口 和美

久保八重子、橋本ひとみ、西浦 賢恵、畠山 まこ、川原 有沙

事務員 谷 健二、福本 泉

三日市遺跡調査会機構図



第1章 調査に至る経過

昭和44年秋から同45年春にかけて実施された、河内長野市三日市町所在の大師山遺跡及び大師山古墳の発掘調査が終了した翌46年、同遺跡の南側に続く片添町の丘陵地一帯を、関西大学文学部考古学研究室の協力を得て、河内長野市教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査の結果、当該地には土師質及び瓦質の土器片が相当数散布していることが確認され、埋蔵文化財包蔵地である可能性の高い場所として注目されるにいたった。

一方、河内長野市は、急速に住宅地として発展してきた南海高野線三日市町駅前の整備計画を策定した。当該地域を区画整理し、駅前開発の中心的地域とする方針に基づいて、その事業の実施を住宅都市整備公団へ依頼した。依頼を受けた同公団は、その後必要な用地の確保並びに地権者への事業説明や協力要請を積極的に実施し、昭和59年度事業認可手続きのめどが立ったことから、埋蔵文化財の取り扱いについて、市教委を通じて府教委に協議することになった。協議を受けた府教委は、前述の分布調査の結果に基づいて、当該事業対象地域が埋蔵文化財包蔵地である可能性が極めて高いことを説明し、地表面の観察による遺物の採集より精度の高い部分的な発掘調査を実施する必要があること、その取り扱いについては、調査結果に基づいて再度協議をすること、あわせて当該発掘調査を財團法人大阪文化財センターに委託されたい旨回答した。回答を受けた同公団は、數回にわたり調査の方法や実施時期及び必要経費について、同センターと協議し、昭和58年12月5日付けで発掘調査の契約を締結した。現地における調査は、昭和58年12月6日に着手し、昭和59年3月8日に終了した。

その結果、部分的な発掘調査を行ったほぼ全域から遺構及び遺物が確認され、当該地一帯は大規模な遺跡であることが実証された。このため、府教委、市教委、公団の三者でその対処について充分協議を行い、59年5月当該地域の発掘調査計画が決定した。そして10月1日調査実施の主体として、府教委、市教委、市、学識経験者からなる三日市遺跡調査会を結成し、同公団と調査会との間に11月1日付けで契約を締結し、1月7日から現地調査に着手した。



第1図 調査区配置図

今年度調査区
昨年度調査区

第2章 位置と環境

1. 位置

当遺跡の所在する河内長野市は、大阪府の東南に位置する。現在の行政区画では東は南河内郡千早赤阪村、西は和泉市、南は府県境を隔て和歌山県に接し、北は堺市、南河内郡狹山町、富田林市と接する。遺跡は河内長野市三日市町、片添町に所在し、南海高野線三日市町駅の東南に位置する。

2. 地形

当遺跡は、本市の南端、東西に走る和泉山脈から北に派生する丘陵性山地の1つの末端部に位置し、標高120~180m。遺跡の西侧を石川の支流天見川が北流しながら天見谷を出て、やや流れをゆるめ河岸段丘を形成している。遺跡の北西近くで、同じく石川の支流石見川が狭小な谷を刻んで天見川と合流し、石川の流れとなって大和川へと北流する。

3. 周辺の遺跡

市内で最古の遺物が出土したのは、現在のところ、旧石器、縄文時代の石器が採集された寺ヶ池堤である。なお、縄文時代早期の土器片が三日市遺跡でも出土している。

弥生時代に入ると前期の遺跡は発見されていないが、弥生時代中期になると、三日市遺跡、富田林市との市境に位置する塙谷遺跡がある。後期になると大師山遺跡があり、この遺跡は丘陵上に位置し、高地性集落と考えられている。

古墳時代は、弥生時代後期の遺跡である大師山遺跡と重なって、大師山古墳が出現する。古墳は前方後円墳で粘土椁と推定され、內行花文鏡や、碧玉製の石製品、鉄製品が出土している。後期になると、塚穴古墳、宮山古墳、鳥帽子形古墳など、横穴式石室墳が分布している。又、今回の調査で、三日市遺跡にも古墳の存在が確認された。

奈良、平安時代、特に奈良時代については、遺跡の数は少なく、火葬墓と考えられる小山田1、2号墳がある。平安時代に入ると、觀心寺、河合寺、金剛寺などが文献上に現われ、これら寺院の莊園も市内に分布している所から、遺跡の存在が予想される。

中世、特に鎌倉時代末から、室町時代初期にかけての南北朝動乱期に、市内の丘陵末端部や山地頂上に城郭が多く築かれる。市域は南北朝動乱以降、安土桃山時代まで戦乱にさらされ、多くの城郭が後世まで利用されている。

この様な歴史的環境の中で、複合遺跡としての三日市遺跡の位置は、南河内の歴史の中で重要な位置を占めるものである。

遺跡分布図 遺跡名 1. 小山田古墳1号墳 2. 小山田古墳2号墳 3. 堀谷遺跡（弥、中） 4. 美子尻遺跡 5. 寺ヶ池遺跡（旧石、縄） 6. 古野古墳（古、中、消滅） 7. 金胎寺遺跡（中世、城） 8. 河合寺 9. 河合城、末広塗（中世） 10. 烏帽子形城（中世） 11. 塚穴古墳（古、中） 12. 長池墓跡群（中世） 13. 高向遺跡 14. 慈持寺跡 15. 大師山遺跡（弥、後） 16. 大師山古墳（古、前） 17. 片添城跡（中世） 18. 宮山古墳（古、中） 19. 金剛寺 20. 仁王山城跡（中世） 21. 日ノ谷城跡（中世） 22. 三日市遺跡（縄～近世） 23. 石仏遺跡（中世） 24. 観音寺跡（中世） 25. 稲荷山城跡（中世） 26. 石仏城跡（中世） 27. 左近城跡（中世） 28. 清水遺跡（中世） 29. 深田城跡（中世） 30. 旗尾山城跡（中世） 31. 天見駅北方遺跡（中世） 32. 蟹中瀬遺跡（中世） 33. 岩瀬寺 34. 旗藏城跡（中世） 35. 国見城跡（中世） 36. 猿子城跡（中世） 37. 光滝寺
旧石～旧石器時代、縄～繩文時代、弥～弥生時代、古～古墳時代、中世～鎌倉、室町時代、中、後は中期、後期



第2図 遺跡航空写真（枠内は今年度調査区）



第3図 河内長野市遺跡分布図

第3章 遺構

第1節 繩文・弥生時代の遺構

土塙（図版1・36）

土塙5-1 土塙南側がやや削平されており、平面形は不整形をなす。また、土塙やや北よりに一段深く掘り込められた部分がある。最大残存長2.1m、最大残存幅0.8m、最深0.42mを測る。土塙内の埋土は暗褐色土と褐色土の二層に分れる。

土塙内より中期末～後期初頭の縄文式土器深鉢が出土しており、土塙墓の可能性も考えられる。

竪穴式住居（図版2・37・38）

竪穴式住居5-1 平面形は円形をなし、直径5.5m、壁高0.35m、壁の真下に幅0.2～0.3m、深さ0.12mの周溝がまわる。住居の中央部には1.1m、深さ0.3mの炉がある。炉をはさみ北西と南東の両側にそれぞれ2本の柱穴がある。これらの柱穴のうち、外側2本はこの住居の支柱と考えられる。また、内側2本は炉に伴うものと考えられ、床面に対して55°の角度で、住居の中心上方に内傾して伸び炉の上方ほぼ1.1mで交差するように穿たれている。遺物は中期弥生式土器・甕、サヌカイトの石錐、作業台用の石などが出土している。

竪穴式住居5-2 工場建設時の掘削で約3%を壊されている。平面形は円形をなし、直径4.4m、壁高0.3m、壁の真下に幅0.2～0.25m、深さ0.23mの炉がある。炉の周囲には4本の柱穴がある。遺物は中期弥生式土器・高杯が床面から出土している。

溝

溝5-1 検出長15m、幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.15mを測る。出土遺物はないが、溝5-3と近接し、埋土が同じであることから、これとつながる可能性もある。

溝5-2 検出長13m、幅0.3～0.7m、深さ0.2～0.25mを測る。溝内より後期弥生式土器片が出土している。

溝5-3 検出長15m、幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.15mを測り、一部途切れ

逆L字状に屈曲する。溝内より中期弥生式土器片が検出されているが、すべて図化できる程のものではない。

溝5-4 検出長14m、幅0.4m、深さ0.2~0.25mを測る。出土遺物はなく、溝の時期、性格等は不明である。

第2節 古墳時代の遺構

今年度調査された古墳時代の遺構の内で、性格を知り得るものは、竪穴式住居15棟、土塙墓3基、古墳及びその関連遺構5基、小型窯状遺構3基、窯状遺構1基である。

この内、竪穴式住居15棟中14棟は、石見川北岸の標高約120mの河岸段丘上に位置し、その他の遺構は標高約130m～150mの石見川南側、天見川に向って西へ派生する丘陵上に位置する。

竪穴式住居

前述したように、検出された15棟中14棟は、標高約120mの河岸段丘上に位置し集落を形成する。古墳時代前期から中期のもので、平面方形の竪穴式住居である。住居5-4・5-10・5-13からは、韓式系土器が出土している。

残り1棟は、標高約140mの丘陵上に位置し、古墳時代後期の平面方形のもので、土器の他に鉄鎌が出土している。

以下、竪穴式住居の規模・出土土器等、表にして示す。

番号	形態	規模(m)	時期	出土遺物	備考
5-3	方形	3.5×3.5	古墳前	土師器片	
5-4	方形	(4.5)×(4)	古墳中	須恵器杯、韓式土器 土師器片	
5-5	方形	4.5×(2.8)	古墳前	土師器壺口縁	
5-6	方形	4.7×4.5	々	土師器片	
5-7	方形	4×3.5	々		
5-8	方形	5×6.4	古墳中	土師器片 須恵器杯	
5-9	方形	(3.8)×(1.2)	々		
5-10	方形	5.4×5.8	々	韓式土器長脣甕	
5-11の1	方形	4.7×(4.3)	古墳前	土師器高環 ミニチュア壺	住5-11の2に 切られている
5-11の2	方形	5.5×6.1	々		
5-12	方形	4.3×(4.2)	古墳中	須恵器壺 ・ 瓢片	
5-13	方形	6.4×5.8	々	須恵器壺、韓式土器 ・ 壺、瓢	
5-14	方形	5.1×5	々		
5-15	方形	3.4×2.9	々		
4-1101	方形	6.2×(5.0)	古墳後	須恵器壺、高環片 土師器片、鉄鎌	

表1 竪穴式住居一覧（古墳時代）

() 内は残存長

土塙墓（図版3、4、41・42）

天見川に向って西へ派生する丘陵の先端部からいずれも検出された。土塙2-701と土塙2-702は近接していて築造されており関連をもつものと思われる。

（土塙2-701） 平面は隅丸長方形で、主軸方向はN-66°-Wを示す。最大長約2.4m・最大幅約1m・深さ0.25~0.3mを測る。須恵器の壺・短頸壺が検出された。

（土塙2-702） 土塙2-701と同じく、隅丸長方形の平面をもち、主軸方向はN-66°-Wを示す。最大長約2.8m・最大幅1.35m・深さ約0.4mを測る。須恵器の甕・台付長頸壺・短頸壺・杯蓋・杯身が検出された。

（土塙4-902） 平面は隅丸長方形で、主軸方向はN-53°-Eを示す。鉄剣が土塙内南東壁沿い中央に、刀先を北東に向け、ななめ上方に傾むいた状態でおかれていた。土器は1点も検出されず、築造年代は確定できない。

古墳及びその関連遺構

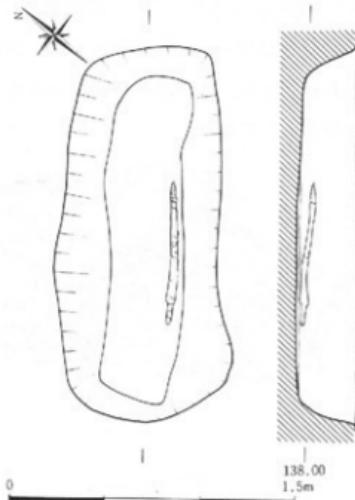
（図版4、39、40、43、44）

土塙墓と同じく天見川に向って西へ派生する丘陵の先端部に立地する。周溝2-701・周溝2-702・溝2-701は、南北に並列しており一群として見る事が出来る。

（周溝2-701） 短径約14.5m、長径約15.5mの円墳で検出幅約0.5~1.7m、深さ約0.3mの周溝があげぐる。封土は後世の削平を受け全く痕跡を留めない。周溝からは須恵器の台付広口壺・高杯・杯身・韓式系土器の把手付鉢が検出された。

（周溝2-702） 径約17mの円墳と思われるが、調査区が制限されている為、全容は不明である。これも封土は完全に削平されており、検出幅約1~5.6m、深さ約0.6mの周溝のみ遺存する。

（溝2-701） 周溝2-702の北側には埴輪が帶状に集中して出土する部分があ

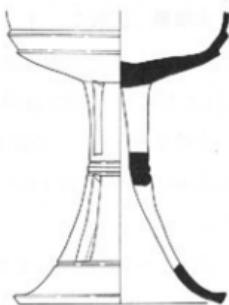


第4図 土塙4-902

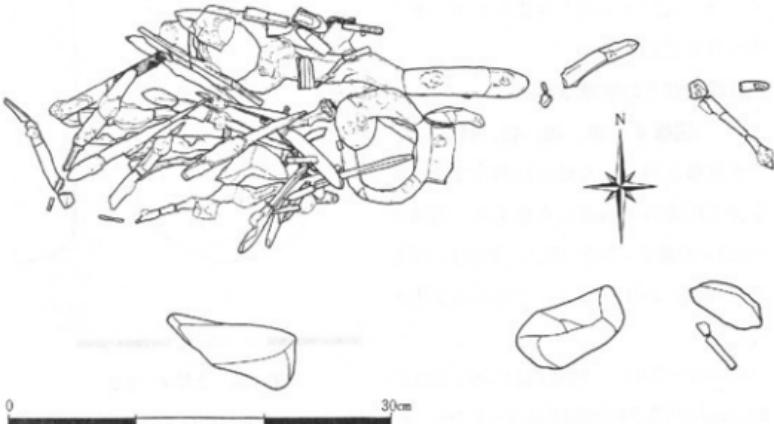
り古墳の存在が想定されるが、詳細を明らかにする事は出来なかった。

(溝4-23) 検出長約4.6m、上幅約2.1~3.1m、下幅約1.0~1.5m、深さ約0.3~0.5mのほぼ東西に走る溝状遺構である。調査区が狭小であり、また、遺構の西側が道路により切断されている為、その全容は明らかでないが、その東側は北東方向へゆるやかに延びる感がある。

遺構内からはこぶし大の礫と須恵器・土師器片が混在して出土しており、ごく一部中世の瓦器も見られる。 第5図 溝4-23出土高杯
須恵器は器台・台付長頸壺・高杯・台付子持ち長頸壺など6C後半に属するものである。また、遺構の北西側肩部から、まとまって、轡などの馬具類と鉄鎌20数点が出土している。



第5図 溝4-23出土高杯



第6図 溝4-23鉄鎌・馬具出土状況

本遺構の出土品は古墳の副葬品的要素が強いが、古墳の埋葬主体部と考えるには、その形態上問題がある。しかし、古墳に関連する何らかの遺構である事は間違いないだろう。

(溝4-901) この溝は、ほぼ東西方向に走り、検出長約4.5m、幅約1~2m、深さ0.4mである。西側は調査区外にあり、明らかでない。

溝の東端より1.4mのところにはピットを設け、器高41.8cmの土師器の壺が置かれていた。これは供獻土器と思われ、底部と胴部に小孔を設ける。同時に壺の側から小形丸底壺も出土している。この事から、この溝は古墳の周溝であると推定されるが、中心主体部は未検出である。

小型窯状遺構（図版6、44）

今回の調査で、3基の小型窯状遺構が検出された。

1号窯は残存状態が良好で、天井の一部まで残っていた。2号窯は、1号窯に伴うと思われる集石の下から検出されており、わずかに床面を留めるにすぎなかった。2号窯廃絶後、1号窯が営なまれたと思われる。

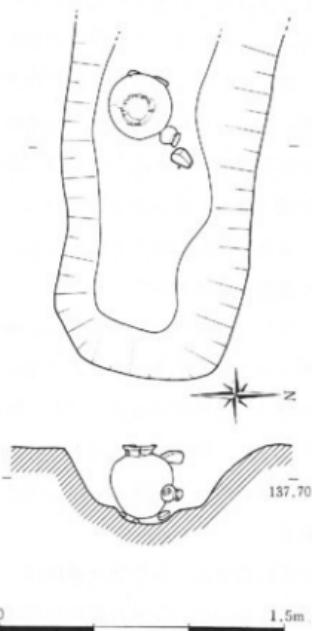
1号窯は、緩斜面を掘り込み粘土を貼って構築している。

平面は、膨らみをもった逆三角形で、焚口から奥壁へ向って幅を増してゆく。また、焚口は、ハの字形に少し外側に広がり、焚口部分は焼土塊が集中し、粘土塊を使用して閉塞していた痕跡がある。焚口は、南東に向う。奥行約1.5m、最大幅約1.2m、焚口の幅約0.47m、天井までの高さは、0.45～0.55mである。

床面は、奥壁に向って僅かに低くなる。煙道は、奥壁中央部左壁よりに孔をもうけ、緩やかなカーブを描きながら真上に上がる。右壁も搔き出し口と思われる径約0.3mの開口部を持つ。

窯内埋土下層内から、須恵器、土師器片が出土したが、床面には遺物は見られず、時期を把握するには至らなかった。

1号窯の右側後方には、大小の石で構成された集石が広がっている。石と石の間の埋土には、炭と焼土が多量に含まれており、これらも、1号窯と関連を持つ



第7図 溝4-901

ものと思われる。

1号窯はその形態から充来言われているように、白炭窯であると推測される。この点については、これまでの発掘例に見られる様に、側壁に掻き出し口が見られ、掻き出し口から外に、炭化物の広がりが見られる。これを、白炭の製造過程と照らし合わせれば、小型窯状遺構が白炭窯であると断言できる。但し、これはあくまで側壁に掻き出し口を持つ場合に限られる。

側壁に掻き出し口がない場合は、蒸し焼きを前提とした黒炭窯が当然考えられる。現在、報告例はあまり多くないが、山口市黒川遺跡⁽¹²⁾に小型黒炭窯と考えられる遺構が検出されている。

しかし、白炭窯であるならば、後述の窯状遺構も白炭窯であり、構造・規模の差異はどう解釈するべきであろうか。これを時期的な違いでとらえるには、棚原窯の様に、前後関係はあっても、概ね時代を同じくする例もあり、無理が生じる。

あるいは、個人消費分用と、商品生産用とを考えられなくもないが、木炭生産地と、消費地との関係が、いつ頃成立したのか全く不明であるので、立証不可能である。

いずれにせよ、小型窯状遺構は、白炭窯である可能性が高く、大型窯状遺構との関連について、今後の研究の課題となろう。

窯状遺構3-1（図版5、45）

先端を若干切り取られた東西にのびる丘陵の西端に、等高線に平行に所在し、焼成部の長さ6.35m、残存幅0.5~0.35mで、主軸をN-18°-Wにとる。床面は、若干西に傾斜する近世の整地により、焼成部上面及び焚口・前庭部は削平されている。北側に、焼土の立ち上がりが見られ、煙道の存在をうかがわせる。

床面には、煙道付近にわずかに酸化層が残るが、全体としては非常に残存状況は悪い。

焼成部より西側（谷）に向けて、幅0.2~0.4mの掻き出し口を7ヶ所もうけ、焼成部と側庭部の比高差は、北側煙道近くで0.3m、南側焚口付近で0.09mである。側庭部は、長さ5.6m、残存幅1.2mで、概ね平坦である。西側は削り取られているが、残存部西端にこぶし大の礫が6つ並ぶ。側庭部には床面に焼土は見られなかったが、多量の炭化物及び焼土ブロックを含んだ褐灰色シルトが堆積しており、特に掻き出し口付近は炭化物の含有量が著しかった。又、褐灰色シルト上面より

ピットを穿ち、平瓶が据えられていた。

この窯状遺構の廃絶時期を出土した平瓶より6C末頃に想定が可能であり、遺物が少ないのでこの種の窯状遺構に、時期決定の指標を与えることとなろう。また、明らかに廃絶時に平瓶を据えている点も、窯といった生産用構築物に対する生業にたずさわった人々の思想を知る上で、注目できる。

今回検出された窯状遺構は、同種のものが、河内長野市では、棚原窯跡で検出されており、又、南河内郡美原町でも類例が見られる。

この種の窯状遺構は、数少ない乍らも、関東から九州まで広く分布する。これらの窯状遺構の性格は、現段階の研究では、白炭窯であるとされているが、白炭製作過程と、窯状遺構の形状を検討すれば、まず白炭窯と見なして相違ないものと言える。

従って、今回の報告にあたっては、白炭窯としての各部位の名称を使用した。この窯状遺構が白炭窯であるならば、白炭の生産が6C末頃には行なわれていたと考えられる。

これは、棚原窯での熱残留磁気測定の結果、導き出された700～780年と言う数値より、100年以上の開きがあり、測定数値と、編年の絶対年代を信ずるならば、少なく共100年は、窯体の形態がほとんど変化していない事を示す事となろう。

河内長野市周辺は、古来木炭生産が盛んであり、特に隣接する和泉横山谷で生産された、横山炭は、著名であった。又、金剛寺文書にも、建久元年(1190)4月に、白炭の記載が見られ、12Cには、天野山一帯で木炭生産が行なわれていた事を示している。

さらに、觀心寺文書永享7年(1435)には、木炭売買の記載が見られ、室町時代には、商品化している事がわかる。又、滝畠所在の光滝寺は、炭焼不動尊と称される不動明王が祠られ、古くは、炭焼きに従事する人々の信仰を集めており、かつてこの地に於いて炭焼きが多く行なわれた事を立証している。

以上の様な点を考えると、河内長野の産業史の中で、木炭生産が大きなウェイトを占めており、白炭生産窯の検出は非常に興味深いものである。しかも、さらに視野を広げれば、黒炭窯との差異であるとか、生産遺跡、特に河内鉄物師との関連等、さらに検討を重ねて行く必要があろう。

(註) 黒川遺跡では、木炭窯としてではなく、火葬斎場として報告されている

が、報告を見る限りでは、火葬窯場とするよりも木炭窯、特に黒炭窯とした方が妥当であると思われる。この点については、いずれ小型窯状遺構について検討を重ねてゆく段階で明確にしたい。

参考文献

- 『棚原窯跡発掘調査概要』 河内長野市教育委員会 1976
- 兼康保明「古代白炭焼成窯の復元」
『考古学研究』27-4 1981
- 野嶋正雄「木炭生産の技術と用具—河内灘窯の技倆を中心として—」
『近畿民具学会年報』第9輯 1985
- 第12回 大阪府埋蔵文化財担当者研究会資料 1985
- 『陶色目』 大阪府文化財調査報告書 第三〇輯 大阪府教育委員会 1978
- 『世界陶磁全集2』 小学館 1979
- 『河内長野市史 第四巻』 河内長野市史編纂委員会
- 『河内長野市史 第五巻』 *
- 『河内長野市史 第九巻』 *
- 藤原学「木炭窯をめぐって一大師山遺跡検出の五・六号焼土壙に関する考察ー」
『河内長野大師山』 関西大学文学部考古学研究第五冊 1977
- 『魚住古窯跡群発掘調査報告書』 平安博物館・明石市教育委員会 1985
- 『黒川遺跡』 山口県教育委員会 1980
- 『陶色』 堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要 大阪府教育委員会 1970
- 『長崎・松浦皿山窯址』 先史15駒沢大学考古学研究室 1982
- 『小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 1982
- 『長池窯跡発掘調査概要』 河内長野市教育委員会 1971

第3節 中世の遺構

三日市遺跡は当初、中世の遺跡と想定されていた様に、現時点でも最も遺構数も多く、当遺跡の中核をなしていると言っても過言ではない。

検出された遺構の種別は、掘立柱建物、井戸、溝、土塙、集石墓、土塙墓、水溜めなど各種に及び、いずれも集落の一部として考えられる。

掘立柱建物は、大規模で主屋的なものから、小屋程度のものまであるが、溝をめぐらすものや、グループを形成するものが見られる。

溝は、水利を目的としたものと、境界の目的を持ったものとに大別できるが、現段階に於いては確実に把握できたものの数はあまり多くない。

また、今回の報告には間に合わなかったが、丘陵の先端部分に方形配石墓の検出を見た。これらから明確に藏骨器と断定できるものや、骨片などは見られなかつたが、特定の方形配石墓を中心にいくつかのグループを形成して展開しており、家族構成等を知る手掛りとなろう。

これらの遺構は、どれも村単位の社会生活に欠かせないものばかりであり、そのどれもが、生活の息吹を感じさせるものである。

袋状土塙（図版10・50）

径は2.1m、深さ1.2mを測り、底部はフラスコ状に広がる。西方向から径20cm～5cmの礫が多量に流入している。

埋土は黄褐色粗砂混り砂質土で、粘質土の堆積は見られない。

この土塙内上層からは、羽釜がほぼ完形で五個体並んで出土したが、これらは人為的に並べられたものとは言い難く、むしろ流入によるものと判断しうる。

袋状土塙出土の羽釜は、大きさが概ね4つのグループに大別出来るが、いずれも瓦質であり、又、口縁は内傾するといった共通点を持つ。各個体によって、若干の差異はあるものの、外面調整はケズリ、内面調整はハケ調整によるものであり、製作時期・製作地をほぼ同一にするものと考えられる。その年代については共伴した瓦器塊からも14C末のものと言える。

この土塙の性格は埋土状況から水溜などが考えられるが、出土遺物の大部分が羽釜である事を思えばさらに検討を要するものである。

井戸（図版7・8・9・51・52・53）

(井戸 3-1) 径2.5m、深さ0.7mの素掘りの井戸である。埋土の堆積状態から推測して底部が2時期に分かれ、中央部の50cm角程度の扁平な石は、当初の底からある程度埋った段階で新たな底面として入れられたものと考えられる。

遺物は、バラエティに富み、瓦器塊・皿・土師質羽釜・小皿・須恵質練り鉢・青磁碗などが見られ、これらの時期は13C末～14C初のものと言える。

この井戸から南方向に溝が延び、水溜と思われる方形土塙に接続し、溝に隣接して、焼土塙が見られる。又、西方向には石組溝が見られる事から、この井戸を中心に、一つの生活空間が構成されていたと考えられる。

(井戸 3-2) 径2.06m・深さ0.75m摺鉢型の素掘り井戸である。上層に流木が見られるが、これらは、井戸の機能を失ってから流入したものと思われる。又、この井戸は、井戸を作成した面とその上層の造構面との間に、堆積層が見られる事と、井戸の位置が、谷状地形の底にあたる事から、故意に埋めたと考えるよりも、自然埋没したものと推測できる。

時期は、出土遺物から見て、14C後半と考えられる。

(井戸 3-9) 建物群内に存在し、上径0.47m・深さ2.65m・掘方上面径1.7mを測る。

上から1mまでは径10cm～30cmの礫で組まれており、中心に羽釜を据える。これより掘り方が径0.9mに狭まり、深さ1.8mまでは平瓦と丸瓦と円礫とにより組まれ、更に井戸底までは平瓦のみで組まれる。

深さ1.4mの地点で、瓦器小皿・台付小皿・曲物底が、ほぼ同レベルで出土しており、ある時期、ここが底になっていた事をうかがわせる。又、石組みと瓦組みの境の羽釜も当初から据えられていたとは考え難く、ある程度埋設した段階で据えられていたと考えられる。

又、この井戸に使用された瓦は、昭和59年に大阪府文化財センターが行った試掘調査の際、井戸の北150mの大日寺跡と推測される地点で同一のものが出土しており、寺と建物群との関連を考える上で一つの指標となろう。

井戸の時期は、井戸底から時代を決定しうる遺物は出土しなかったが、井戸中央部に据えられた羽釜は14Cのものと考えられ、井戸の存続期間を示す資料となる。この他に出土している瓦質台付小皿等は、時期決定よりも、昨今云われている、井戸祭祀に関連づけられるものとして注目できる。

(井戸 4-307) 建物群を構成するピット群の中に位置し、素掘りの井戸と思われる。掘方はほぼ円形で、上縁の径0.9~1.0m・底部の径0.45m・深さ0.85mである。

遺物は反転復元実測出来るものを含めて瓦器塊17点、土師質小皿2点を数え、完形が比較的多い。

瓦器塊は断面三角形の高台を持つもの4点と高台を持たないもの3点があり、いずれも、14C中葉に属するものである。

土塙（図版10・11・54）

(土塙 3-60) 南北に長軸を取り、長2.41m・幅1.05m・深さ0.27mを測る。ほぼ楕円形の土塙である。

内部は、径25cm~10cm程度の礫が見られ、炭化物を多量含んだシルトが埋土である。礫及び出土遺物は火を受けた痕跡が見られるが、さほど高温ではなく、又、土塙の床・壁も、火を受けた痕跡は見出せなかった。

この様な形状の土塙は、火葬墓、しかも荼毘にふした後、そのまま埋葬するタイプのものが考えられるが、土塙内埋土からは、骨片は検出しなかった。しかしこの土塙は、火葬墓である可能性が高い。

出土遺物は、天目茶碗・菊皿・施釉皿・織部鉢・青花皿であるが、青花皿を除きいずれも17C初~中葉にかけてのものであり、この土塙のこの時期の範疇に入れられよう。

(土塙 3-96) 長さ1.46m・幅0.9m・深さ0.15mの、南北に主軸を取る土塙である。又、上面は削平を受けている。

長辺両端に一辺20cm程度の礫を並べる。又、瓦器小皿・瓦器塊・台付皿が並んで出土した。

土塙の性格については、限定し難いが、土塙墓である可能性が高い。又、この土塙で注目されるのは、出土した遺物が他のものとは形状が異なる点である。三日市遺跡出土の瓦器塊は、いわゆる和泉型と呼ばれるものであるが、高台が三角形を呈する時期のものは、口径に比して器高が低い。しかし、この土塙内出土のものは口径が概ね同数値を示すが、器高は他と比べて2cm近く高い。又、台付皿は和氣遺跡にも類例が見られるが、紀ノ川流域でよく見られるものである。

この点から、出土瓦器が紀伊のものである可能性が高い。全出土遺物を検討し

ていない段階で断言は出来ないが、三日市遺跡が、大和・和泉・紀伊と隣接するという立地条件を考えると興味深いものがある。

ピット（図版53）

（土器集合ピット4-511）この種のピットは3個検出した。径50~65・深さ5~7cmをそれぞれ測る。

埋土は、暗褐色細礫混りの粘土で、ピット内より土師質皿・小皿の完形品が多数出土した。ほとんどの遺物は、ピット内に意識的に埋められたものと考えられる。いずれのピットも建物跡等の遺構の配置を復元出来る様な位置関係ではなかった。

参考文献

- 埋蔵文化財研究会『古代・中世の墳墓について』第14回 埋蔵文化財研究会 1983
- 「下石田遺跡」 第4次調査概報・総括 山口県教育委員会 1980
- 「狹山・鞋里遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1978
- 「石仏遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1982
- 「和氣」 和氣遺跡発掘調査報告 和氣遺跡調査会 1979
- 「福田天神遺跡」 龍野市教育委員会 1982
- 広瀬和雄「中世への胎動」 「日本考古学」 6 岩波書店 1986

第4節 近世の遺構

土塙（図版11・55）

（土塙3-156） 径1.6m・深さ0.7mで上面は整地の為削平を受ける。内部の桶は、底板7枚・側板19枚が残存する。

近世の埋桶として考えられるのは棺桶（座棺）と肥桶であるが、同様な土塙が直線的に並んでいる点などから、棺としては径が大きいものの、棺であると推測出来る。土塙3-156を始めとする土塙群を棺とするならば、これら土塙群が埋葬となる事から、現在土塙群の東に所在する片添大塚墓地が詣り墓であるとの推論が出来る。片添墓地は墓地整理を受け、当初の姿を知る由もないが、立地的には、調査区と谷を挟んだ丘陵斜面上にする。これらは詣り墓・埋め墓の関係を持ち、埋め墓の所在が人々の記憶から消えた時期となって整地を受けたものと考えられよう。

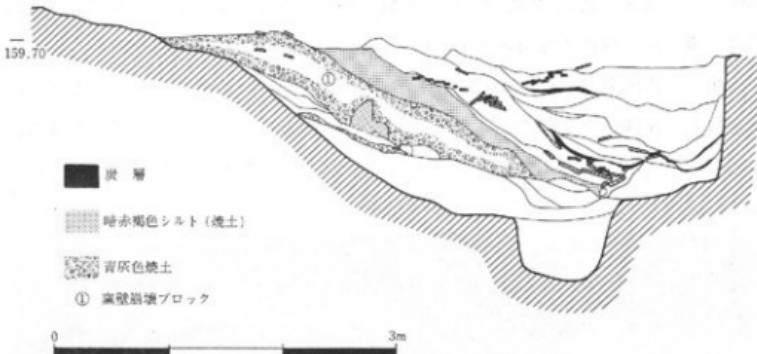


第8図 潟池遺物出土状況

溜池

幅5m、深さ1.5mで、くの字形を呈する。底には青灰色粘土が堆積する。深さ0.8mで石列及び木材等が出土した面がある。丘陵稜線に垂直に掘り込んでいる。

出土土器は、東側斜面から流入した状態で出土し、大半が伊万里の、いわゆるくらわんか碗であり、若干唐津なども混じる。溜池の北端から溝が延び、石組の水溜めに続く。周辺に居住に結びつく遺構が見られない事から、中世遺構面の上面で検出した耕作痕と関連あるものである。時期は18C中頃以降であろう。



第9図 瓦窯3-1断面

瓦窯（図版12・55）

今回の調査では2基検出した。うち、3-2はいわゆるダルマ窯と呼ばれる平窯であるが、半分を削平されており、遺物も瓦片が数点出土したのみである。

3-1は、長さ5.9m、幅2.8mで、焼成部分の長さは3.8mである。規模も大きく、登窯と思われる。主軸はN-37°-Wである。

前庭部には長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.25mの楕円形の土塹が確認されたが操業時には埋められていたと思われる。

窯本体床面の傾斜は20°である。

残存状態は悪く、床が若干残る程度であり、天井・窯壁は完全に崩壊している。

埋土の堆積状態は床面の下に黄白色粘質土層、焼土及び窯壁崩壊ブロック上層には粘質土層があり、その堆積状態から、明らかに故意に埋められたものである事を示す。

窯内の瓦片は、軒丸・軒平・丸平があり、棟瓦も見られる。これらは、瓦窯の

廃絶時に、瓦窯を取り壊した残土と共に入れられたものと考えられる。

近世に於いては、ダルマ窯と称される長さ2m程の平窯が出現するが、登窯の形を持ったこの窯については、構造等、不明な点が多く、今後の課題となろう。

また、瓦窯周辺には、粘土採掘孔と思われる土塙が検出され、ここに瓦製作の工房所在をうかがわせる。これは、瓦焼きが行われていたという地元伝承と兼ね合わせて、興味深いものである。

参考文献

- 鷹井綱之助『かわら日本史』 雄山閣 1980
- 『松本市新村秋葉原遺跡』 松本市教育委員会 1983
- 『平原瓦窯址』 熊本県教育委員会 1980

第4章 遺物

第1節 繩文・弥生時代の遺物

繩文時代の土器（図版13・56）

繩文式土器は①第5調査区の包含層（暗褐色土）内に数片が混入したもの（2）、②工場の基礎建設時に混入したものと考えられる擾乱坑出土の土器（1）、加えて③土塙5-1出土の土器（3）の大きく3つに分けることができる。

①については、すべて細片であるため詳しい考察は後に記したい。②の土器は、口縁部と底部が検出され胴部は失われていた。口径46cm（推定）、現存最大径48cmをはかる。粗製であって、口頸部はゆるやかに外反し、口縁部直下に刻み目突帯を1条貼り付ける。また肩の真上にも同様の突帯をめぐらし、その下に一本の沈線を施す。成形は、底部から粘土紐を積み上げており、口縁部外面は横方向に指ナデ、内面は縦方向に指でおさえ、その部分の縫目を消している。底部は尖底で、内外面とも摩耗がいちじるしく調整は明らかにできていない。この鉢は繩文晩期の船橋式に属するものと考えられる。

③の土器は、波頂部が三角状に尖るものと大きな四角のものとの交互に組み合わさった、ゆるやかに外反する口縁をもち、胴がくびれた平底の深鉢である。文様は口縁波頂部下に逆三角形、あるいは逆台形を呈するものと山形文様の二つに分かれ、胴部のくびれ部からはりだし部にかけては斜行凹線文の上に楕円形文、あるいは楕円形連続文がある。胴部から底部にかけては縦方向の凹線文が施されている。この深鉢は連続文を有し主文様が胴部まで下がることなどから、繩文中期末、後期の両面の特徴をもったものと考えられるが、現在整理中であり実測図、など詳しい報告は後に記したい。

弥生時代の土器（図版14・56）

弥生式土器は中期から後期にわたる土器が出土したが総数は少ない。

弥生時代中期の土器

弥生中期の土器は溝5-3、竪穴住居跡5-1、5-2より出土している。溝5-3出土の土器は細片であり、図示できるものはなかった。住居5-1出土の

土器は甕と器種不明片である。

甕 (4)

口縁部は逆L字状に外反させ、ほぼ水平にひろげたものである。最大径は胴部の上端にある。口縁部外面は横方向のナデ、器体外面、胴部から底部にかけて縱方向のヘラ磨き、内面肩部はヘラ磨き、胴部は不定方向のナデ調整をしている。外面肩部に少量の煤がつく。

甕 (5)

口縁部から胴部にかけて検出され、底部は失われていた。口縁部はくの字状に外反し、最大径は胴部上端にある。口縁部外面は横方向のナデ、外面肩部から胴部及び内面はヘラ磨き調整をしている。

高杯脚部 (6)

脚端部は斜め上方につまみ上げ横方向のナデ調整をしている。脚底部端はヘラで削り平滑にしている。柱状部はやや外反ぎみに立ち上がりヘラ削りの跡がうかがわれる。

これらの土器は畿内第Ⅲ～Ⅳ様式のものと考えられる。

弥生時代後期の土器

弥生後期の土器は溝5—2から甕の体部片が出土している。体部外面は粗雑なタタキを有する。遺物がわずかであるため詳細は述べられないが、畿内第V様式のものと考えられる。

石器 (図版14)

石錐 (7)

石錐は竪穴式住居5—1の埋土内より一点出土している。形態は錐部とつまみ部に分かれるもので、身部の断面が四角形を呈する。身部からつまみ部にうつる股の部分の片側にあらい二次調整をいれ、片側は大きく外反するカーブをもって身部からつまみ部につながる。長さ3.9cm、つまみ部幅2.5cm、厚さ0.5cm、身部幅0.55cm、厚さ0.35cmをはかる。材質はサヌカイトで弥生時代中期のものと思われる。

参考文献

- 『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16』 馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ 1976
- 泉 拓良 家根祥多 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」
『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』 1985
- 『長原遺跡発掘調査報告』 1978.3 1982.3改訂 長原遺跡調査会
財団法人大阪市文化財協会
- 『池上・四ツ池』 1970 第2版和国道内遺跡調査会
- 『縄文文化の研究』 雄山閣
- 『安満遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会

第2節 古墳時代の遺物

土師器（図版14～16、57、58）

古墳時代前期から後期にわたる土師器が出土している。

壺（22）

溝4-901から出土したもので、器高41.8cm、口径18.6cm、胴径33.4cmを測る。壺体部中央やや下方に外側から、また底部や上方に外側から、計2ヵ所に焼成後穿孔されており、供獻土器と思われる。

外反した口頭部は、外側にびい稜をつくり、内側にゆるい段をなして上方に折れ曲り、内外面とも横にナデている。体部はやや上方で肩のはった球形で内面はヘラ削りして器壁を薄くしている。体部外面はハケ目で仕上げる。

小型丸底壺（21）

上記の壺の側から出土したもので、器高10.2cm、口径7.4cm、胴径9.6cmを測る。体部はほぼ球形をなし、口縁部が直線的に外上方に開く。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、体部外面は体部中位より上をハケ目、下をヘラ削りにより調整し、体部内面は指圧による。

小型丸底壺（17）

住5-11-1から出土しており、残存高6.2cm、口径9.2cm、胴径8.4cmを測る。体部は高さのやや低い扁球形で、口縁部はまっすぐ外上方に伸び、口径は体部最大径より大きい。

口縁部外面はヨコナデによる調整で、内面はハケ目の跡がわずかに残る。体部外面は指圧で成形しているが、内面の調整は不明である。

壠（18）

住5-11-1から出土しており、器高5.8cm、口径4.4cm、胴径6.4cmを測る。体部は球体に近く、短かく直立した口縁部をもつ。内外面とも剥離が著しく調整不明である。

甕（13）

住5-13から出土したもので、口径31.4cm、残存高7.5cmを測る。やや内弯ぎみに立ち上がった肩部から口縁部がくの字状に外反する。口縁部外面はヨコナデで調整し、内面はハケ目の後、ヨコナデを施している。肩部内外面はハケ目で調整

する。

甕 (19)

住5-13から出土したもので、器高14.8cm、口径10.8cm、胴径14.3cmを測る。体部はやや縦長の球形をなし、外上方にまっすぐ開く短い口縁部をもつ。

口縁部は内外面ともヨコナデを施し、体部外面は概ねハケ目調整を行なうが、底部附近は不定方向のナデを施している。また、体部内面上方はヘラ削り、内面下方は不定方向のナデによる調整である。

高杯 (16)

住5-11-1から出土したもので、器高12.7cm、杯部径15.6cm、脚部高7.9cm、脚部径11.6cm。

杯部は斜め外方に伸び上がり、端部は丸い。内外面ともヘラ磨き調整を施す。脚部は脚高2/3下方でラッパ状に拡がり、端部は丸い。外面はヘラ磨き、内面にしづら目が残る。

製塩土器 (11、12)

製塩土器は、石見川北岸の調査区の包含層（暗褐色粘質土）と住5-12、住5-13の埋土中から数点検出されている。

形態はすべて薄手コップ型丸底を呈するもので、口径3.6~3.8cm、器高は6.5cm以上である。ただ器形は同一形態を示すものの2通りあり、灰白色のものと橙色のものとに分類される。

これらの製塩土器の時期は共伴する土器より5C後半のものと考えられる。

韓式系土器（図版14~16、57、58）

1. 出土状況

今年度の調査区のなかで、石見川北岸の標高約120mの河岸段丘上の調査区から古墳時代の竪穴式住居が15棟検出された。その内8棟から須恵器（I-3~5）と土師器が共伴して出土している。このなかで住5-4、住5-10、住5-13の住居と包含層から韓式系土器が出土している。

各遺構出土の韓式系土器は以下の通りである。

住5-4 平底鉢形土器・平行タタキの破片

住5-10 長胴甕（9、14）・平底鉢形土器・甑・平行タタキの破片

住5-13 甑（15）・把手付鍋・丸底甕・平行タタキの破片

包含層 平底鉢形土器・甌・把手付鍋・丸底甌・角形把手(8)・平行タタキの破片

以上を器種別に見ると平底鉢形土器は包含層、住5-4ともに外面にハケ目が施されており、やや丸底氣味である。甌は住5-13(15)が外面に荒いハケ目が施されており、把手は角形を呈している。これはおそらく舌状に変化する過渡期のものと考えられる。他は平行タタキが施された破片である。把手付鍋はいずれも平行タタキが施されたもので器種のなかでは点数が多い。長胴甌はハケが施された(14)と平行タタキが残る(9)とがある。(9)明らかに回転ナデによってタタキ目を消している。丸底甌も平行タタキで底部外面に煤が付着している。

以上のように現整理段階では当遺跡出土の韓式系土器の特徴は出土土器の90%に平行タタキが施されており、格子タタキは細片が一片みられただけである。

また、韓式系土器を出土した住5-10、住5-13のみカマド状の遺構が検出されており注目される。

なお、この調査区の対岸丘陵突端から円墳(周溝2-701)が検出され、周溝から平行タタキの把手付鍋(20)の破片が出土しており、時期的にも近接していることから古墳と住居跡との関係が考えられる。

2. 周辺の状況

韓式系土器の府下での分布は河内平野の周辺部と泉州地域の一部とに集中している。当遺跡にもっとも近接している出土地は一須賀古墳群であるが、これは古墳石室からの出土である。集落跡では藤井寺市土師の里遺跡が最も近い。位置的には石川の下流部と最上流部との関係になる。しかし、この間の石川流域には現在のところ集落跡からの出土は皆無の状態である。

3.まとめ

なぜ当遺跡のような河内でも最深部に位置する遺跡から単独で韓式系土器の出土が確認されたのであろうか。それは今後の課題であるが、ひとつには当遺跡の所在する旧錦部郡はその郡名となった錦部氏が百濟の速古王を祖とする渡来系の人々であるということがある。このことからたちだに韓式系土器の使用者と結びつけることはできないが、古墳時代中期末ころには三日市遺跡において渡来系あるいは渡来系の人々と関係の深い人々の集落が営われていたと考えられる。

簡単な記載であるが整理中であり最終の報告書の段階で詳細を記したい。

埴輪(図版18、19、59)

今回図示した埴輪は出土した埴輪の出土量に比較すれば極めて少数である。埴輪は全て溝2-701、溝2-702からでコンテナ約20箱以上である。

出土した埴輪の器種は円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、盾形埴輪であるが、整理中の為全容は把握し得ない。

1. 出土円筒埴輪の概略

口縁部

- Ⓐ直口で端部が平坦面を成し、内外面ヨコナデ調整。
- Ⓑ短かくゆるく外反し、端部が面を成し、外面ハケ、内面ヨコナデ。
- Ⓒ短かくゆるく外反し、端部が若干凹面を成し、外面ハケ、内面ヨコナデ。

内面調整

全てタテハケが施されている。

底部調整

- Ⓐ接地面が断面より薄く、2次調整が内外面指おさえ、外面板状工具によるおさえ。(37)
- Ⓑ接地面が断面より厚く、2次調整が内面ハケによる。

タガ

断面が不整形でヨコナデによる調整。

最下段のタガは断続ナデ技法状のものが見られる。

透し

円孔

焼成

無黒ハンで須恵質のものが見られる。

2. 人物埴輪(38、39)

2点出土した。いずれも腕の部分である。(39)は、腕の部分に鳥足が見られ、おそらく鷹匠埴輪の部分と考えられる。(38)肩から腕の部分である。詳細は不明である。

3. 盾形埴輪(36)

線刻の見られる破片が数十点出土しているが、詳細は不明である。

以上の様に、現段階では川西宏幸氏の編年の第V期に相当し、最下段のタガの

調整が連続ナデ技法と確定できれば、時期的に6世紀中葉から後葉に比定し得る。

須恵器（図版17、18、58、59）（表4）

本遺跡から出土する須恵器で最も古式なものは、中村編年のI型式第3段階に属するもので、石見川北岸の調査区の包含層より出土している。また、竪穴式住居や周溝2-701などからも、I型式第3～5段階のものが検出されている。次いで、6世紀代の須恵器も多く見られるが、現段階では7世紀代のものは見られない。

鉄器（図版19、20、64）

1. 鉄鎌（44～64）

溝4-23から馬具と共に出土したもので、その形態から3つに分類できる。

Ⓐ広根式に属するもので、刃部長4.7cm、刃部幅2.9cmで、刃部の平面は二等辺三角形を呈し、先端部でやや鈍角になる。範被部及び茎部は欠損しており不明である。刃部は両丸造りと思われる。（44、45）

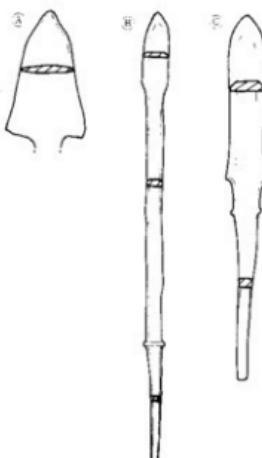
Ⓑ細根式のもので、短い刃部に長い範被をもち、範被部と茎部の間には棘状突起を有する。刃部は片丸造りで断面は台形を呈し、範被部と茎部の断面はともに方形である。刃部の長さは2.7～3.0cm、幅0.8cm、範被部の長さは9.0cm、幅0.6cm、茎部の残存長は4.3cm、幅0.4cmである。（62～64）

Ⓒ柳葉式のもので、棘状突起により刃部と茎部に分けることができる。刃部長7.2～7.7cmで、棘状突起から1.5～2cmのところに最大幅（1.3～1.5cm）をもつ。刃部は片丸造りで断面は台形を呈する。（46～61）

この内、Ⓒは刃部の長さに比べ、その幅が非常に狭く、柳葉式としては他に類例のないもので注目される。またⒷとⒸは刃部の断面が台形を呈する片丸造りで、棘状突起をもつという点で一致しており特徴的である。

2. 馬具（40～42）

溝4-23から鉄鎌とともにいくつかの馬具が出土している。素環鏡板轡1点、杏葉のものと思われる縁金具1点、鉗具1点、用途不明金具1点である。現在、

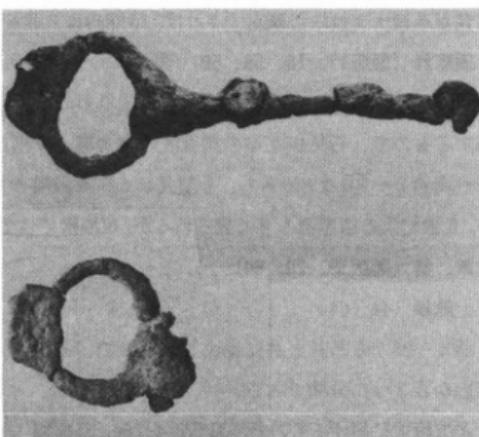


第10図 出土鉄鎌模式図

保存処理中であり、詳細は
本報告に期したい。

3. 鉄劍（43）

土塁4-902から出土した
もので、鉄劍の全長78.4cm
最大幅4.2cm、厚さ0.3~0.4
cmである。茎部は長さ16.5
cm、幅は茎先付近で1.7cmで、
X線写真によると茎先から
1.6cmと9.6cmの所に目釘穴
が見られる。遺存状態はよ
く木質もよく残っている。



第11図 溝4-23出土環鏡板巻

参考文献

- 『発志院遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第41号 奈良県立橿原考古学研究所 1980年
- 『鷺向』 奈良県桜井市鷺向遺跡の調査 橿原考古学研究所 1976年
- 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』 兵庫県三田市教育委員会 1983年
- 『大和二塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念調査報告 第21号 奈良県教育委員会 1962年

第3節 中世の遺物

三日市遺跡では、膨大な量の中世土器を見た。その大部分は、瓦器、土師質土器といった、いわゆる日常雑器である。輸入陶磁器も見られるが、その量はさほど多くはない。具体的な数字は出していないが、組成を見ると、瓦器（塊・皿）が最も多い。

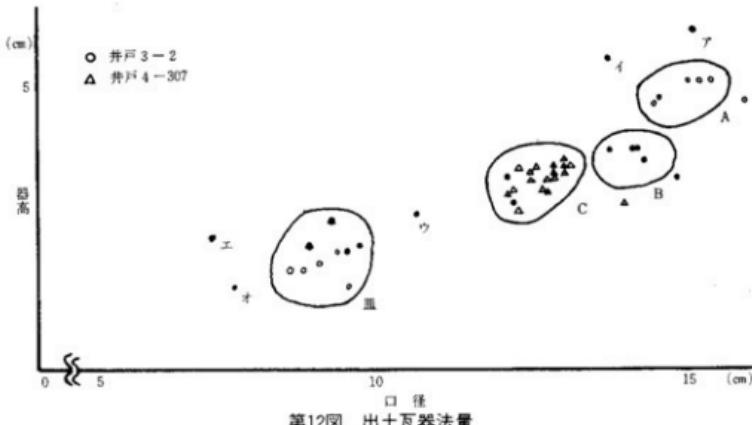
瓦器塊（図版20・21・22・23・24・25・26・60・61・62）

古い時期のものから終末期のものまで見られる。数量的には少ないが、古い時代のものは、全体に法量が大きく、内外面共にヘラミガキを施すもので、建物5-1出土のものがこれにあたる。数量的に多いのは、高台が小さい、あるいは高台を持たない瓦器塊で、3つの型に大別できる。これらを仮にA・B・Cとするならば、それぞれ下記の様な特徴を持つ。

- A. 口径15~16cm、器高5cm程度。高台は三角形を呈し、内面にヘラミガキ、見込みに平行線、鋸歯状・渦巻のヘラミガキを施す。井戸3-2出土のものがこれにあたる。
- B. 口径14~15cm、器高3~4cm。高台は三角形を呈する。内面にヘラミガキ、見込みに平行線、渦巻状のヘラミガキを施す。井戸3-1出土のものがこれにあたる。
- C. 口径12~14cm、器高3~4cm。高台は低いか、または高台がない。内面、見込みに粗略化されたヘラミガキを施す。井戸4-307出土のものが該当する。

この3つのタイプは、法量もさる事ながら、AからCへ移行するにつれて粗製となる傾向がある。この編年はA→B→Cの順序と推測され、時代が下るにつれ、器形が小型化し、高台が消滅する。これを尾上実氏によって行なわれている、南河内における瓦器塊の編年案に照合すれば、AがⅢ-1、BがⅢ-3、CがⅣ-2に相当する。これに従えば、これらの瓦器塊の年代は13C前半から14C中葉に限定できる。また、第12図、アの塊はI-2に相当し、11C末と思われ、さらにウの塊はⅢ-4に相当し、15C初に比定できる。

以上の瓦器塊はいずれも、和泉を中心に中・南河内、紀伊、さらには備前、讃岐、豊前にまで広く西日本に分布する、和泉型瓦器塊と称されるものである。二



第12図 出土瓦器法量

日市遺跡も、周辺の遺跡同様、和泉型が出土瓦器塊の大部分を占めているが、第12図、イの塊の様に、明らかに和泉型とは形態が異なるものもある。イは土塙3-96出土の瓦器塊で、器高が高く、口縁部は内傾し、法量だけを見れば和泉型では非常に古い時期にあたる。しかし、高台は低く、その形態も三角形を呈し、器厚も薄く、全体に粗製である。この様な特徴のある瓦器は和泉型に類例を求めるべく、むしろ、紀ノ川上流域の伊都郡に見られる瓦器塊にその類例が求められる。伊都郡を中心に分布する瓦器塊は、大和型の影響を受けた形態を示し、和泉型では12Cには消える口縁部の沈線が、14C前まで見られるなどの特徴がある。イの瓦器塊はこれらの特徴を持つもので、紀伊型の瓦器塊であると言える。三日市遺跡が和泉・大和・紀伊の三国に隣接している立地条件から、これらの地域との交流が十分考えられ、和泉型・紀伊型瓦器塊の出土は、当時の物流を示していると言えよう。また、出土した紀伊型瓦器塊は、13C中頃と比定できる。

瓦器皿（図版20・21・24・60）

法量に若干ばらつきが見られるが、口径8~10cm、器高1.5~3cmの範囲に納まる。外面はユビオサエとナデで、ヘラミガキを施すものは見られないが、内面は渦巻状・平行線のヘラミガキが見られるものと、ヘラミガキが全くないものがある。

また、土塙3-96出土の台付皿（図版24-100）は、紀伊型瓦器塊同様、紀ノ川流域で類例が見られ、井戸3-9出土のもの（図版24-99）は、内型成形によるものであり、他にあまり例を見ない。出土地点が井戸の底である点など考慮して

も、これをミニチュア製品とするか、**「杯」**として独立した器種とするかについては、現段階で結論は出せない。瓦器塊と違い、皿は特に極立った形態変化を示さない為、皿自体で独立した編年を行なうのは困難である。従って伴出する瓦器塊などと共に検討を加えねばならない。しかも和泉型瓦器塊の最終末期のものと瓦器皿は、法量的に近似する数値になるので、法量だけでは塊と皿の判別はできない。今後、塊・皿の名称を使用する以上、その違いを明確に把握する必要がある。

皿状の器形を示す瓦器の調整は、内面に不定方向のナデや、ヘラ状のものでガキ取った様な調整が見られる物、いわゆるヘソ皿状の形態を示すものと、内型成形し、その後ヘラミガキを施すものとがある。

瓦器塊は、その成形に内型を使用するものであるならば、その系統を引くものを塊とし、それ以外の方法で成形されたものが皿と考えられる。

土師質皿（図版26・60）

大皿と小皿の二種に大別できる。大皿は径約15cm、高3cm。小皿は径約10cm、高1.5cm。

この相違は年代等の違いによるものではなく、用途に応じて大きさの違いが生じたものと考えられ、事実、P 4-511出土のものは大小のセット関係を持っている。（図版20-66・67・69・70・71・72・73）しかし、径15cmを越える大皿は稀少で、大半は径10cmの小皿の範疇に入るものである。小皿はさらに精・粗の二種に大別できるが、粗製のものが圧倒的に多い。従って、粗製の土師質皿は瓦器塊などと共に日常生活に極めて密接な関わりを持っていたと言える。

成形・調整は手づくね、あるいは、底部がヘラによる切り取りと思われるもので、ごく少数ながら底部が糸切りによる、畿内では出土例のないものがあり、これは紀伊の土師質土器であろう。

また第13図の様な、径4~5cmの小皿も、浅い溝に散らばって数点出土したが、この類の皿は特殊な性質を持つものと考えられる。

羽釜（図版27・28・29・30・62）

材質は瓦質・土師質・須恵質が見られるが、瓦質が最も多く、須恵質は稀であ



第13図 溝3-87出土土師質小皿

る。瓦質羽釜は、全体では相当の個体数があるが、製作技法・器形に共通点がいくつか見られる。

1. 口縁部、頸部、鋸が回転ナデによる。
2. 体部、外面上部がヨコ方向のケズリのちタテ方向のヘラミガキ。
3. 内面ハケ、ナデ調整。
4. 口縁部がやや内傾する。

勿論、すべての羽釜にこの条件が合うわけではないが、技法の共通点は、生産地をある程度限定する材料であると言える。また、時期が下るにつれ、小型化していく傾向を見るが、口径40cm程のものと、20cm程のものとは共存しており、一概には言えない様である。

輸入陶磁器（図版26・31・62）

青磁・白磁共に少量ながら、ほぼ同数が出土している。しかし細片が大半で実測に耐えないものが多い。

青磁は龍泉系・同安系共に見られるが、越州系は現時点では出土していない。数量的には龍泉系碗が大半で、皿はあまり見られない。

白磁も同様に碗が多く、特に玉縁碗が大部分である。皿は青磁と比して多いが器形は高台がなく、口縁が外反し、底部が広いものが大部分を占める。

青花白磁は、明代と思われるものが一点（土塙3-60）のみ出土しているが、国内製品である可能性を一掃する事はできない。

瓦（図版34）

石見川南岸の台地状を呈する丘陵の頂上に、広く出土しているが、大阪文化財センターの試掘調査地以外では、まとまった出土は見られず、瓦葺きの建物が存在していない事を示している。井戸3-9出土の瓦（図版34-180・181）は、大阪文化財センターの試掘調査地の瓦と同一のものである。

今回、軒丸瓦は出土せず、軒平瓦は数点出土した。軒平瓦は2種に大別が可能で、連珠文に、郭線を持つものと、持たないものに分けられる。郭線を持つものは持たないものに比べてやや小振りである。調整は二種同じで、平瓦部に布目が若干残るが、大部分をケズリで消し、瓦当下面はヨコ方向のケズリ、裏面はタテ方向のケズリ、両端部は面取りを施している。連珠の数は、郭線を持つ方が12、持たないものは14である。

丸瓦は玉縁を持つものと、いわゆる行基式の2種が出土しているが、行基式のものは小型で数も少ない。

いずれも、時期は室町時代初のものである。

木製品（図版35）

三日市遺跡は丘陵上に位置する為、木製品の出土数はあまり多くなく、しかも出土地点は井戸に限定される。

種類は曲物、木錘、井戸枠、杭、漆器片が出土している。

曲物 底だけが出土しているが、井戸3—9出土のものは一部、側が残っていた。薄板一枚で5mm程重ねて竹釘で固定し、さらに3ヶ所に竹釘を打つ。底の径は13.2cm、厚さ0.7cm。

木錘 井戸3—1で出土。長さ13.8cm、最大径4.8cm、くびれ部径1.8cmの鼓型を呈する。丸木を中心へ向けケズり出し、くびれを作ったもので、両端には樹皮が残る。蘆編み用の木錘で、よく「楓の子」の名称で報告されているものである木錘は、蘆・米俵などの作成には欠かせないものであり、中世の三日市に於いては日常的な道具であったと言える。

漆器 すでに木質部は失なわれ、朱色漆の細片のみ出土した。

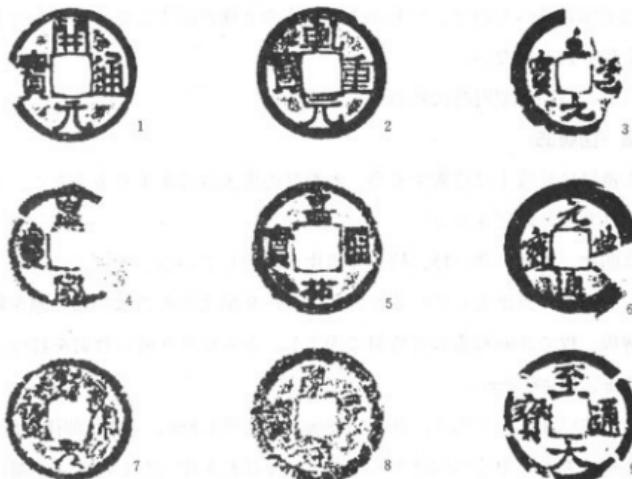
輸入銅錢

いずれも包含層内で、しかも、すべて単独での出土である。破片を含めても、北宋錢が多く、明錢は出土を見ていよい。

（第14図・表2）

	名 称	材 質	時 代	鑄 造 年 代
1	開元通宝	青 銅	唐	武徳4(621)初鑄
2	乾元重宝	青 銅	唐	乾元2(759)
3	至道元宝	青 銅	北 宋	至道年間(995~997)
4	皇宋通宝	青 銅	北 宋	宝元年間(1038~1040)
5	嘉祐通宝	青 銅	北 宋	嘉祐年間(1056~1063)
6	元豐通宝	青 銅	北 宋	元豐元年(1078)
7	紹聖元宝	青 銅	北 宋	紹聖年間(1094~1097)
8	慶元通宝	青 銅	南 宋	慶元年間(1196~1200)
9	至大通宝	青 銅	元	至大年間(1308~1311)

表2 出土輸入銭一覧



第14図 出土輸入銭拓影

参考文献

- 尾上実「南河内の瓦器境」『藤沢一夫先生古希記念文化論叢』 1983
- 川越俊一・井上和人「瓦器焼製作技術の復元」『考古学雑誌』第67巻2号 1981
- 川越俊一「太和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983
- 「和気」と和氣遺跡発掘調査報告 和氣遺跡調査会 1981
- 「紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ」和歌山県教育委員会 1980
- 「野田・藤並地区遺跡第2次整理版報」和歌山県教育委員会 1984
- 「東家遺跡発掘調査概報」橋本市教育委員会 1984
- 橋本和久「瓦器境の地域色と分布」「上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会 1980
- 淡谷高秀「紀伊の中世土器」「中近世土器の基礎研究」日本中世土器研究会 1985
- 尾上実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器境」「中近世土器の基礎研究」日本中世土器研究会 1985
- 「高野山発掘調査報告書」考古学研究室調査報告第3号 元興寺文化財研究所 1982
- 「高野山の地質」和歌山県教育委員会 1975
- 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983
- 「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」同志社大学校地学術調査委員会 1987
- 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』 1978
- 上田昭人「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 森田勉「14~16世紀の白磁の編年と分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 「木器集成図録、近畿古代編」奈良国立文化財研究所編 1985
- 第14回埋蔵文化財研究集会資料「木製農耕具について」埋蔵文化財研究会 1984
- 渡辺誠「もじり編み用木製籠の考古資料について」『考古学雑誌』66-4 1981
- 「日中貨幣展」図録 大阪市立博物館 1984
- 「中近世の瓦の研究～元興寺編～」元興寺文化財研究所 1982

第4節 近世の遺物

遺跡全域で出土するが、大部分は台地状丘陵の上方に集中する。時期は概ね、18C以降であるが、一部17C前半のものが見られる。

国内製陶器（美濃・瀬戸）（図版31・63）

少数ながら出土が見られる。特に目立つのは、土塙3-60出土の天目茶碗・折縁削ぎ菊皿・織部鉢である。出土が墓と考えられる遺構での出土である為、他の日常雑器とは違った性格であると考える必要がある。しかし、美濃・瀬戸製品の各地出土例が示す様に、この時期全国に大量に流通していた事を表わしている。また、これら一群の時期は大窯から登窯への移行期と見られ、17C初に比定できる。

伊万里・唐津製品（図版31・63）

特に溜池から多くの出土を見たが、包含層・他の遺構からも出土が見られる。大部分は碗で、いわゆる「くらわんか碗」と称されるものである。法量にはらつきはあるものの、口径は8~12cm、器高3.5~7cmの範囲に納まり、規格品的要素を持っている。

溜池出土品を始め、出土した伊万里製品は、見込み部に蛇ノ目釉ハギを施したものが多く、また、文様についても、いわゆるコンニャク判と称される手法を多用している。特に見込み部の五弁花は、すべてコンニャク判である。もっとも、砂目の見られるものもあるが、その数は非常に少ない。文様にコンニャク判が多用される時期が18C前~中であり、同じく蛇ノ目釉ハギもこれと平行して多用された焼成技法である事から、これら碗の生産時期を、18C前~中に限定できる。

唐津系陶磁器は伊万里製磁器と比べて絶対数が少ないが器形は碗が主体である。しかしながら、伊万里と比べて器形の変化に富み、塊も法量・調整方法に違いが見られる。また、三島大皿も出土している。

その他の土器（図版34）

国内産陶磁器の他にも、瓦質・土師質の土器が出土している。

瓦質土器　　いずれも火舎で、高台を有するもの、三足のものとがある。また、破片ではあるが、小型のものも出土している。

土師質土器　　いわゆる湊焼と称される甕で、少なくとも3個体分以上出土し

ている。外面はタタキ調整で、ほぼ円筒形に近い形状を呈するものである。水溜め、あるいは肥溜めに使用されたものと、棺に使用されたものがある。

木製品・土製品・銅製品（図版35・34・64）

木製品は、下駄・手桶がある。下駄は一材で、いわゆる連歛下駄と言われるものである。手桶は把手のみ出土している。

土製品は、いわゆるミニチュア人形で、阿弥陀如来・太夫・牛・泥面子である。

銅製品は煙管である。雁首・吸口、各2つずつ出土しているが、一切装飾・文様などの見られないものである。

瓦（図版34）

瓦窯及び粘土採掘土塙からの出土である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟瓦と多種出土しているが、数量的には平瓦が圧倒的に多い。軒丸瓦の文様は巴文・軒平瓦は唐草文であるが、文様の退行が著しい。どの瓦にも刻印・文字などは見られなかったが、一部の平瓦には波状のヘラ描きが見られる。

今回出土した遺物は、日常生活で普通に使用されたものであるが、遺物量・種類から見て、集落の存在を思わせるものではない。

参考文献

- 『近世城館跡出土の陶磁』 愛知県陶磁資料館 1984
- 出囗昭二『美濃焼』 考古学ライブリー17 ニューサイエンス社 1983
- 『妙土窯発掘調査報告』 笠原町教育委員会 1976
- 『大川東窯第3群緊急発掘調査報告書』 瑞浪市教育委員会 1979
- 『世界陶磁全集』 5・7・8巻 小学館
- 『古瀬戸と志野と織部』 朝日新聞社 1978
- 『古唐津—肥前陶磁の歴史と美を探る—』 佐賀県立博物館 1978
- 『有田天狗谷古窯』 有田町教育委員会 1972
- 『百間窯・通口窯』 肥前地区古窯跡調査報告書第2集 九州陶磁文化館 1985
- 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館 1984
- 『中近世瓦の研究』 元興寺文化財研究所 1981
- 駒井綱之助『かわら日本史』 雄山閣 1981
- 『桜町遺跡』 小矢部市教育委員会 1982
- 『高野山発掘調査報告書』 考古学研究室調査報告第3冊 元興寺文化財研究所 1982

第5章 まとめ

今年度の調査で、三日市遺跡の全体調査予定面積の約6割を終了し、その結果数多くの知見を得る事が出来た。

○石見川北岸の段丘上に縄文時代中・後期の遺構、弥生時代中期の集落、古墳時代前・中期の集落、さらに中世の建物を検出した。

○石見川南岸の丘陵上には、前年度に引き続き中世の集落・墳墓を検出し、集落の状態を概ね把握できた。又、新たに5世紀後半～6世紀中葉までの古墳・土塙墓・住居址・窯状遺構を検出した。

上記の結果を統合すると、新たな問題点が見い出され、これらを調査進行上の課題としたい。

○石見川北岸に検出した、弥生時代～古墳時代の集落の広がりとその復元。

○石見川南岸丘陵上の古墳の実態と集落との関連。

○木炭を焼成したと考えられる窯状遺構の市内の同類例との関連。

○前年度に引き続き、中世の集落の復元。

来年度の調査は、最終年度として残りの全調査予定地を行なうが、遺構の広がりが予想出来、さらに成果が期待出来る。

表3 掘立柱建物一覧

番号	形態	間数	長軸(m)	短軸(m)	主軸方向	時代	備考
5-1		3×5	11	7.1	N-66°-W	13C末	庇を持つ 建5-2と切り合う。 樹をもつ
5-2		3×6	14	7	N-24°-E	13C末	庇を持つ 建5-1より古い。
4-201		1×3	5	3.4	N-10°-E	中世?	溝を持つ
4-301		2×3	7.3	5.5	N-11°-E	中世?	建4-302に先行する。
4-302		2×3	6.3	4.4	N-4°-W	中世?	
4-303		2×3	6.7	4	N-81°-E	中世?	
4-304		2×3	3.4	3.1~2.8	N-82°-E	中世?	
4-305		1×2	3.3	2.7	N-65°-E	中世?	
4-306		2×2?	4	3.8	N-22°-E	中世?	北へ延びる可能性有。

番号	形態	間数	長軸(m)	短軸(m)	主軸方向	時代	備考
4-801		2×3	5	3	N-15°-W	中世?	
4-802		2×1	3.6	3.2	N-3°-E	中世?	
4-803		2×2	4.3	3.9	N-86°-W	中世?	
4-804		2×3	6.5	3.4	N-86°-W	中世?	底を持つ
4-805		1×2?	4.5	2.3	N-87°-W	不明	北へ延びる可能性有。
4-806		1×1	2.3	1.9	N-5°-E	不明	北へ延びる可能性有。
4-101		1×2	3.7	2	N-74°-E	中世?	
4-501		3×5?	11.4	6.7	N-87°-W	中世?	
3-3		2×3	5.9	3.6	N-20°-E	14C測	瓦器片出土
3-6		3×3?	5.0 以上	5.0 以上	N-2°-W	不明	
3-7		2×2	6.2	5.3	N-3°-E	不明	

番号	形態	間数	長軸(m)	短軸(□)	主軸方向	時代	備考
3-8		2×4	7.9	5.2	N-4°-E	中世?	3-9と切り合う。
2-7		2×4	12.7	4.3	N-69°-W	不明	庇、張出しを持つ。
2-8		2×3			N-84°-W	不明	建物2-9と同一軸にあり隣接する。
2-9		2×3			N-84°-W	不明	建物2-8と同一軸にある。
4-1101		2×4	7.9	4.2	N-62°-W	中世?	
4-1102		2×4	10.8	3.6	N-28°-E	中世?	
2-1		3×4	13.5	7	N-84°-W	不明	溝、張出部を有する。
2-2		2×3	7.3	3.5	N-87°-E	不明	

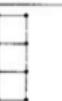
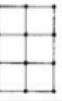
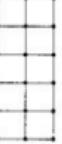
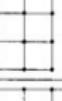
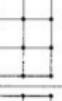
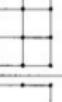
番号	形態	間数	長軸(m)	短軸(m)	主軸方向	時代	備考
2-3		1×3?	2.2	0.9	N-57°-E	不明	東へ延びる可能性有。
2-4		2×3	5.8	3.8	N-11°-W	不明	
2-5		2×5	7.0	3.5	N-70°-W	不明	
2-6		2×3	5.5	3.8	N-81°-E	不明	
3-9		2×3	7.7	4.3	N-11°-E	中世	西に延びる可能性有。
3-10		2×3	6.0	3.2	N-90°-E	中世	
3-13		3×4?	7.0	5.5	N-30°-E	14C 以降	溝を伴う 井戸3-9を切る。
3-14		2×3	6.2	3.7	N-25°-E	中世	
3-16		2×3	7.2	4.1	N-20°-E	中世	
3-17		2×4	7.6	6.2	N-30°-E	中世	

表4 須恵器観察表

住居 5-13

器種	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
蓋杯(身)	図版 17 + 26	口 径 10.0 器 高 5.8 受部径 12.8	たちあがりは、内傾して立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で丸く、底部は深く丸い。	回転ヘラ削りは、外底面の約以上。内面中心部を不定方向にナデ。	焼成良好 胎土密 明青灰
蓋杯(身)	図版 17 + 24	口 径 10.5 器 高 5.3 受部径 12.5	同 上	回転ヘラ削りは、外底面の約程度。	焼成良好 胎土やや粗 明青灰
碗	図版 17 + 27	口 径 7.8 器 高 5.7	丸底氣味の底部をもち、口縁部は、まっすぐ上方へのびるが、端部で少し外反する。ヘラ記号有。	底部は、回転ヘラ削りの後ナデ。	焼成やや軟 胎土やや粗 灰白
蓋杯(蓋)	図版 17 + 25	口 径 12.4 復元高 4.5	口縁部は下外方へまっすぐのび、端部で外反し内傾する、凹面を有する。	天井部、約約に回転ヘラ削り。	焼成やや軟 胎土密 明青灰

住居 5-12

蓋杯(蓋)	図版 17 + 23	口 径 12.0 器 高 4.3	口縁部は、内弯氣味に下り、端部は内傾する凹面を有する。天井部と口縁部は棱線で分かれる。	回転ヘラ削りは、天井部約以上。	焼成良好 胎土やや粗 明青灰
-------	---------------------	---------------------	---	-----------------	----------------------

住居 5-10

無蓋高杯	図版 17 + 29	口 径 16.0 器 高 11.5 脚 径 12.0 脚 高 6.2	底部が平たい杯部をもち、口縁部は、外弯氣味に上外方へのびる。波状文文様帶の位置に左右一対の把手をもつ。脚部は、外弯しながら下外方に下り、裾部は短く水平にのびた後、段を成し、下外方へ下る。	杯部中央に2条の突帯をもうけ、その下に波状文文様帶をめぐらせる。脚部はカキ目、裾部は回転ナデ。	焼成良好 胎土密 灰色~灰白色
------	---------------------	---	---	---	-----------------------

包含層

蓋杯(蓋)	図版 17 + 28	口 径 14.4 器 高 5.3	口縁部は中位にうすい凹面をもつ。端部は内傾する凹面を有する。天井部と口縁部は鋭い棱線でわかれ る。	天井部全体に回転ヘラ削り。	焼成良好 胎土密 明青灰
-------	---------------------	---------------------	--	---------------	--------------------

周溝 2-701

器種	図版 番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
台付壺	図版 17 — 30	口 径 14.0 残 高 30.8 胴 径 19.0 脚 径 14.1	肩のはった体部をもち、口縁部はゆるやかに外反し、端部外面に段をつくる。口縁部には2条の波状文がめぐり、下のものは一部ナデされている。脚部は、3段まで消残存する。下から2段目は、3角形、3段目は長方形の透しを、それぞれ2条の波状文がめぐる。	体部は肩部をのぞき平行タタキを施し軽くナデる。体部内面は約以下が不定方向ナデ。	焼成良好 胎土やや粗 灰白～暗灰

土塗 2-702

台付壺	図版 17 — 31	口 径 9.4 器 高 25.8 胴 径 17.4 脚 高 7.6 脚 径 12.3	口縁部は、ゆるやかに外反しながら上外方にのび、端部で垂直につながる。扁球体の体部をもち、中央に点列文の文様帶を配する。脚部端は内側に肥厚する。	体部下方から脚部にかけて、カキ目を施す。点列文は下部をナデ消す。	焼成やや軟 胎土やや粗 灰白
扇	図版 18 — 33	口 径 13.8 器 高 15.2	平底で、体部中位に最大径をもち、そこに点列文の文様帶をもつ。口縁は外反しながら上外方にのび、端部で更に広がる。	底部を手持ちヘラ削りを行う。	焼成良好 胎土やや粗 青灰
短頸壺	図版 18 — 32	口 径 9.4 器 高 10.2	扁球形の体部をもち、やや上外方に口縁がまっすぐのびる。	回転ヘラ削りは、外底部の約ほど。内面中心部タテナデ。	焼成良好 胎土密 灰白

石組 2-800

蓋杯(身)	図版 18 — 34	口 径 12.1 器 高 3.9 受部径 14.7	口径に比して、器高が低い。薄いたちあがりが内傾してのびる。ヘラ記号有り。	回転ヘラ削りは外底部の約ほど。内面中心部ヨコナデ。	焼成やや軟 胎土やや粗 灰白
-------	---------------------	---------------------------------	--------------------------------------	---------------------------	----------------------

窯状遺構 3-1

平瓶	図版 18 — 35	胴 径 19.1 残 高 12.6	扁球状を呈し、底部は平底、口縁部は欠損。全体に磨耗が著しい。	回転ナデ。口頸部接合。	焼成軟 胎土密 灰白
----	---------------------	----------------------	--------------------------------	-------------	------------------

表5 中近世遺物観察表

建物 5-1

器種	団版番号	法量	種別	調査
碗	団版 26-131	口径 15.2cm 器高 7.1cm 底径 7.1cm	白磁	高台はケズリダシ 全面施釉
壺	団版 23-95	口径 16.8cm 器高 5.2cm (残) 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 後 ヘラミガキ 内外面 ヘラミガキ 外面指オサエ 後 ヘラミガキ
壺	団版 23-96	口径 15.5cm 器高 6.0cm 底径 7.2cm	瓦器	内外面に細かいヘラミガキ 見込みは 平行線のヘラミガキ 高台 ハリツケ 器高指数 38.7
壺	団版 23-97	口径 12.2cm 器高 3.4cm 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは回転ヘラミガキ 高台 ナシ 器高指数 27.7
壺	団版 23-98	口径 9.6cm 器高 2.2cm 底径	瓦器	口縁端部内側に沈線 見込みは タテ方向のヘラミガキ 体部外側 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 器高指数 22.9

袋状土塼

壺	団版 24-105	口径 12.2cm 器高 2.65cm 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ
壺	団版 24-106	口径 10.6cm 器高 2.75cm 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 体部外側 ユビオサエ ヘラミガキなし 器高指数 25.94
壺	団版 24-107	口径 10.9cm 器高 2.7cm 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 体部外側 ユビオサエ ヘラミガキなし 器高指数 24.77
壺	団版 24-108	口径 12.3cm 器高 2.95cm 底径	瓦器	口縁外側 ナデ 頭部に沈線がある 体部外側は指オサエ 後 不定方向のナデを施す 器高指数 23.98
鉢	団版 24-109	口径 20.3cm 器高 6.7cm (残) 底径	瓦質	口縁外側 ナデ 体部外側 ユビオサエ 後 回転ナデ 内面は譽刷の為調整不明
羽釜	団版 29-133	口径 27.1cm 器高 14.5cm (残) 鋸径 33.7cm	瓦質	口縁から鋸まで回転ナデ 胴部外面上部 タテ方向ヘラミガキ 下部 タテ方向ハケナデ 胴部内面上部 ヨコ方向ハケナデ 下部 タテ方向ハケナデ 鋸 ハリツケ
羽釜	団版 29-134	口径 23.4cm 器高 13.5cm (残) 鋸径 31.0cm	瓦質	口縁から鋸まで回転ナデ 胴部外面上部 タテ方向ナデ 胴部内面上部 タテ方向及びヨコ方向ナデ 鋸 ハリツケ
羽釜	団版 29-135	口径 22.7cm 器高 16.0cm (残) 鋸径 29.6cm	瓦質	口縁から鋸まで回転ナデ 胴部外面上部 回転ヘラケズリ 後タテ方向ヘラケズリ 下部右下方へのハケナデ 胴部内面上部 ヨコ方向ハケナデ 下品 タテ方向ハケナデ 鋸 ハリツケ

器種	図版番号	法量	種別	調整
羽釜	図版 28-136	口径 17.5cm 器高 5.3cm (残) 銚徃 22.7cm	瓦質	口縁端部から銚まで回転ナデ 胴部外面上部ヨコ方向へラケズリ 後タテ方向へラミガキ 胴部内面上部ヨコ方向ハケナデ 部分的に 右下方へのハケナデ 銚ハリツケ
羽釜	図版 28-137	口径 18.4cm 器高 2.1cm (残) 銚徃 24.9cm	瓦質	口縁から銚まで回転ナデ 胴部外面上部ヨコ方向へラケズリ 後タテ方向へラミガキ 胴部内面上部ヨコ方向ハケナデ 中央部 タテヨコ方向ハケナデ 下部タテ方向ハケナデ 銚ハリツケ
羽釜	図版 28-138	口径 18.3cm 器高 11.5cm (残) 銚徃 24.7cm	瓦質	磨耗著しく調整不規 胴部外面上部共ハケナデ 銚ハリツケ 口縁端部より1.7cmの所に径1cmの孔を 焼成前にあける
羽釜	図版 28-139	口径 25.2cm 器高 11.4cm (残) 銚徃 31.9cm	瓦質	口縁から銚まで回転ナデ 胴部外面上部タテ方向へラケズリ 胴部内面上部 ヨコ方向ハケナデ 下部 タテ方向ハケナデ 銚ハリツケ
羽釜	図版 28-140	口径 32.2cm 器高 9.65cm (残) 銚徃 40.9cm	瓦質	口縁から銚まで回転ナデ 内面ヨコ方向ハケナデ
羽釜	図版 29-141	口径 20.4cm 器高 15.8cm	瓦質	口縁から銚まで回転ナデ 胴部外面上部回転ヘラケズリ 後タテ方向のヘラミガキ 下部 下方向タテ方向のナデ 胴部内面上部ヨコ方向ハケナデ 下部タテ方向ハケナデ 胴部外面上部スス付着 銚ハリツケ
羽釜	図版 29-142	口径 20.5cm 器高 17.4cm (残) 銚徃 28.1cm	瓦質	口縁から銚までナデ 胴部外面上部 回転ヘラケズリ 後 ヘラ調整 下部ナメ方へのナデ 胴部内面上部ヨコ方向ハケナデ 下部タテ方向ハケナデ 胴部外面上部スス付着 銚ハリツケ
土鍋	図版 30-143	口径 21.0cm 器高 11.4cm (残)	土師質	口縁部ナデ 後オリマゲ 内面共ナデ 外側 黄化物付着

井戸 3-1

塊	図版 22-91	口径 13.8cm 器高 2.7cm 底径 2.35cm	瓦器	口縁部ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のナデ 高台 ハリツケ 器高指数 19.56
塊	図版 23-92	口径 15.6cm 器高 3.9cm 底径 4.3cm	瓦器	口縁部ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台 ハリツケ 器高指数 25.00
塊	図版 23-93	口径 13.6cm 器高 4.3cm (残)	瓦器	口縁部ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台 ハリツケ
塊	図版 23-94	口径 14.6cm 器高 3.7cm 底径 4.0cm	瓦器	口縁部ナデ 体部外側 ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは鋸歯状のヘラミガキ 高台 ハリツケ 器高指数 27.39

器種	図版番号	法量	種別	調整
碗	図版 26-130	口径 18.3cm 器高 7.0cm 底径 6.4cm	青磁	緑灰色の施釉 高台はケズリガシ 見込みは釉カキトリ 内面は五つの区画に分け飛雲文を施す
練り鉢	図版 30-148	口径 28.5cm 器高 10.4cm 底径 8.9cm	須恵質	口縁端部 ツマミナデ 体部外内面共回転ナデ 底部 イトキリ
木輪	図版 35-190	全長 13.8cm 最大幅 4.8cm 最短幅 1.8cm	木製品	中心部 クビレ部方向へのケズリ 両方の上端部に表皮が残存する

井戸 3-2

皿	図版 21-76	口径 9.2cm 器高 2.1cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 未調整 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 器高指数 22.83
皿	図版 21-77	口径 8.6cm 器高 1.8cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ナデ 後ユビオサエ 内面 ナデ 後ヘラミガキ 見込みは 溝巻状のヘラミガキ 器高指数 20.93
皿	図版 21-78	口径 8.4cm 器高 1.8cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 器高指数 21.43
皿	図版 21-79	口径 9.4cm 器高 1.5cm	瓦器	口縁部 ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 器高指数 15.96
皿	図版 21-80	口径 8.9cm 器高 1.9cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 器高指数 21.35
皿	図版 21-81	口径 10.4cm 器高 1.8cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ
塊	図版 21-82	口径 15.6cm 器高 5.1cm 底径 5.2cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 32.69
塊	図版 21-83	口径 15.4cm 器高 4.8cm 底径 6.4cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 31.16
塊	図版 21-84	口径 15.6cm 器高 5.1cm 底径 4.7cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面指オサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 32.69
塊	図版 21-85	口径 14.9cm 器高 4.8cm 底径 4.2cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 32.21
塊	図版 22-86	口径 16.4cm 器高 4.75cm 底径 4.4cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面 ヘラミガキ 見込みは溝巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 28.96
塊	図版 22-87	口径 15.8cm 器高 5.1cm 底径 4.3cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面ナデ 後ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 32.2

器種	図版番号	法量	種別	調整
塊	図版 22-88	口径 16.0cm 器高 4.3cm 底径 5.0cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 後 滴垂状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指數 26.87
塊	図版 22-89	口径 14.8cm 器高 4.7cm 底径 4.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ナデ 後ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指數 31.70
塊	図版 22-90	器高 2.6cm 底径 4.6cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面 ユビオサエ 内面ナデ 後ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台 ハリツケ
塊	図版 26-127	口径 15.4cm 器高 5.1cm 底径 4.7cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指數 32.69

Pit 4-511

皿	図版 20-66	口径 9.4cm 器高 1.9cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面ユビオサエ 後不定方向のナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 20.21
皿	図版 20-67	口径 9.2cm 器高 1.65cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面オサエ 後不定方向のナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 17.93
皿	図版 20-69	口径 9.6cm 器高 1.9cm	土師質	口縁外面ヨコナデ 体部外面ユビオサエ 後ナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 19.79
皿	図版 20-70	口径 9.6cm 器高 1.7cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面 不定方向のナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 17.71
皿	図版 20-71	口径 15.4cm 器高 2.45cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面ユビオサエ 後不定方向のナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 15.91
皿	図版 20-72	口径 15.4cm 器高 2.8cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面オサエ 後ナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 18.18
皿	図版 20-73	口径 15.3cm 器高 2.75cm	土師質	口縁外面 ヨコナデ 体部外面指オサエ 後不定方向のナデ 内面上部ヨコナデ 見込みは不定方向のナデ 器高指數 17.97

包含層 下層

羽釜	図版 29-143	口径 22.2cm 器高 6.5cm (残) 調径 27.4cm	瓦質	口縁から調まで回転ナデ 胴部外面回転ヘラケズリ 調ハリツケ 内面右方向のハケナデ 口縁端部より2.5cmの所に径が0.6cmの孔を焼成後に 5cmの間隔で2つあける 孔には三つ編みしたヒモが通る
----	--------------	--	----	--

井戸 3-9

器種	図版番号	法量	種別	調整
台付小皿	図版 24-99	口径 7.0cm 器高 2.4cm 底径 2.5cm	瓦器	口縁 体部外面回転ナデ 内面不定方向ナデ 高台 ハリツケ 重ね焼きの根跡 器高指数 34.29
軒平瓦	図版 34-180			
軒平瓦	図版 34-181	弧幅 22cm		
小皿 (透明皿)	図版 26-129	口径 7.9cm 器高 1.4cm	土師質	外面ナデ 内面不定方向のナデ 内面に炭化物付着
羽釜	図版 27-132	口径 38.4cm 器高 11.0cm (残) 鉢径 24.4cm	瓦質	口縁から鉢まで回転ナデ 腹部外面 タテ方向のハケナデ 内面 上部ナデ 下部ヨコ方向のハケナデ 鉢 ハリツケ
羽釜	図版 29-144	口径 27.6cm 器高 9.5cm (残) 鉢径 34.6cm	瓦質	口縁端部ソミミ出し 口縁から鉢まで回転ナデ 腹部外面 回転ヘラケズリ 内面 左方向ハケナデ 腹部外面 スス付着 鉢 ハリツケ
羽釜	図版 30-145	口径 19.8cm 器高 5.4cm (残) 鉢径 27.9cm	瓦質	口縁端部ソミミダシ 口縁から鉢まで回転ナデ 腹部外面 回転ヘラケズリ 内面 右方向ハケナデ 腹部外面 スス付着 鉢 ハリツケ
羽釜	図版 30-146	L口径 27.0cm 器高 10.6cm (残) 鉢径 34.0cm	瓦質	口縁端部ソミミダシ 口縁から鉢まで回転ナデ 腹部外面 回転ヘラケズリ 内面ヨコ方向のハケナデ 腹部外面 スス付着 鉢 ハリツケ

井戸 4-307

皿	図版 20-56	口径 8.1cm 器高 1.2cm	土師質	口縁部 ヨコナデ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 器高指数 14.81
皿	図版 20-68	口径 8.4cm 器高 1.5cm	土師質	口縁部 内面ナデ 体部外面 ユビオサエ 器高指数 17.86
塊	図版 24-110	口径 13.2cm 器高 3.5cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 後ナデ 内面ナデ 後ヘラミガキ 器高指数 26.50
塊	図版 24-111	口径 12.8cm 器高 3.2cm	瓦器	口縁外面ナデ 後ユビオサエ 体部外面ユビオサエ 内面は摩耗の為調整不明 器高指数 25.00
塊	図版 24-112	口径 12.6cm 器高 3.35cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ナデ 後ユビオサエ 内面は摩耗の為調整不明 器高指数 26.58
塊	図版 24-113	口径 12.6cm 器高 3.0cm (残)	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面 不明

器種	図版番号	法 量	種別	調 整
塊	図版 24-114	口径 12.2cm 器高 3.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 後ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 器高指数 25.40
塊	図版 24-115	口径 12.4cm 器高 2.8cm 底径 3.2cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 22.58
塊	図版 25-116	口径 13.2cm 器高 3.6cm 底径 3.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 27.27
塊	図版 25-117	口径 13.0cm 器高 3.6cm 底径 1.5cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 27.69
塊	図版 25-118	口径 13.0cm 器高 3.5cm 底径 3.5cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 26.92
塊	図版 25-119	口径 12.9cm 器高 3.15cm 底径 1.9cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 24.41
塊	図版 25-120	口径 13.2cm 器高 3.7cm 底径 2.5cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 28.03
塊	図版 25-121	口径 12.7cm 器高 3.6cm 底径 2.9cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 28.34
塊	図版 25-122	口径 12.3cm 器高 3.2cm 底径 4.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 26.01
塊	図版 25-123	口径 13.0cm 器高 3.4cm 底径 26.15cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 後ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 26.15
塊	図版 25-124	口径 12.9cm 器高 3.4cm 底径 3.0cm	瓦器	口縁外面ナデ 後ユビオサエ 体部外面ユビオサエ 内面ナデ 後ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 26.35
塊	図版 26-125	口径 12.4cm 器高 3.6cm 底径 3.25cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 29.03
塊	図版 26-128	口径 13.3cm 器高 3.6cm 底径 3.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ハリツケ 器高指数 27.06

井戸 3-3

塊	図版 20-74	口径 13.2cm 器高 3.1cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻状のヘラミガキ 高台ナシ 器高指数 23.48
---	-------------	-----------------------	----	--

器種	図版番号	法量	種別	調整
壺	図版 20-75	口径 13.0cm 器高 3.4cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは渦巻き状のヘラミガキ 高台ナシ 器高指数 26.15

土 壤 3-96

台付皿	図版 24-100	口径 9.1cm 器高 2.65cm 底径 4.9cm	瓦器	口縁外面ナデ 体部外面ユビオサエ 後ナデ 内面は摩耗の為調整不明 高台ハリツケ 器高指数 29.12
壺	図版 24-101	口径 14.0cm 器高 5.5cm 底径 4.0cm	瓦器	口縁端部スマミナデ 部分的にフメアトによる沈線 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 高台ハリツケ 体部外腹下部に高台ハリツケの時のフメアトがある 器高指数 39.29
皿	図版 24-103	口径 8.7cm 器高 2.2cm	瓦器	口縁外面 ナデ 体部外面指オサエ 内面ヘラミガキ 見込みは平行線状のヘラミガキ 器高指数 25.29
皿	図版 24-104	口径 9.4cm 器高 2.1cm	瓦器	口縁外面 内型成形後ナデ 口縁部を内傾させる 体部外面ユビオサエ 内面ヘラミガキ 摩耗の為詳細不明 器高指数 22.34

土 壤 3-60

天目茶碗	図版 31-149	口径 11.0cm 器高 6.8cm 底径 4.6cm	美濃	口縁端部 ツマミナデ 体部外面 ロクロナデ 内外面とともに鉄釉 高台はロクロケメリ
灰釉皿	図版 31-150	口径 10.5cm 器高 2.7cm 底径 4.5cm	美濃	体部外内面ともにナデ 後施釉 高台は左回転のケズリダシ 外面下部および高台は露胎
芳皿	図版 31-151	口径 12.0cm 器高 2.0cm 底径 5.4cm	美濃	口縁外面 フマミナデ 外側に少しおりまげ 端部でからに内側へ折り曲がる 体部外内面ともに施釉 高台はケズリダシ 底部露胎
織部鉢	図版 31-152	口径 13.5cm 器高 4.2cm 底径 5.3cm	美濃	口縁部 内側に折り曲がる 体部外内面ともに施釉 高台はケズリダシ 底部露胎
青花白磁	図版 31-153	口径 10.4cm 器高 2.2cm 底径 6.3cm	明	体部外内面ともに施釉 高台 見込みは回転ヘラケズリ 後施釉 見込みに山水人物文様
染付碗	図版 31-156	口径 10.6cm 器高 4.2cm 底径 4.0cm	伊万里	体部内外面に施釉 見込みに露胎部蛇ノ目 級ハギ 高台 ケズリ出し
刷毛目碗	図版 31-157	口径 11.15cm 器高 5.8cm 底径 4.3cm	唐津	体部内外面に施釉 内外面に刷毛目 高台 ケズリ出し
染付碗	図版 31-158	口径 12.0cm 器高 5.2cm 底径 4.6cm	伊万里	体部内外面に施釉 見込みに露胎部蛇ノ目 級ハギ 高台 ケズリ出し
白磁碗	図版 31-159	口径 11.8cm 器高 8.15cm 底径 5.55cm	唐津	体部内外面に施釉 底部は露胎 高台ケズリ出し

器種	図版番号	法 厘	種別	調 査
染付碗	図版 31-160	口径 12.4cm 器高 5.1cm 底径 4.4cm	伊万里	体部内外面に施釉 見込みに露胎部蛇ノ目触ハギ 高台ケズリ出し
染付碗	図版 32-161	口径 8.9cm 器高 5.9cm 底径 4.4cm	伊万里	体部内外面ともに施釉 高台見込みは施釉 後ケズリトリ 高台削り出し 見込みに「木下称」の刻印有り 体部外面に草花文
染付碗	図版 32-162	口径 8.1cm 器高 4.4cm 底径 3.1cm	伊万里	体部内外面共施釉 口径腹部外面に鋸薙文
染付碗	図版 32-163	口径 7.8cm 器高 4.0cm 底径 3.5cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 外面に秋草文
染付碗	図版 32-164	口径 9.9cm 器高 4.8cm 底径 3.9cm	伊万里	体部内外面に施釉 刷目文 高台ケズリ出し 底部に砂目 見込みに菊文
染付碗	図版 32-165	口径 10.5cm 器高 5.2cm 底径 4.3cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 見込みに蛇ノ目触ハギ 外面に唐草文
染付碗	図版 32-166	口径 11.0cm 器高 5.3cm 底径 4.0cm	伊万里	高台ケズリ出し 外面に草花文
染付碗	図版 32-167	口径 11.6cm 器高 6.7cm 底径 6.7cm	伊万里	体部内外面に施釉 口縁部内面触カキトリ 見込み蛇ノ目触ハギ 高台ケズリ出し 外面に秋草文 底部露胎
染付碗	図版 32-168	口径 11.6cm 器高 5.5cm 底径 4.5cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台はケズリ出し 見込みに蛇ノ目触ハギ 外面に梅花文
染付碗	図版 32-169	口径 10.8cm 器高 4.8cm 底径 3.8cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 見込みは蛇ノ目触ハギ 中央五弁花 外面に紅葉のコンニャク判
染付碗	図版 32-170	口径 10.8cm 器高 4.9cm 底径 4.4cm	伊万里	体部内外面ともに施釉 高台見込みに蛇ノ目触ハギ 高台はケズリ出し 外面に鶴文のコンニャク判
染付碗	図版 32-171	口径 11.8cm 器高 6.0cm 底径 4.6cm	伊万里	体部内外面に施釉 底部露胎見込みに蛇ノ目触ハギ 外面にコンニャク判
染付皿	図版 33-172	口径 13.2cm 器高 3.8cm 底径 4.8cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台はケズリ出し 底部露胎 後ケズリ取り 内面:草花文
染付碗	図版 33-173	口径 13.1cm 器高 3.65cm 底径 7.5cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 底部露胎 見込みに丘井のコンニャク判 内面に草花文
染付碗	図版 33-174	口径 11.7cm 器高 6.35cm 底径 4.6cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 底部露胎 見込みにコンニャク判 見込みのコンニャク判は五弁花
染付碗	図版 33-175	口径 12.65cm 器高 5.5cm 底径 4.8cm	伊万里	体部内外面に施釉 底部露胎見込みに蛇ノ目触ハギ 中央に五弁花のコンニャク判 外面に草花文 内面に唐草文

器種	図版番号	法量	種別	調整	
染付碗	図版 33-176	口径 器高 底径	3.95cm(残) 4.8cm	伊万里	体部内外面に施釉 底部露胎 高台ケズリ出し 高台見込み 見込み外面に五弁花のコンニャク判
火舎	図版 34-184	口径 器高 底径	17.1cm 12.2cm 15.6cm	瓦質	回転ナデ 後ミガキ 3足
火舎	図版 34-185	口径 器高 底径	13.6cm(残) 17.3cm	瓦質	体部内面は回転ナデ 外面に松鶴文のスタンプ 高台部に書文 高台はハリツケ
ミニチュア 土製品	図版 34-188 187				阿弥陀如来・小 型とり後ハリ合わせ
青緑釉皿	図版 31-153	口径 器高	12.2cm 3.15cm	唐津	外面内面上部施釉 見込みは蛇ノ目釉ハギ 高台ケズリダシ
おろし皿	図版 31-154	口径 器高	10.7cm 2.0cm	美濃瀬戸	底部ヘラキリ 成形後見込みにおろし目を入れる

土 塙 3-156

染付碗	図版 33-178	口径 器高 底径	12.5cm 4.4cm 5.1cm	伊万里	体部内外面とも回転ナデのち施釉 高台部ケズリ出し高台 高台見込みは露胎 内面に草花文
染付碗	図版 33-179	口径 器高 底径	3.2cm 4.2cm	伊万里	体部内外面に施釉 高台ケズリ出し 底部露胎 外面に図柄

瓦 黒 3-1

ミニチュア 土製品	図版 34-189			大丈
軒平瓦	図版 34-182			
軒丸瓦	図版 34-183	径	12cm	

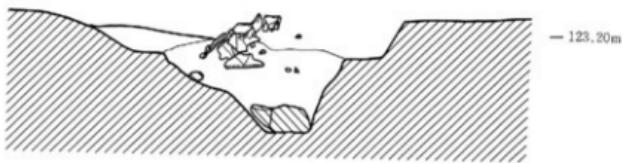
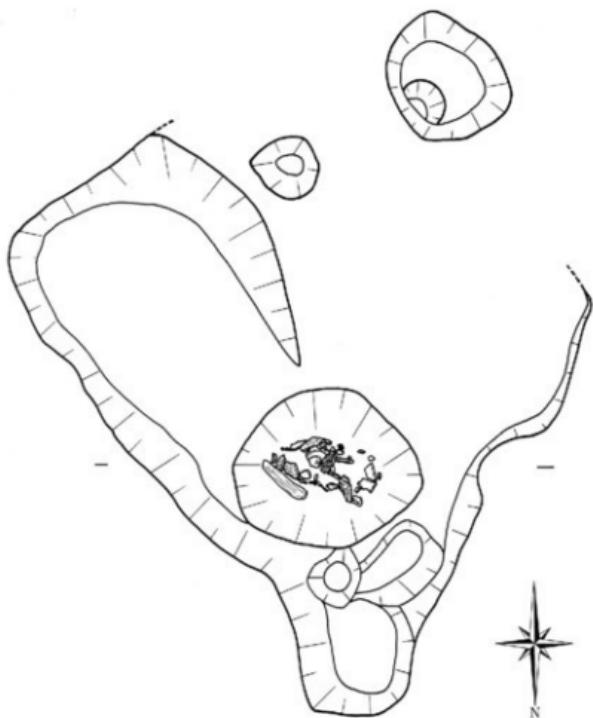
三日市遺跡調査概要Ⅱ

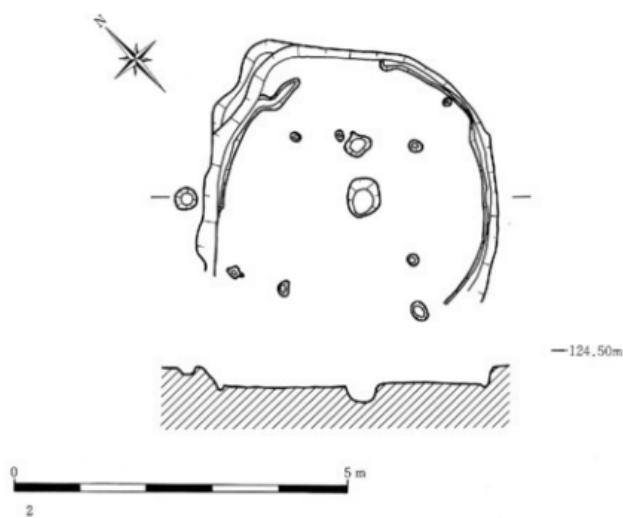
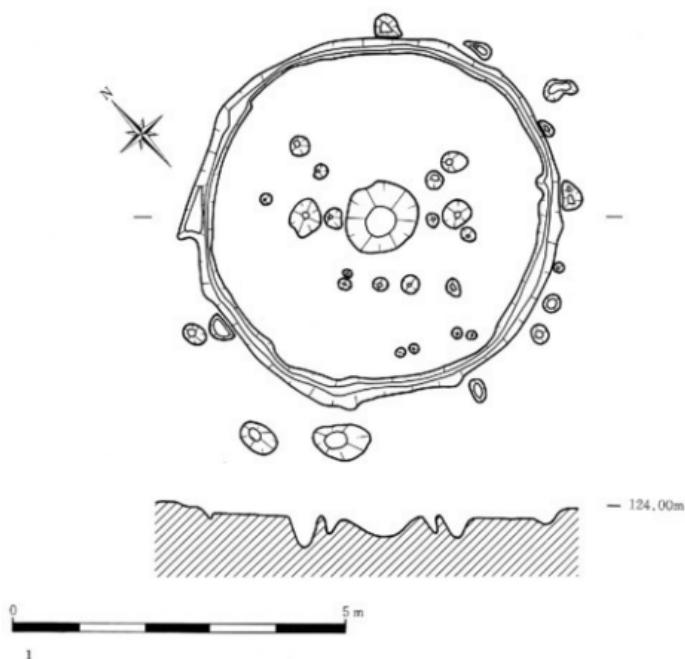
昭和61年3月

発行 三日市遺跡調査会

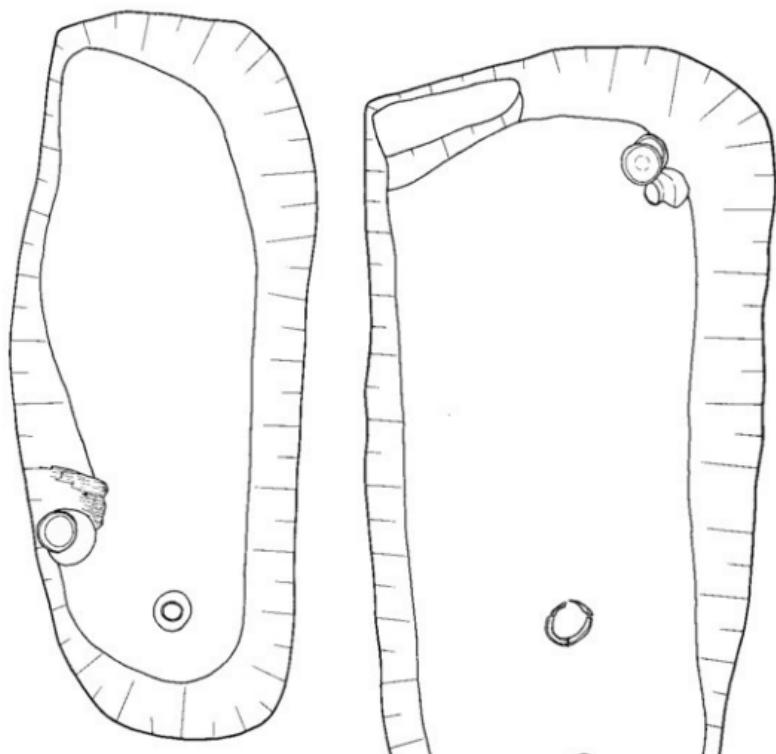
印刷 中島弘文堂印刷所

図 版





1. 住居 5-1、2. 住居 5-2



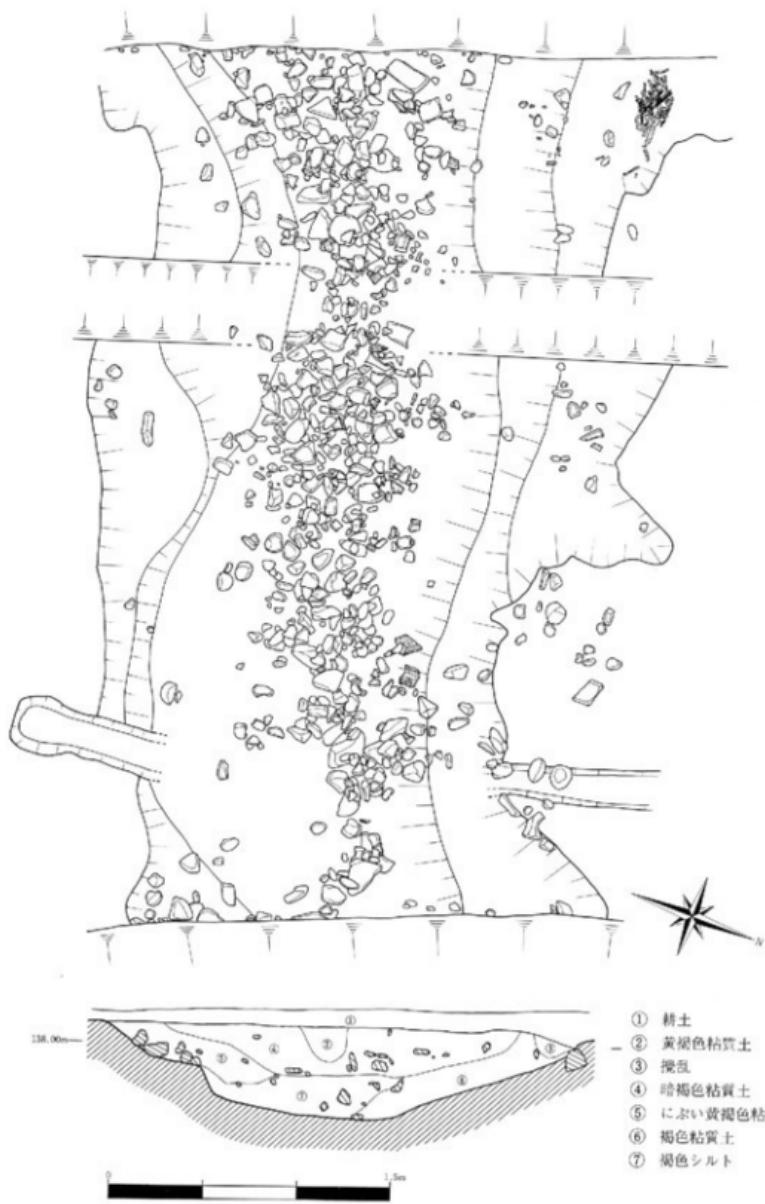
1

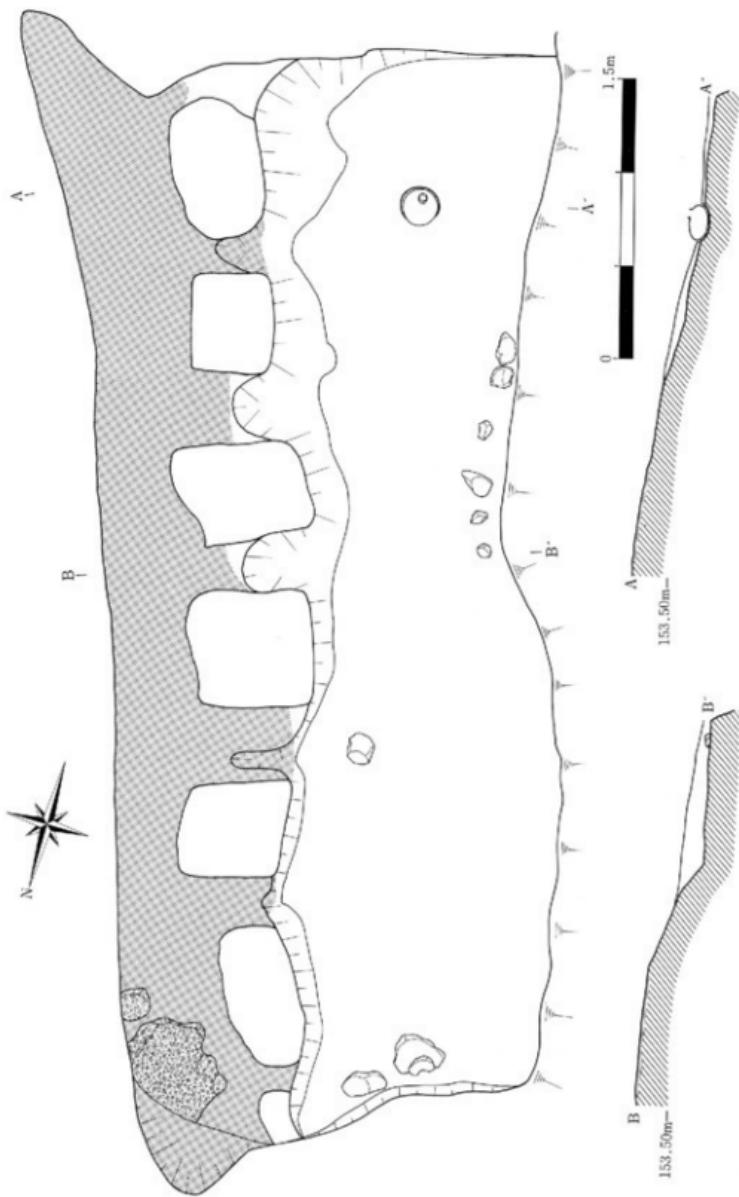


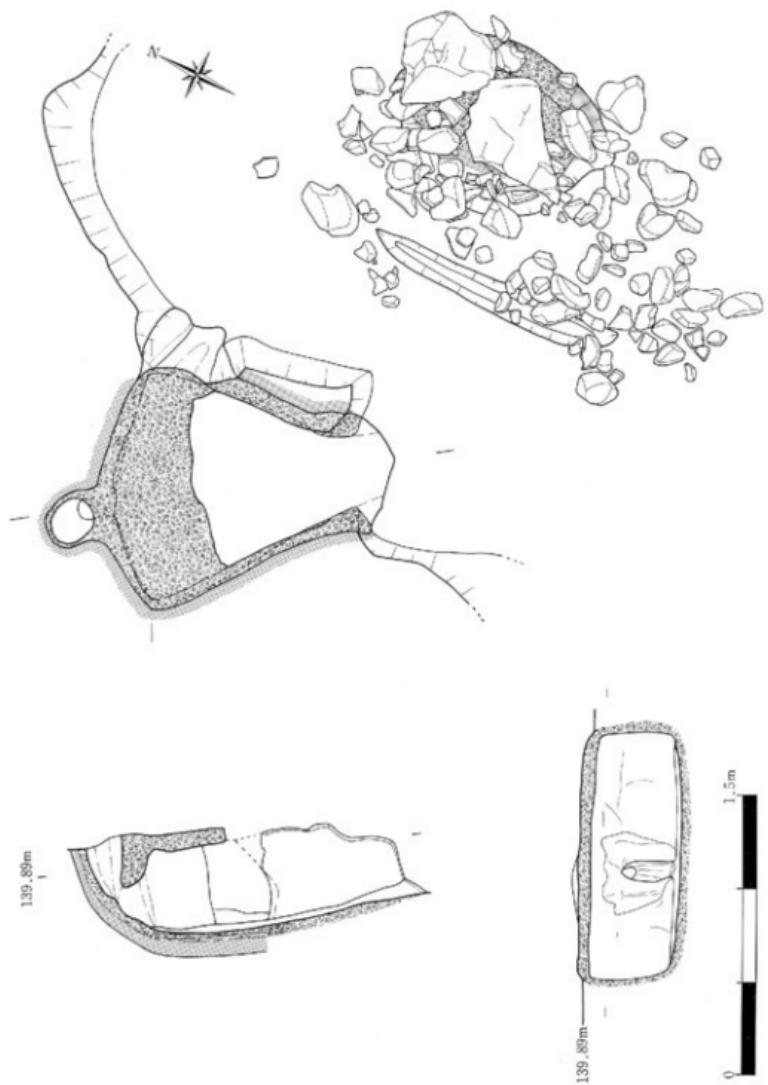
2



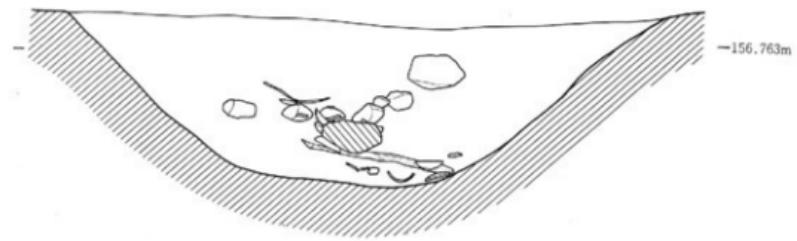
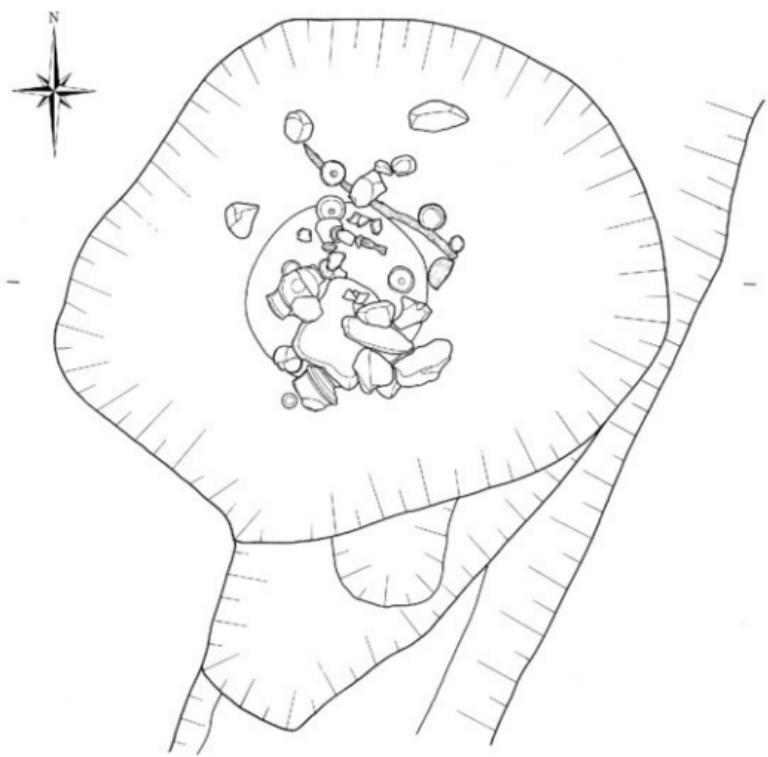
1. 土塙 2-201、2. 土塙 2-202



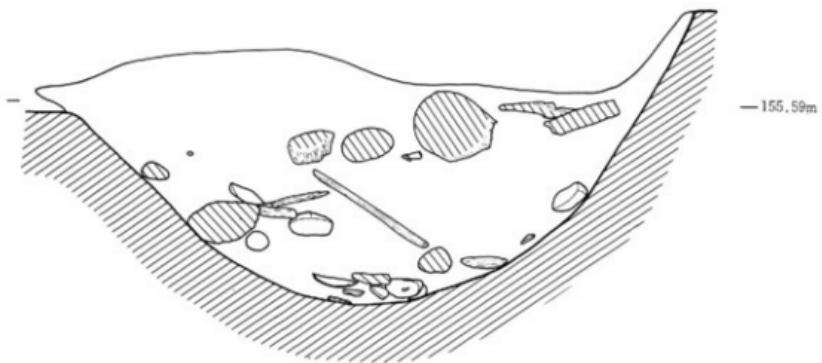


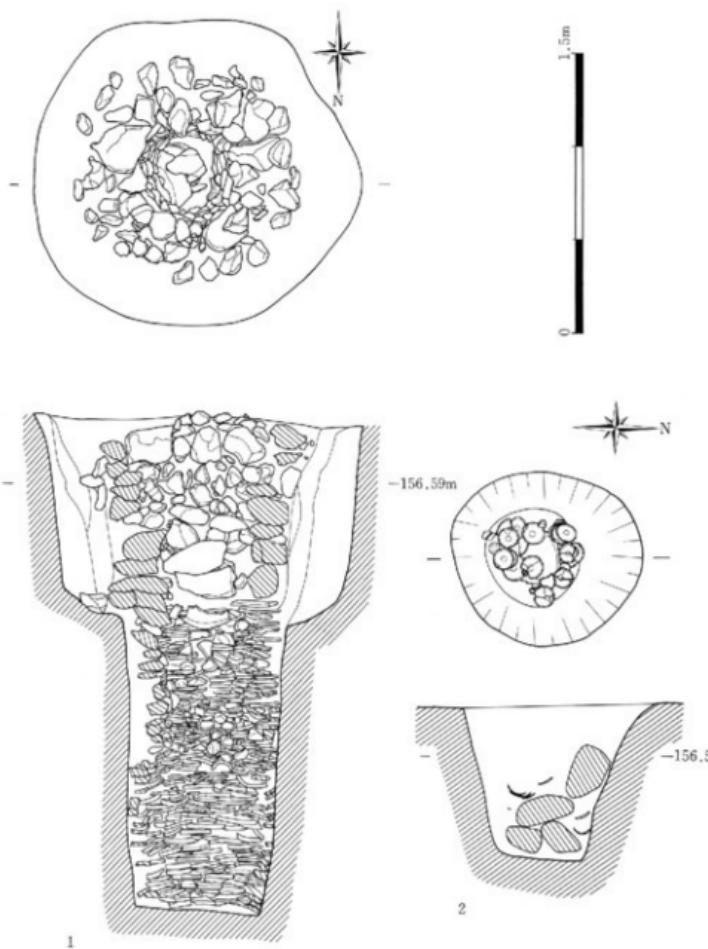


小型窯状遺構 1、2 号窯

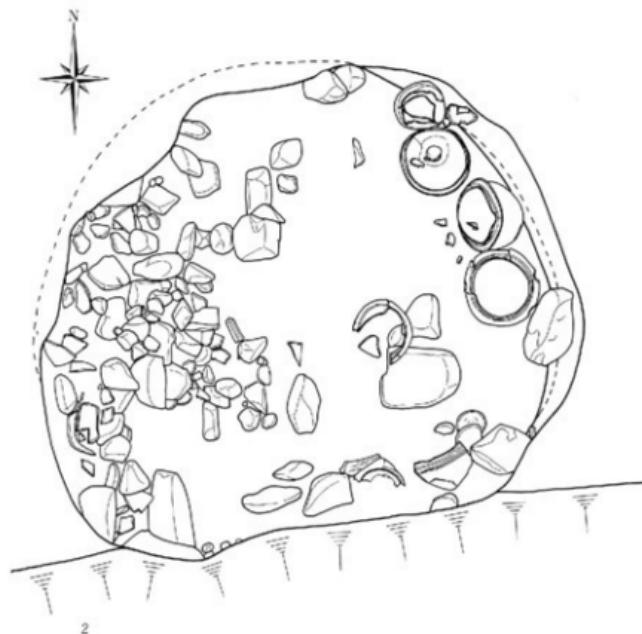
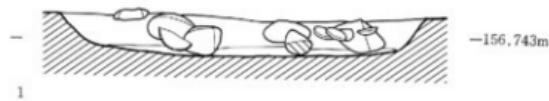
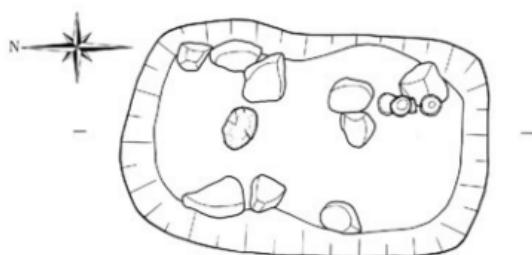


0 1.5m

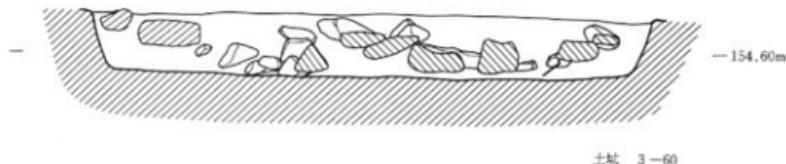
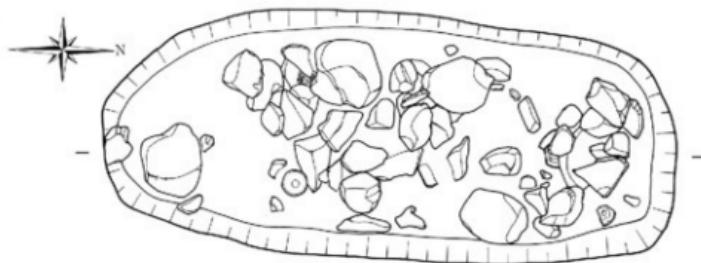




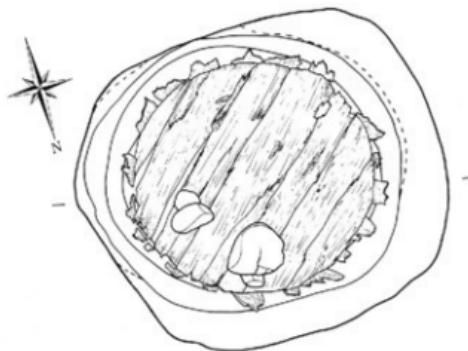
1. 井戸 3-9、2. 土壌 4-307



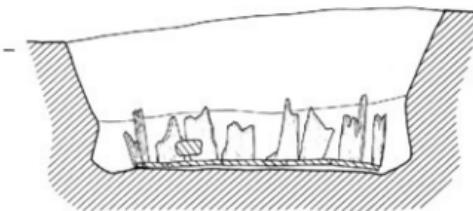
1. 土坡 3-96、2. 袋状土坡



土塙 3-60



-158.003m

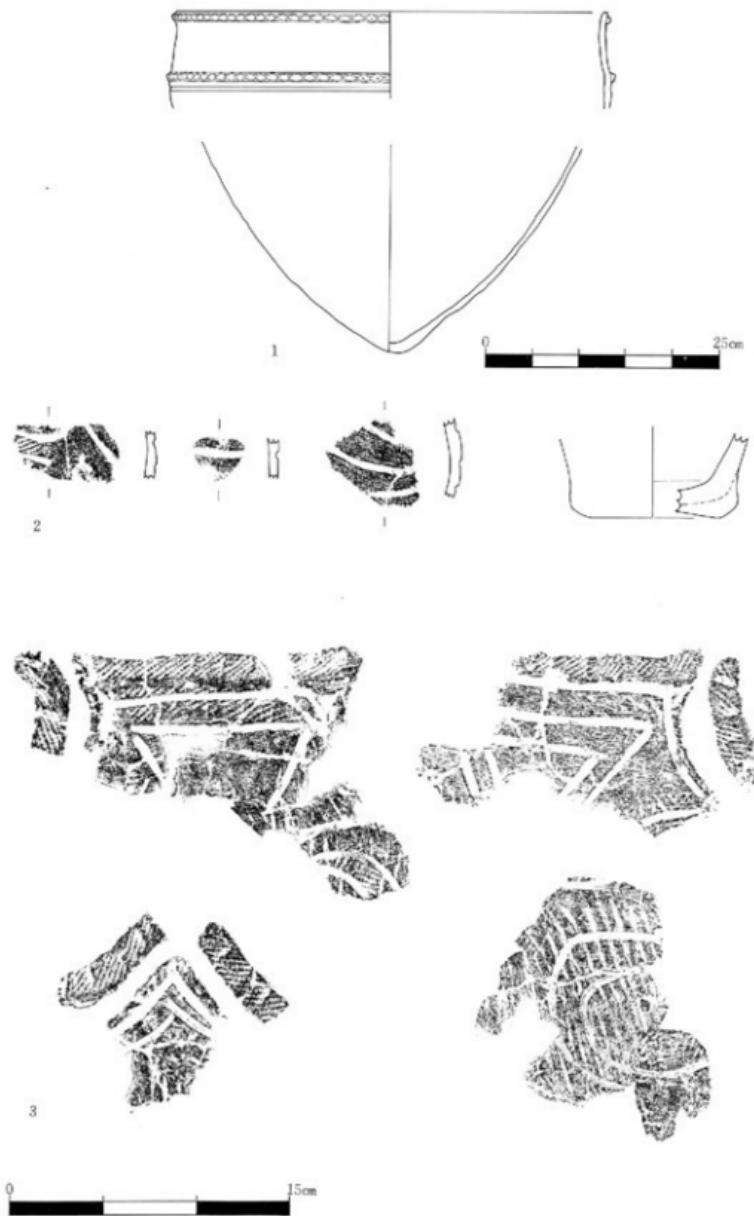


土塙 3-156

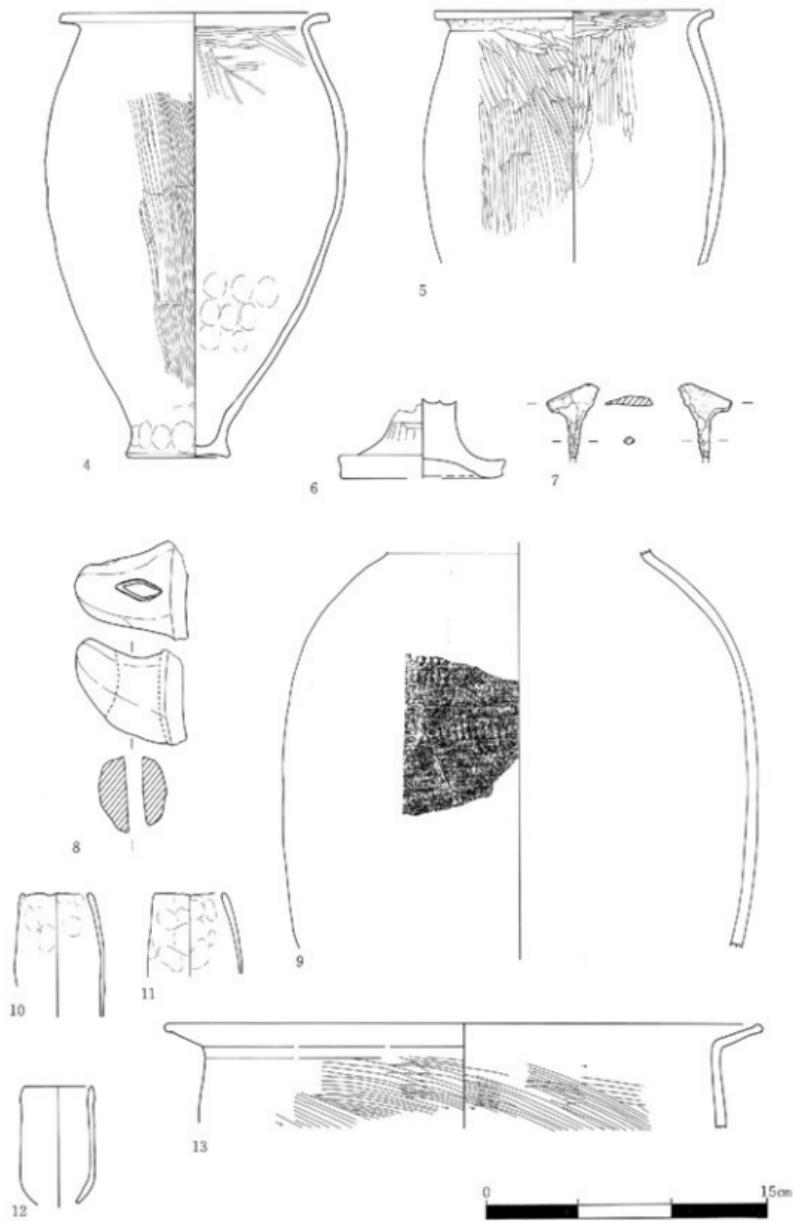


1. 土塙 3-60、2. 土塙 3-156

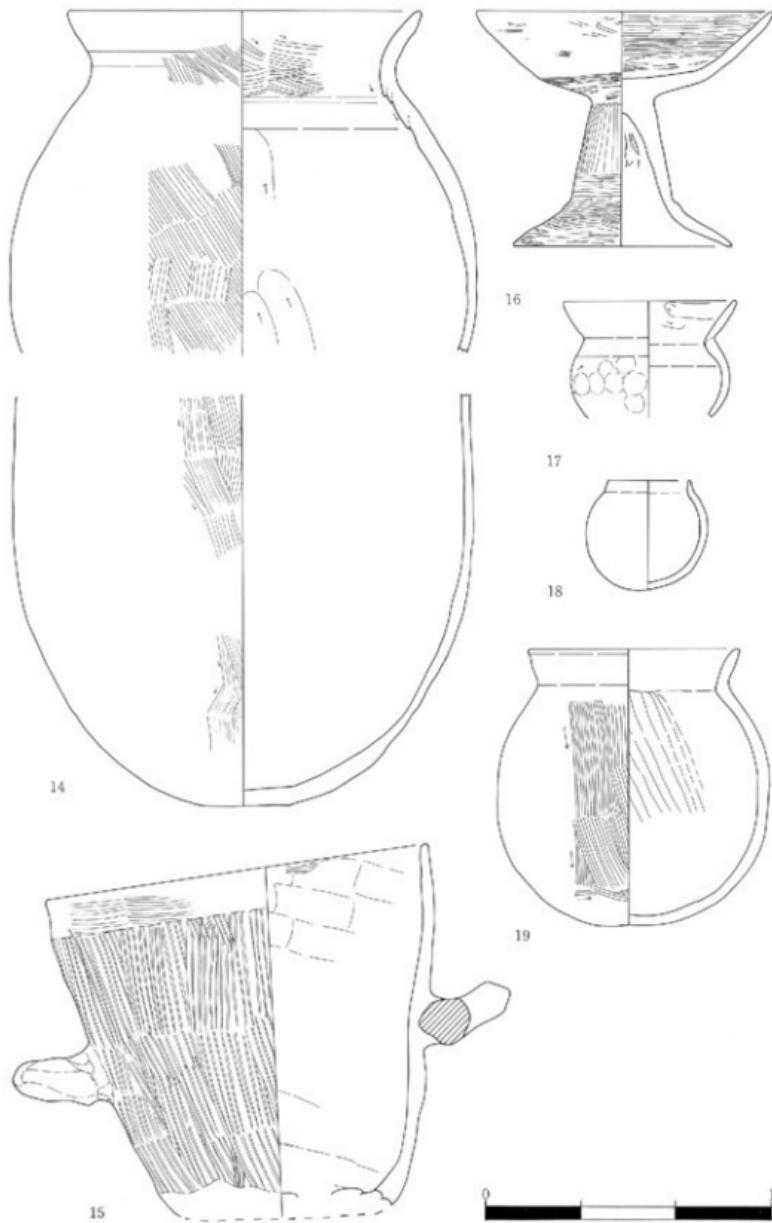




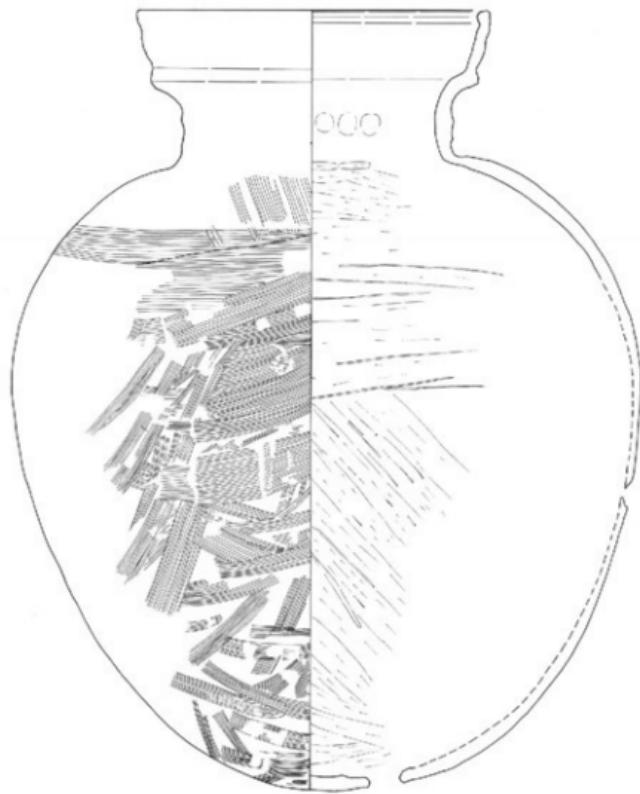
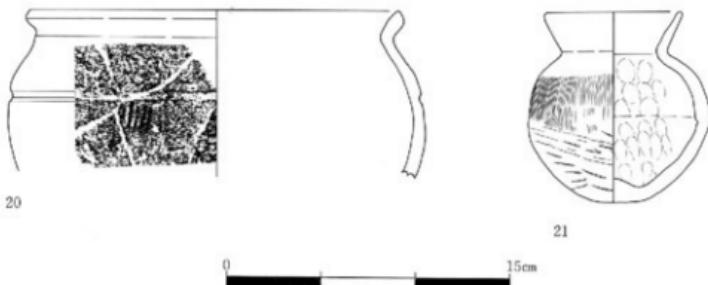
出土遺物実測図 1～3. 桶文式土器



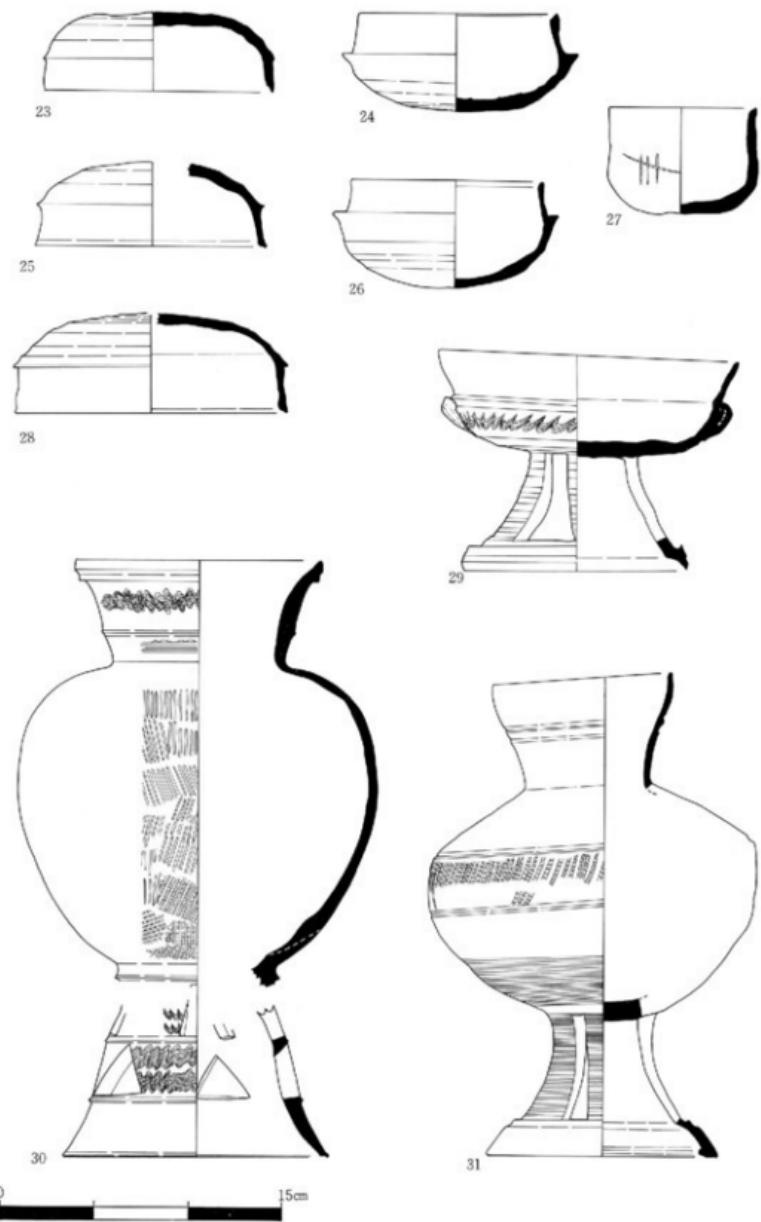
出土遺物実測図 4～6. 弥生式土器、10～12. 製塩土器、7. 石器、13. 土師器、8～9. 韓式系土器



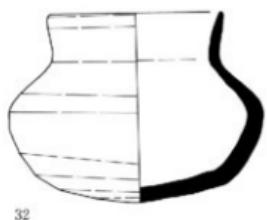
出土遺物実測図 14、15. 韩式系土器、16~19. 土師器



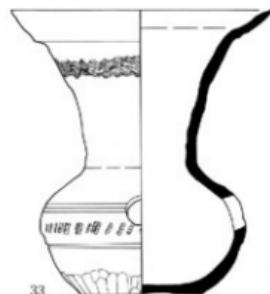
22



0 15cm



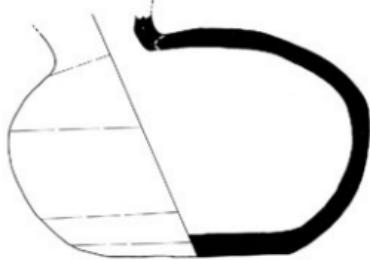
32



33



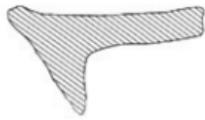
34



35

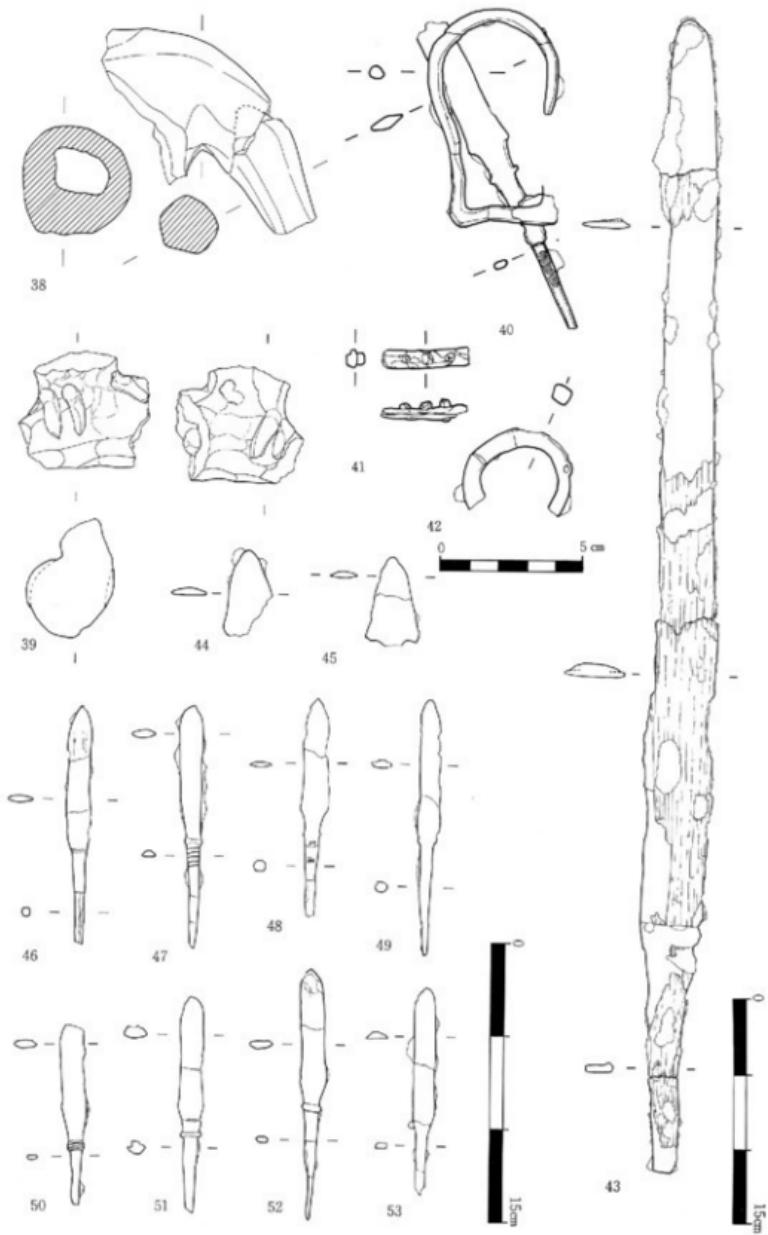


36

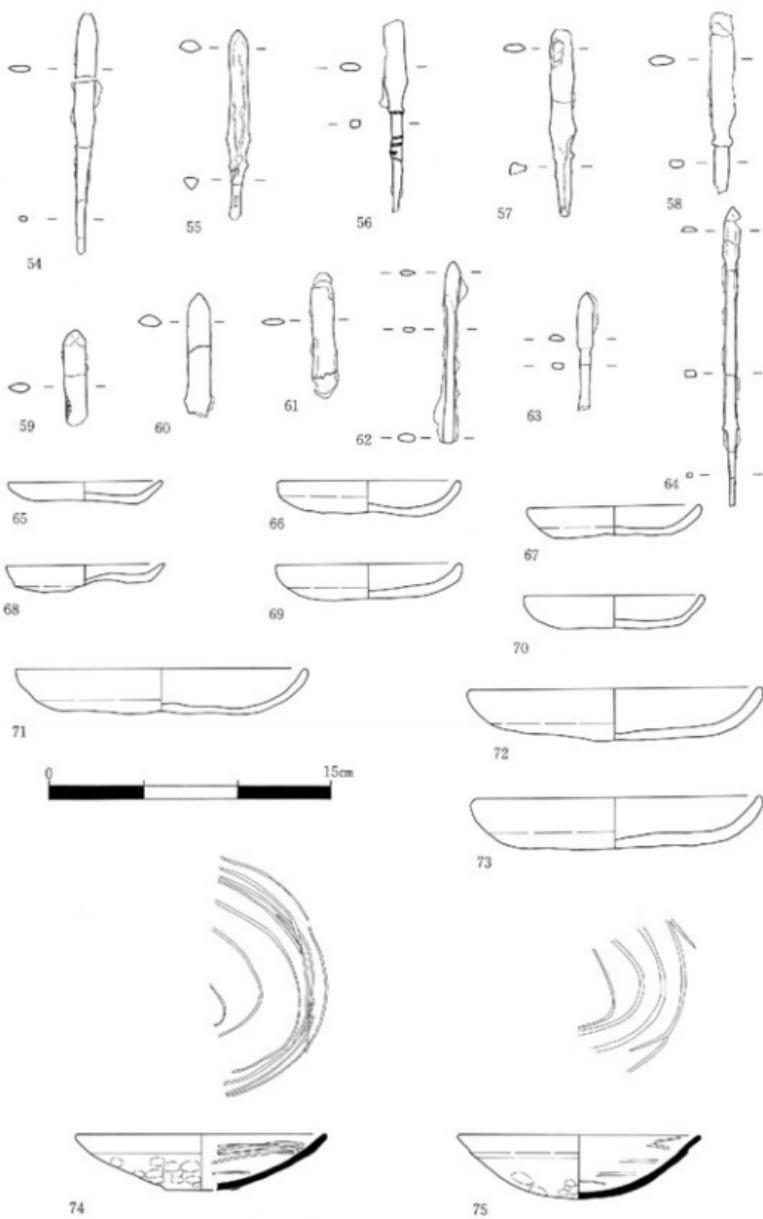


37

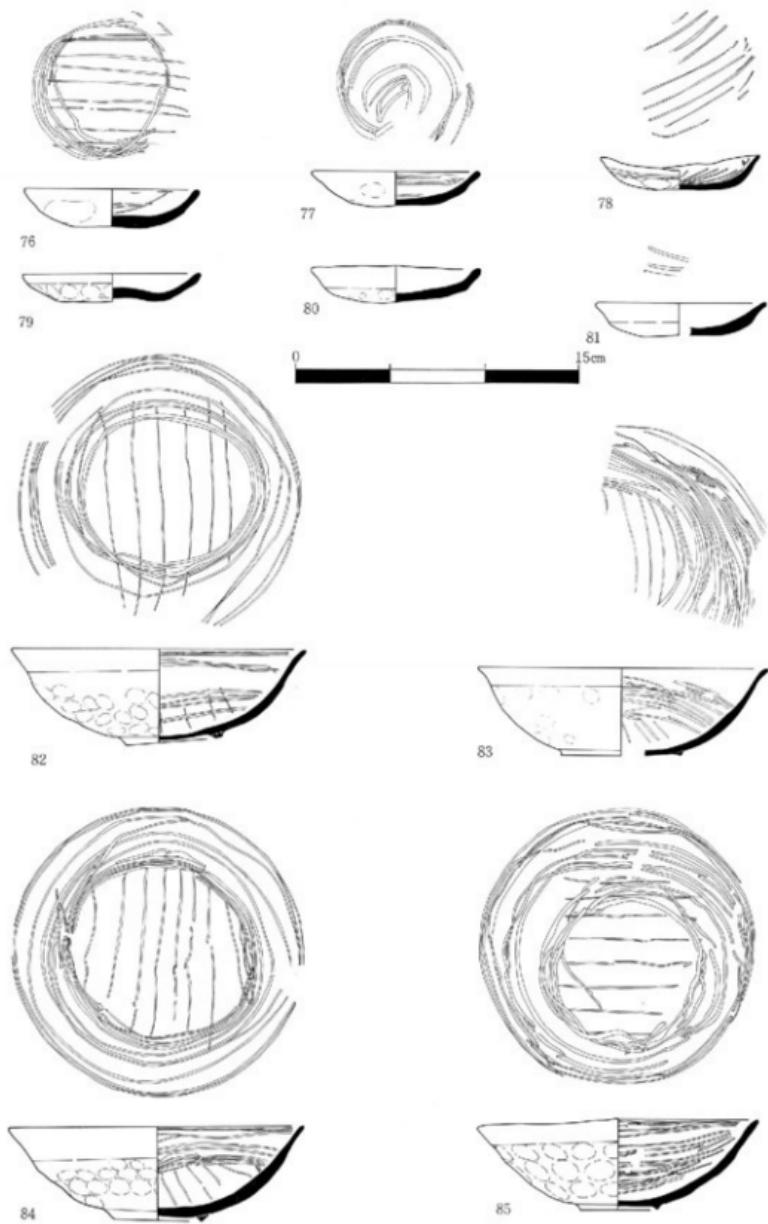


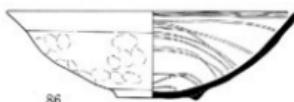
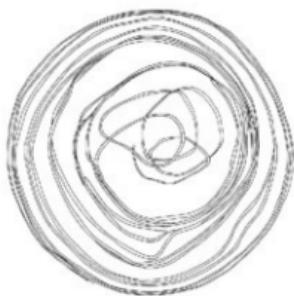


出土遺物実測図 38. 39. 墓輪、40~42. 馬具、43. 鉄剣、44~53. 鉄鎌



出土遺物実測図 54~64. 鉄器、65~73. 土師質土器、74, 75. 瓦器





86

87



88

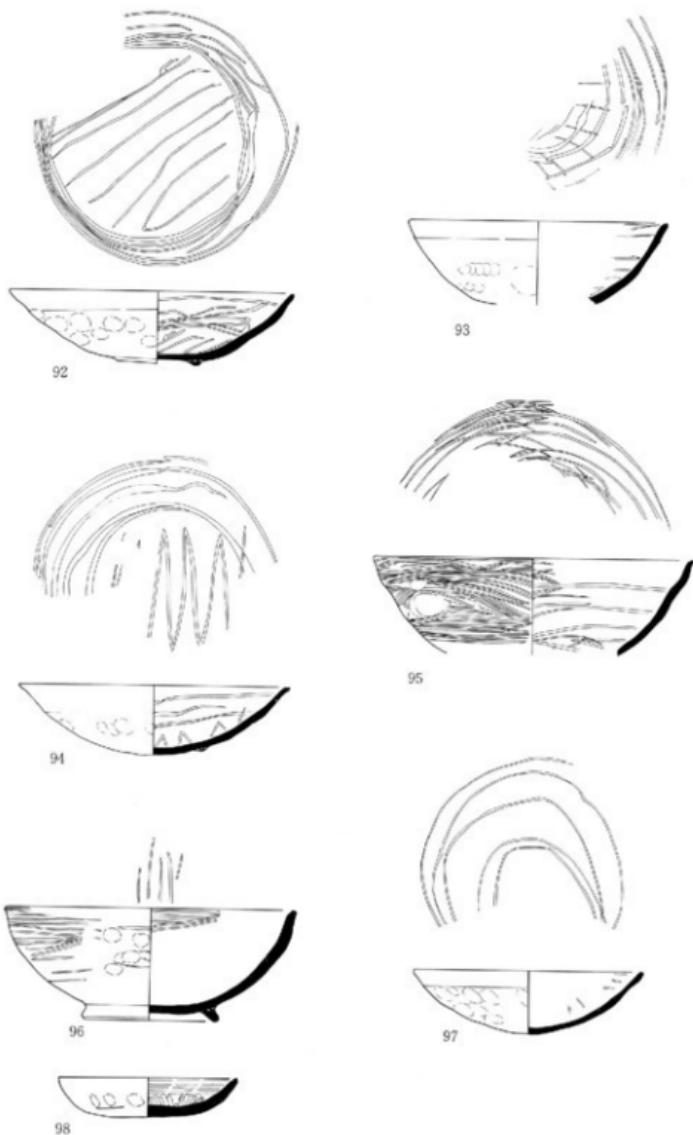
89



90

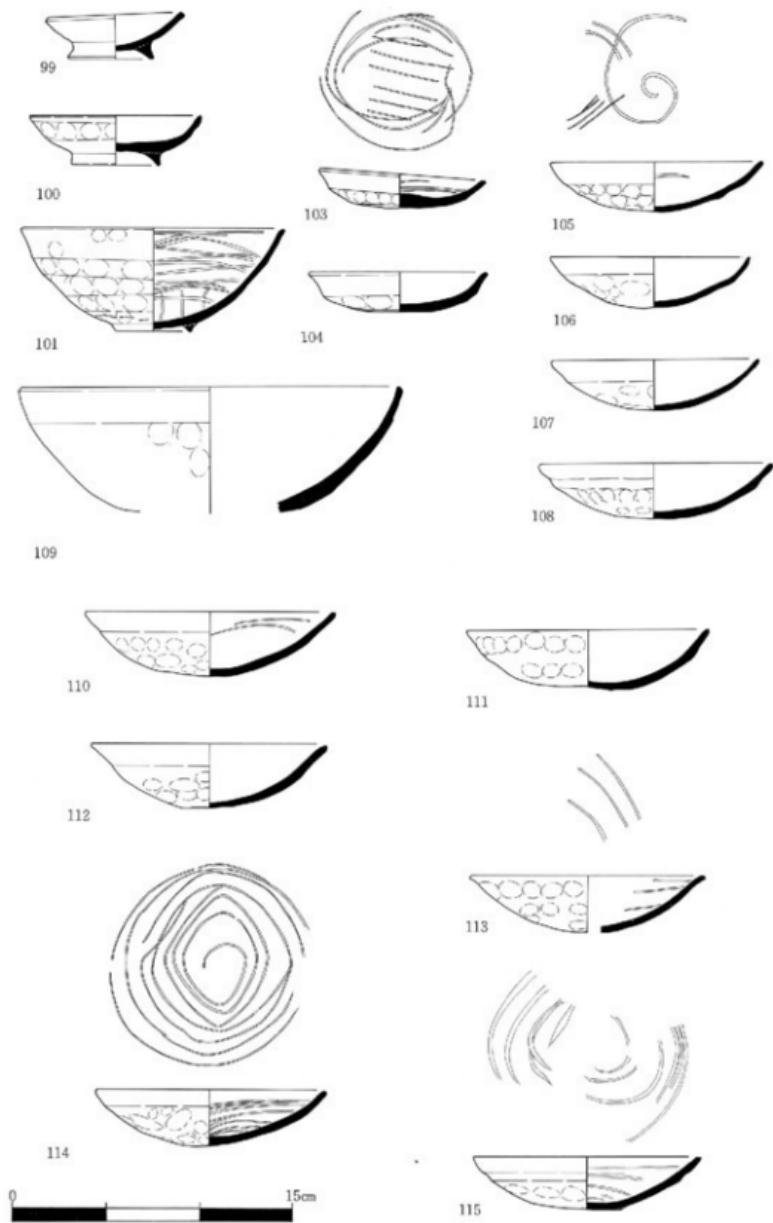
91





0 1 15cm

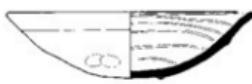
出土遺物実測図 92~98. 瓦器



出土遺物実測図 99~108 瓦器、109 瓦質鉢、110~115 瓦器



116



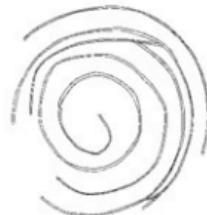
117



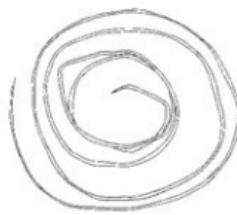
118



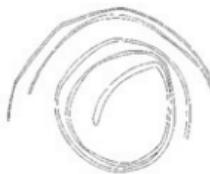
119



120



121



122

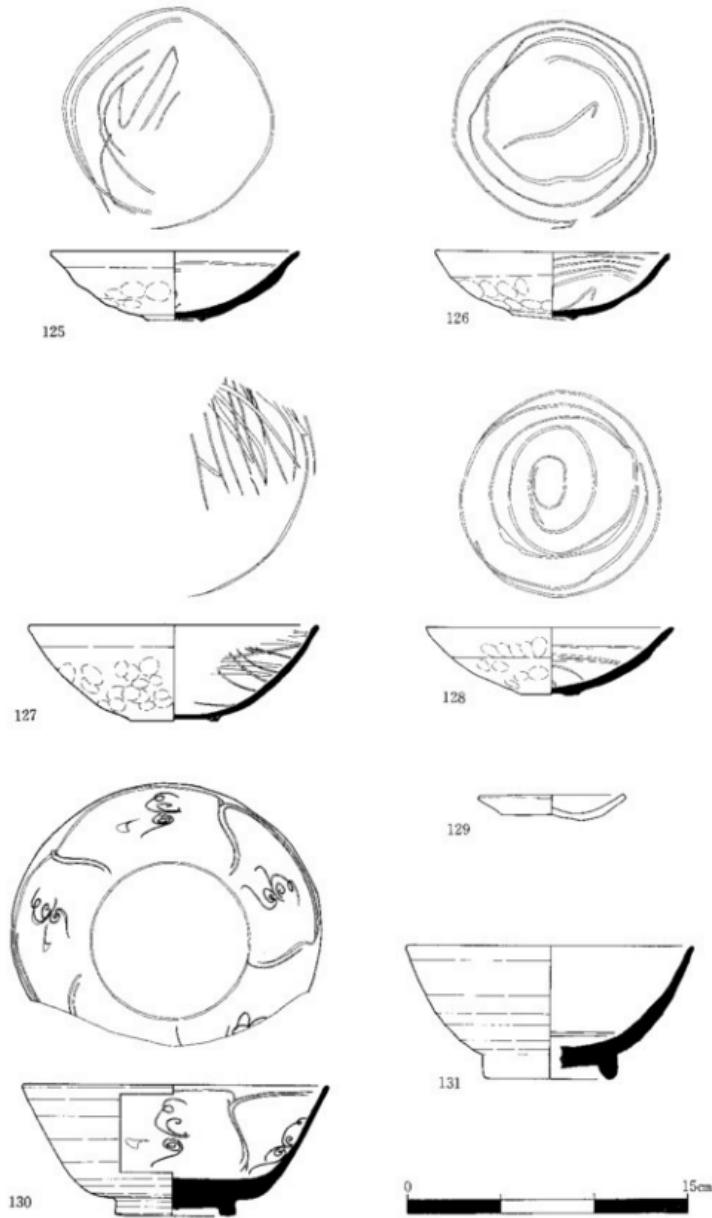


123

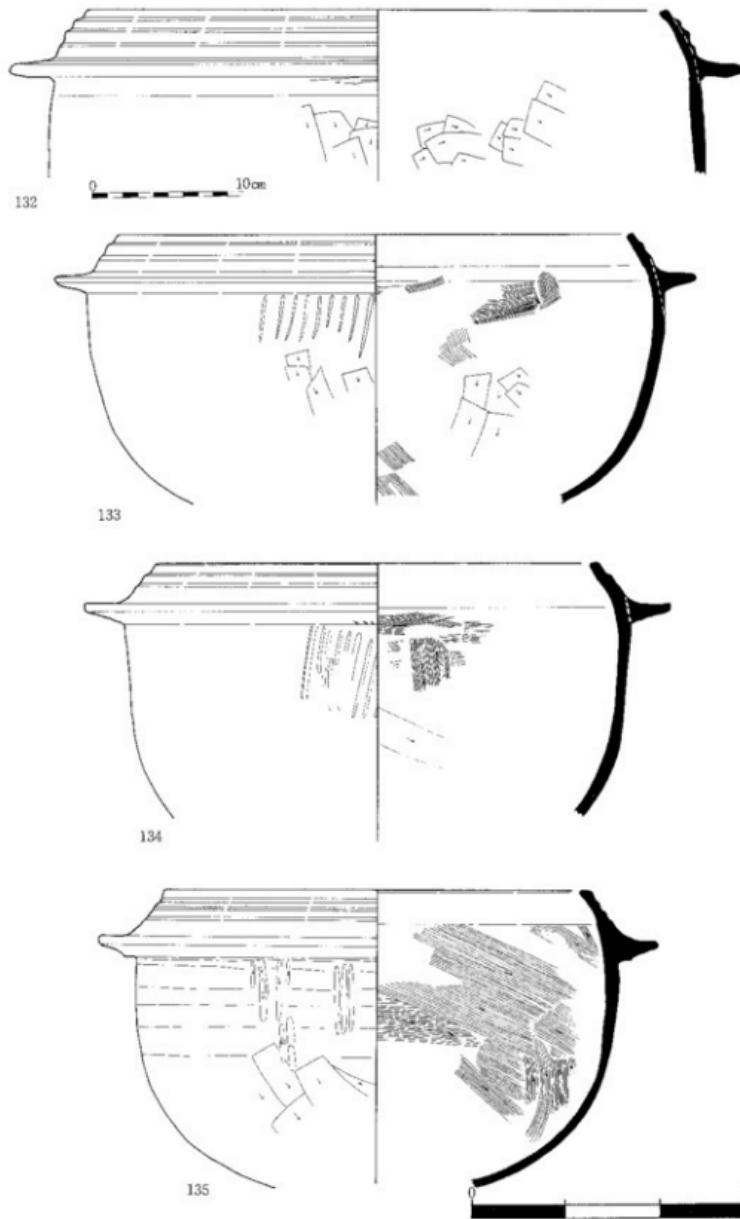


124

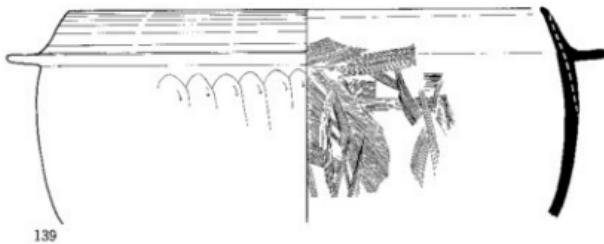
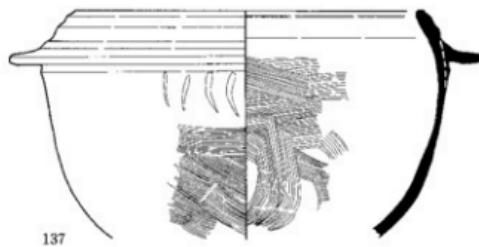
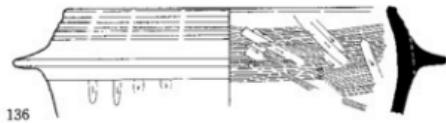


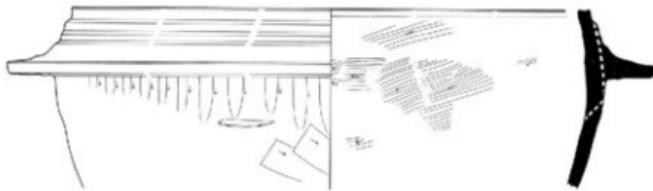
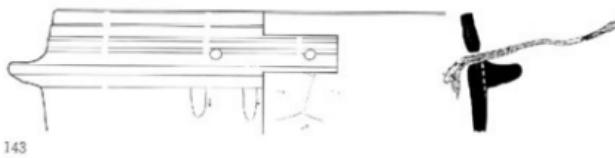
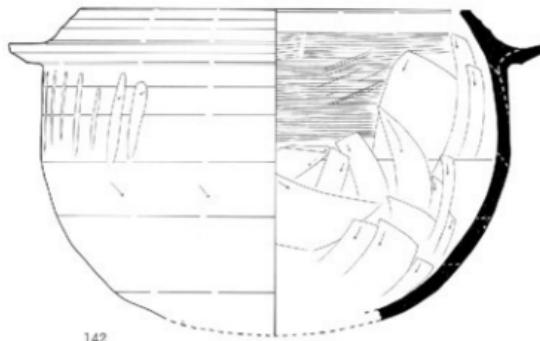
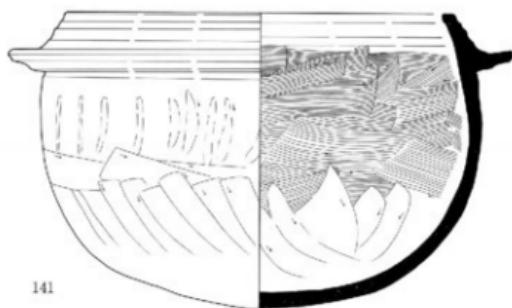


出土遺物実測図 125～128 瓦器、129 土師質土器、130 青磁碗、131 白磁碗

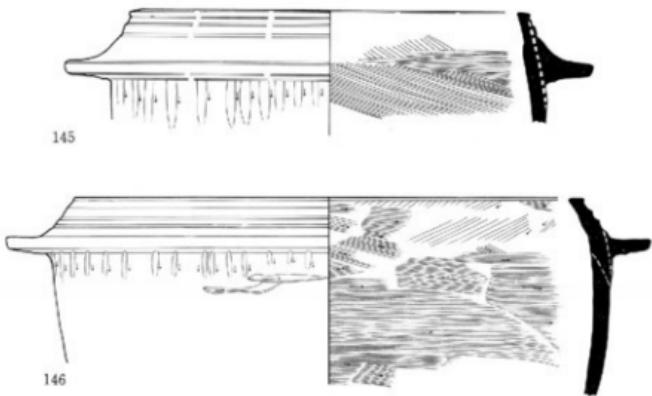


出土遺物実測図 132~135 羽釜





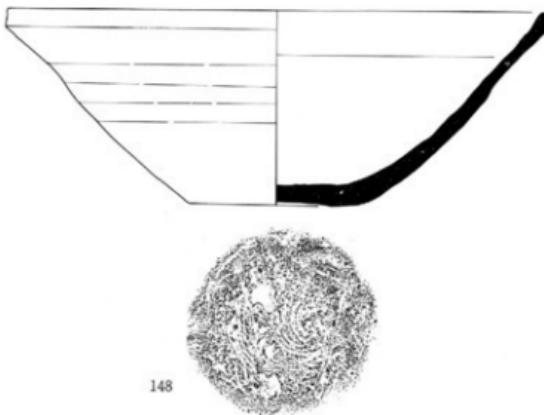
145



146



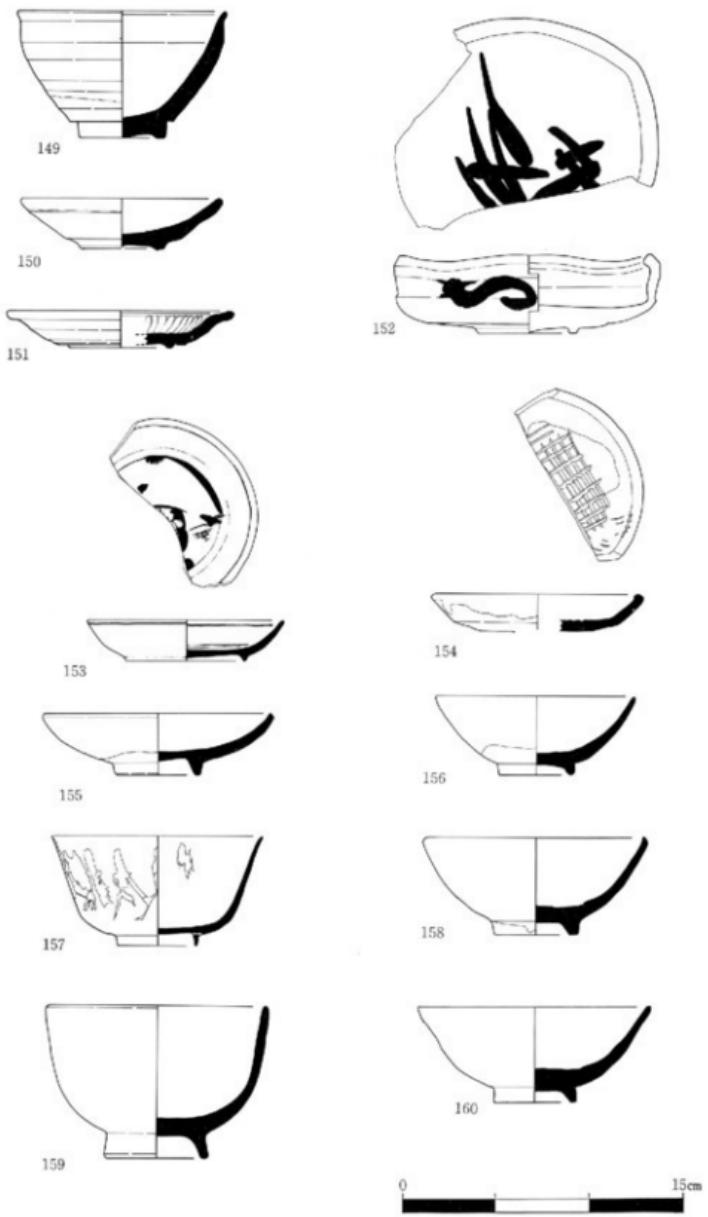
147



148

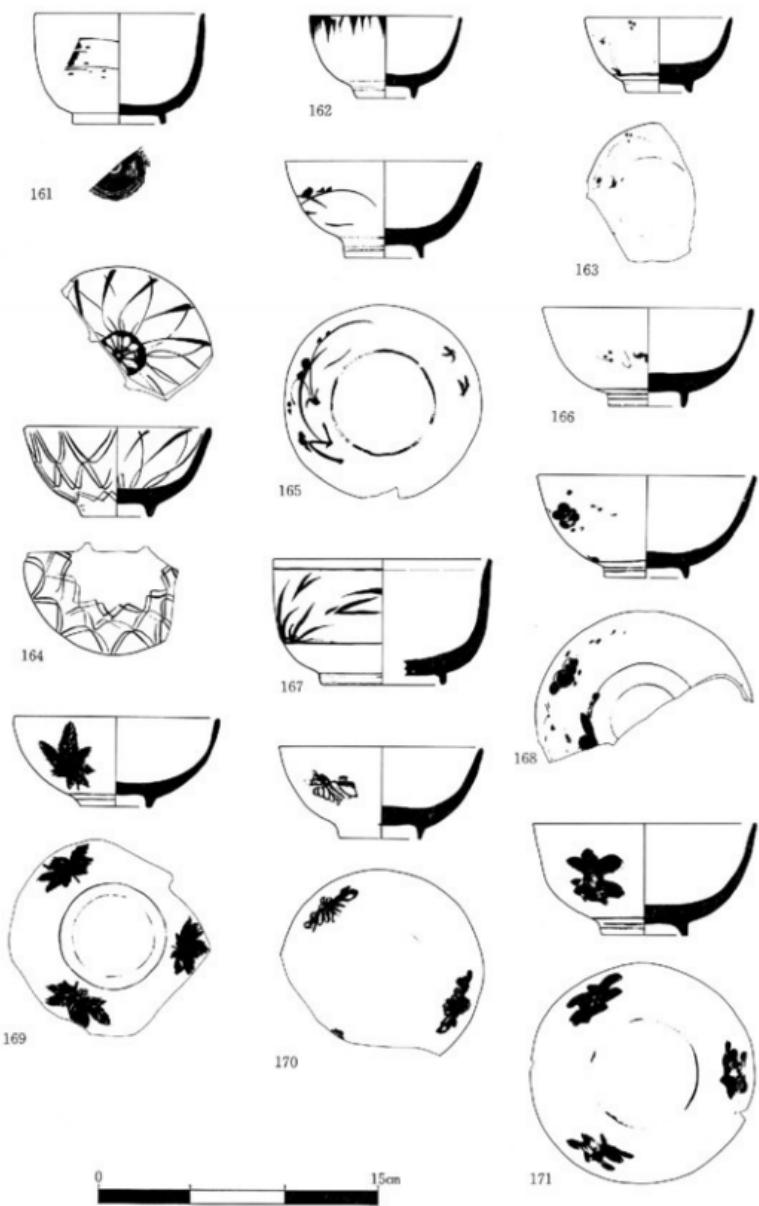


出土遺物実測図 145, 146 羽箭、147 土師質鏡、148 須恵質こね鉢

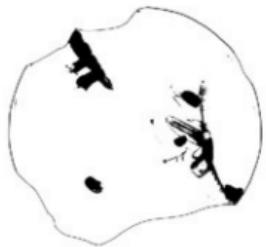


出土遺物実測図

149 天目茶碗、157, 195 唐津碗、150 施釉小皿、151 菊皿、152 織部鉢、153 青花小皿、
154 おろし皿、155 施釉皿、156, 158, 160 156, 158, 160 磁器碗



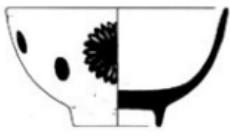
出土遺物実測図 161~171 染付



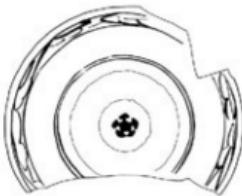
172



173



174



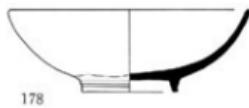
175



176



177



178





180



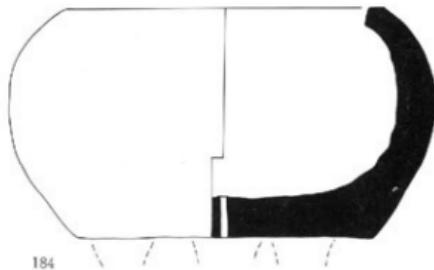
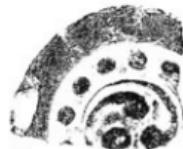
181



182



183



184



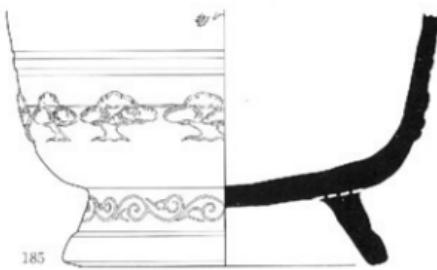
186



187



188



185

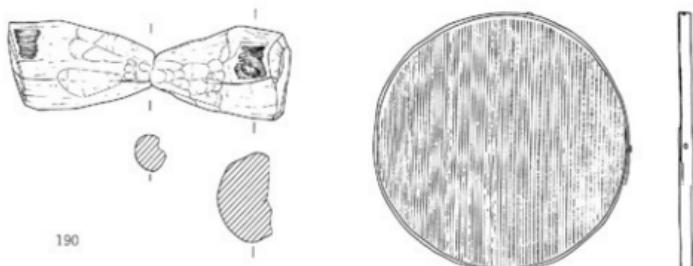


189

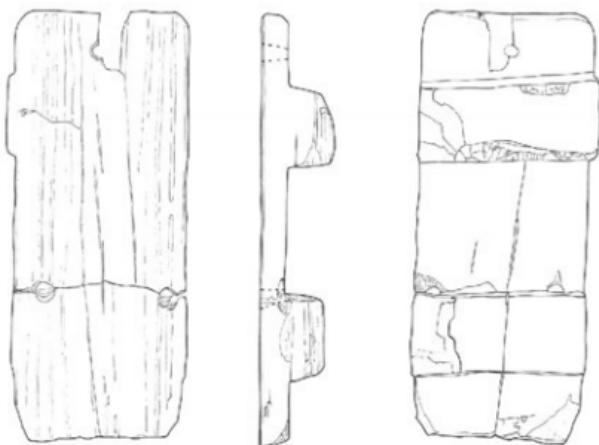


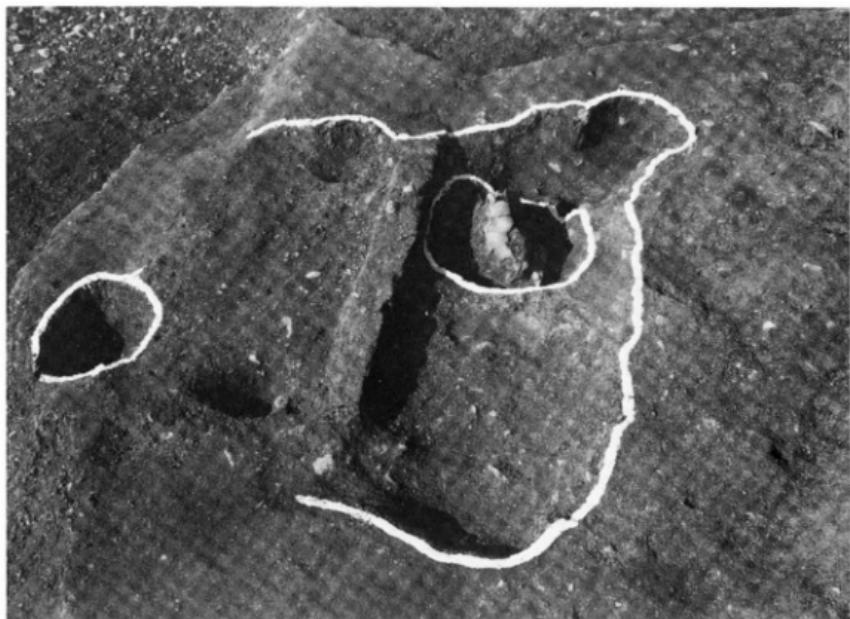
15cm

0



191

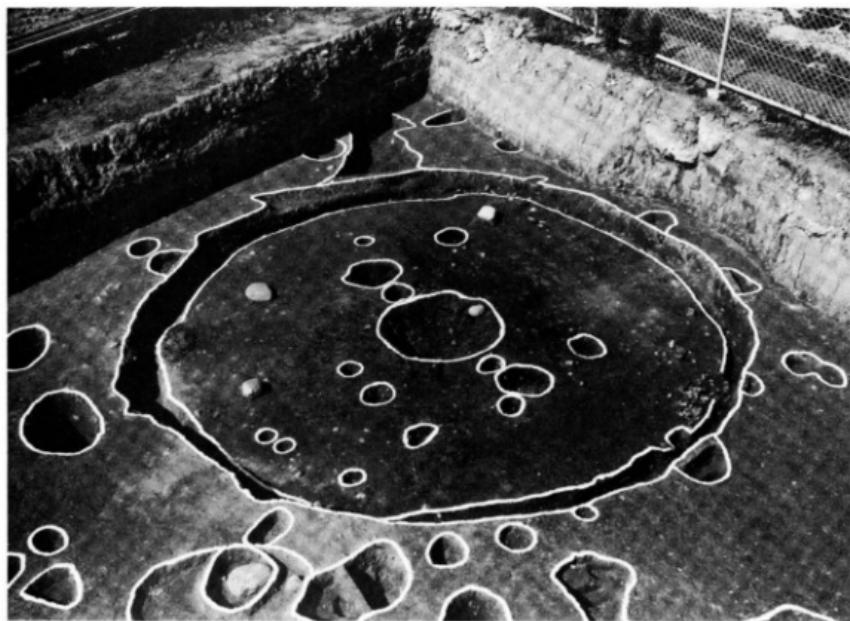




土塙 5-1 (東から)



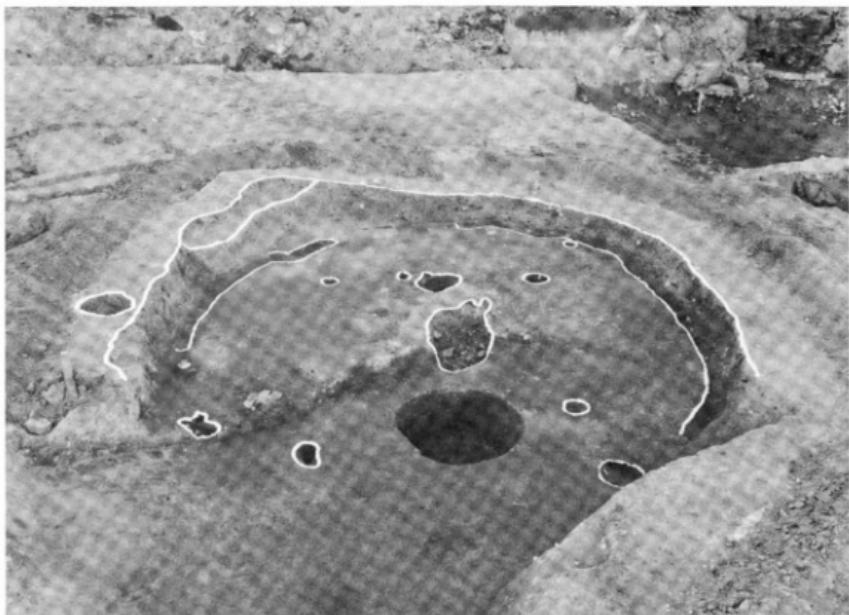
土塙 5-1 繩文式土器出土状況



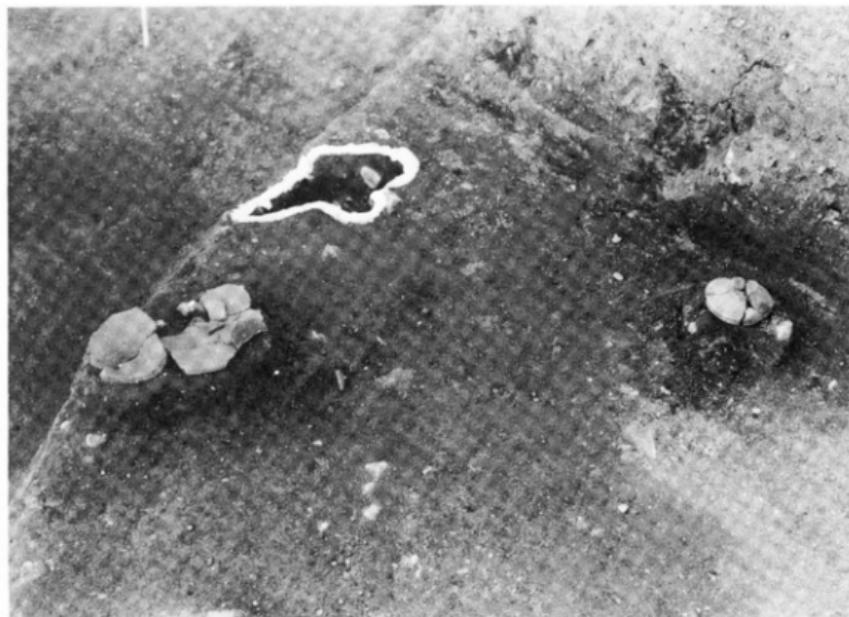
住居 5-1



住居 5-1 土器出土状況



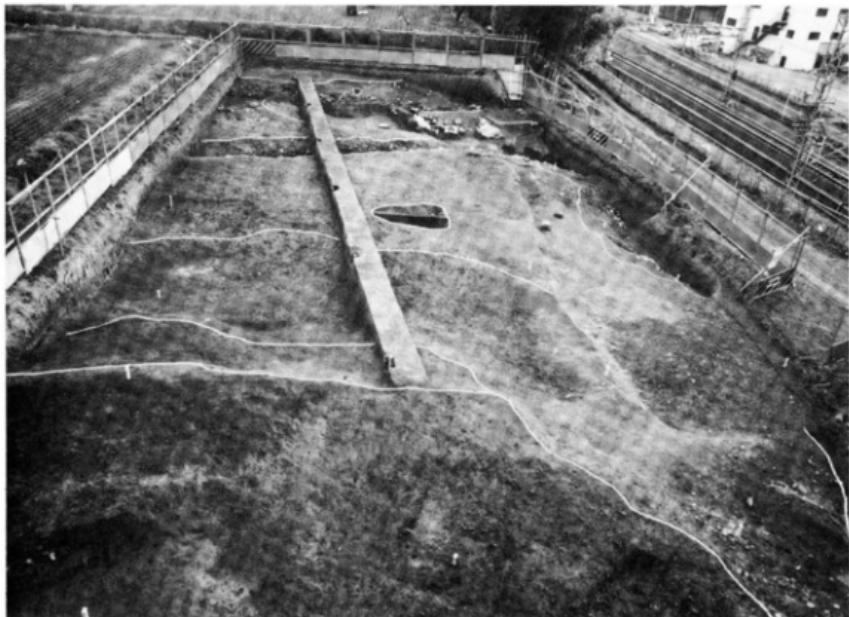
住居 5-2 (南から)



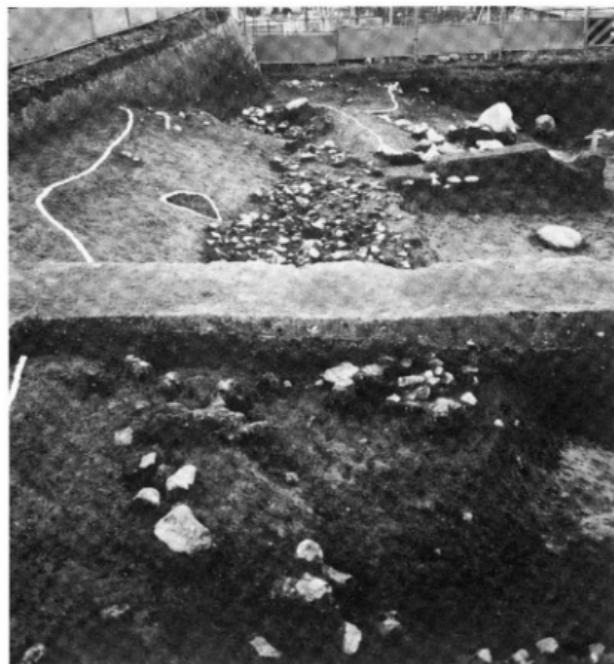
住居 5-2 土器出土状況



周溝2-701（南から）



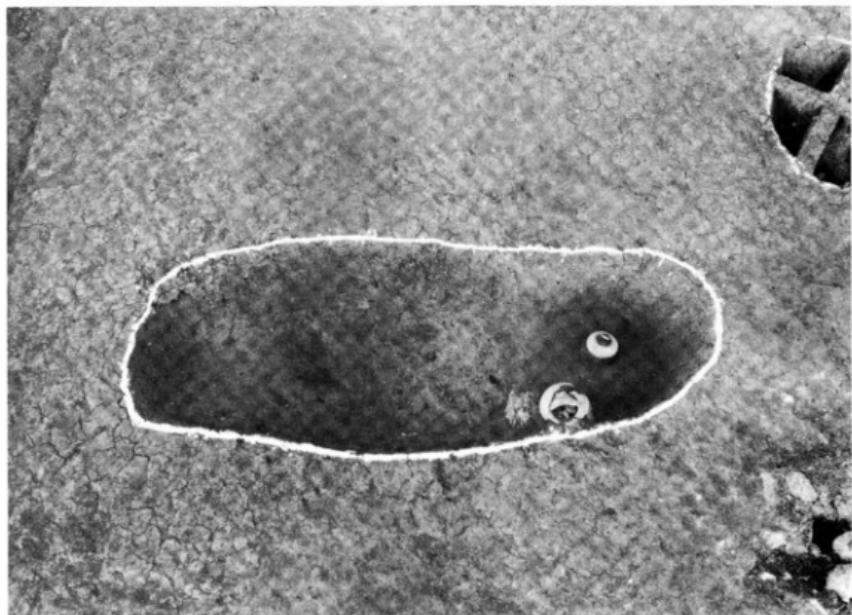
周溝2-702（北から）



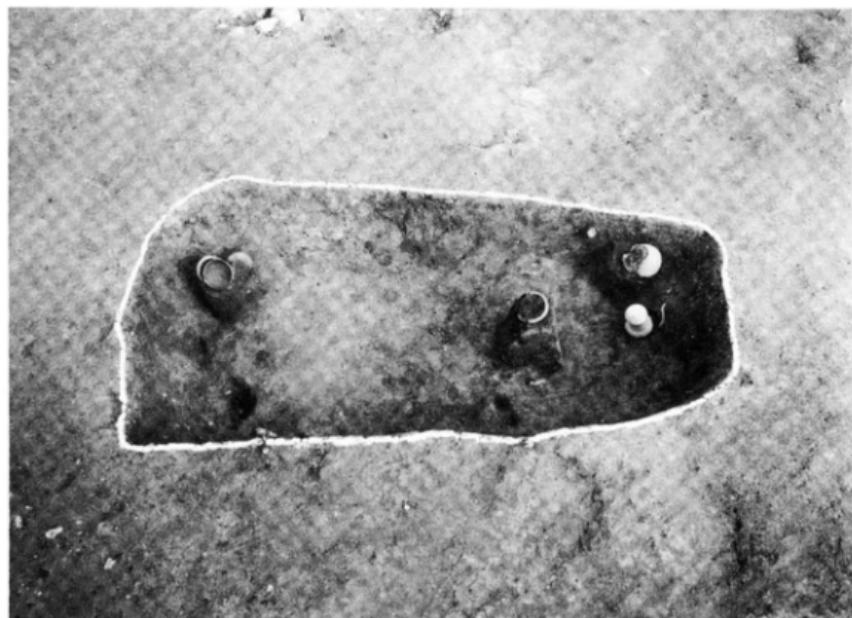
溝2-701（東から）



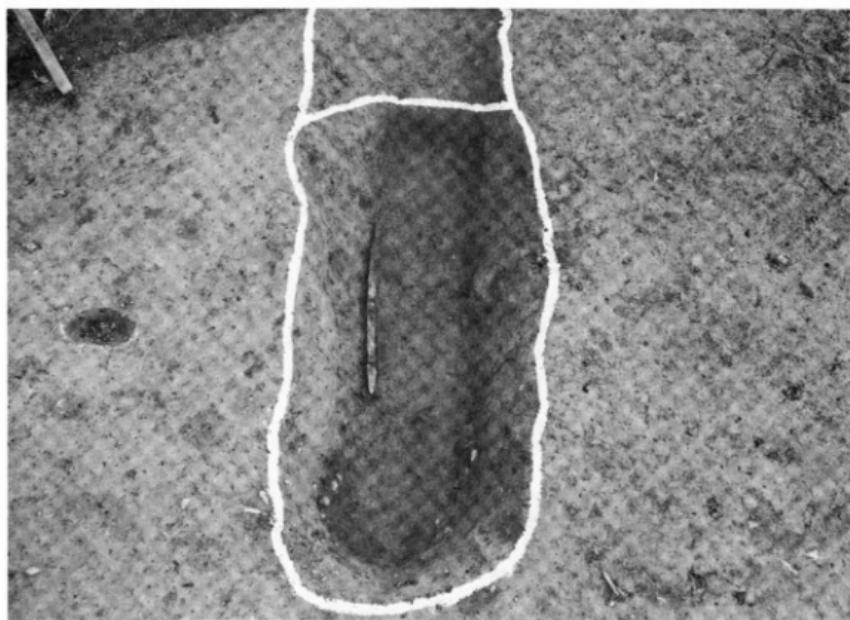
溝2-701 墓輪出土状況



土塙 2-701 (南から)



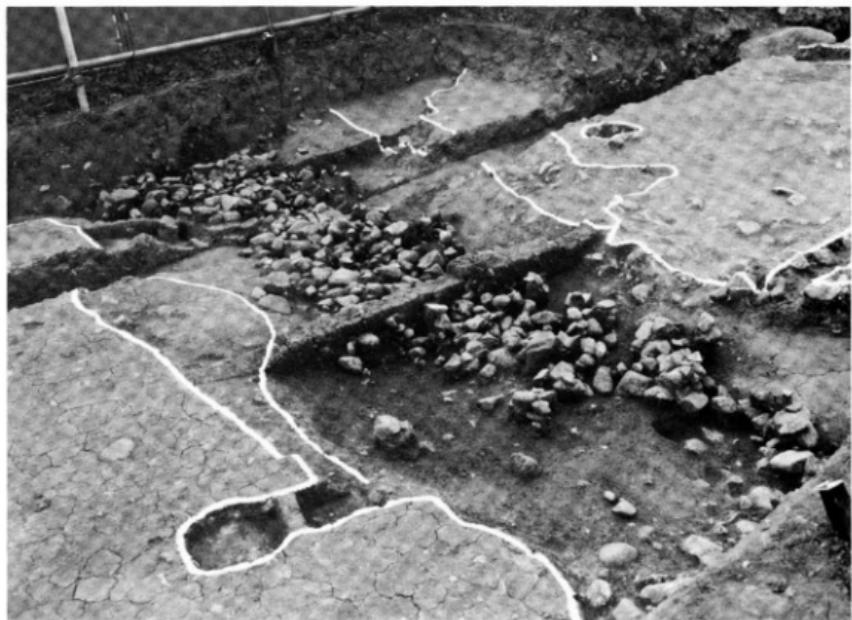
土塙 2-702 (南から)



土塙 4—902 (北東から)



土塙 4—902 鉄剣出土状況



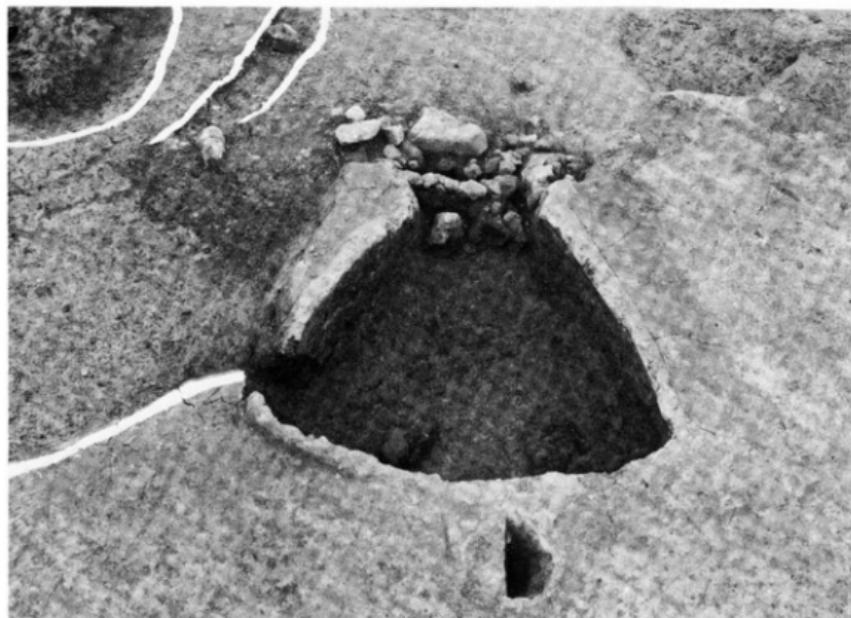
溝4-23(南東から)



溝4-23鐵劍、馬具出土状況



溝4—901 土師器出土狀況



小型窯状造構 1号窯



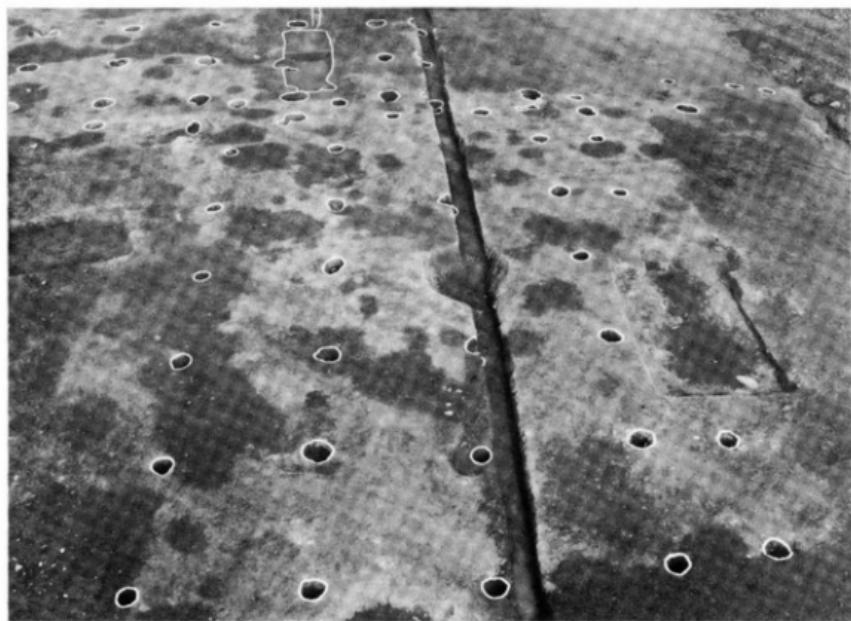
窯状造構 3-1



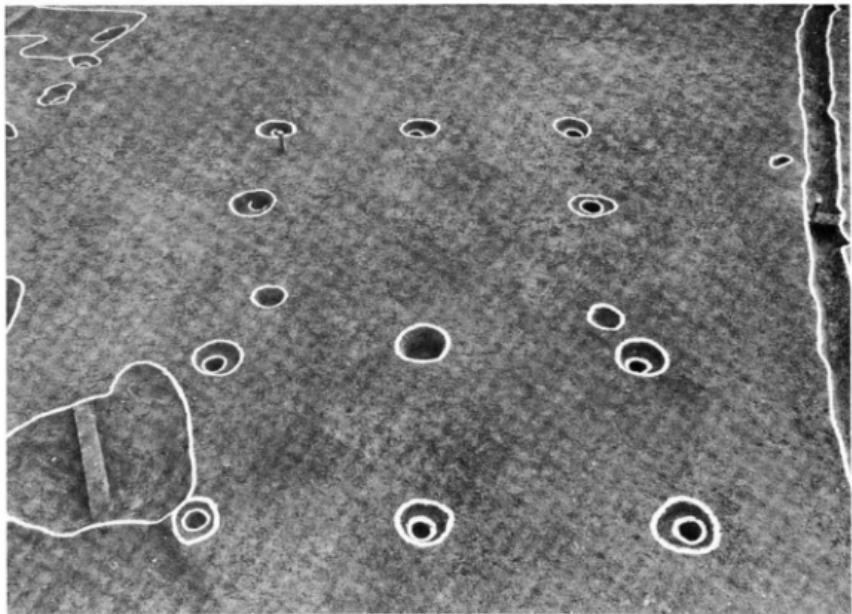
窯状造構 3-1 土器出土状況



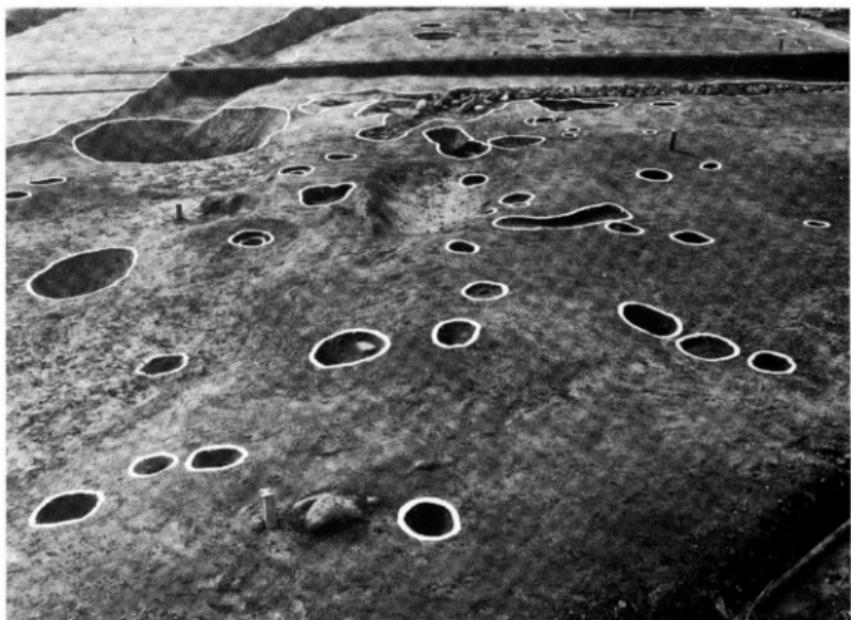
建物5-1



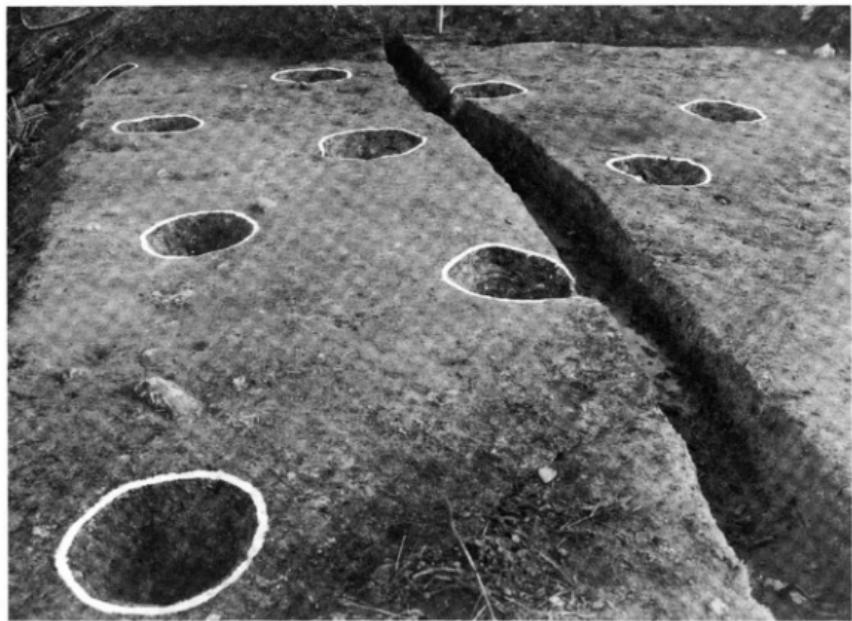
建物5-2



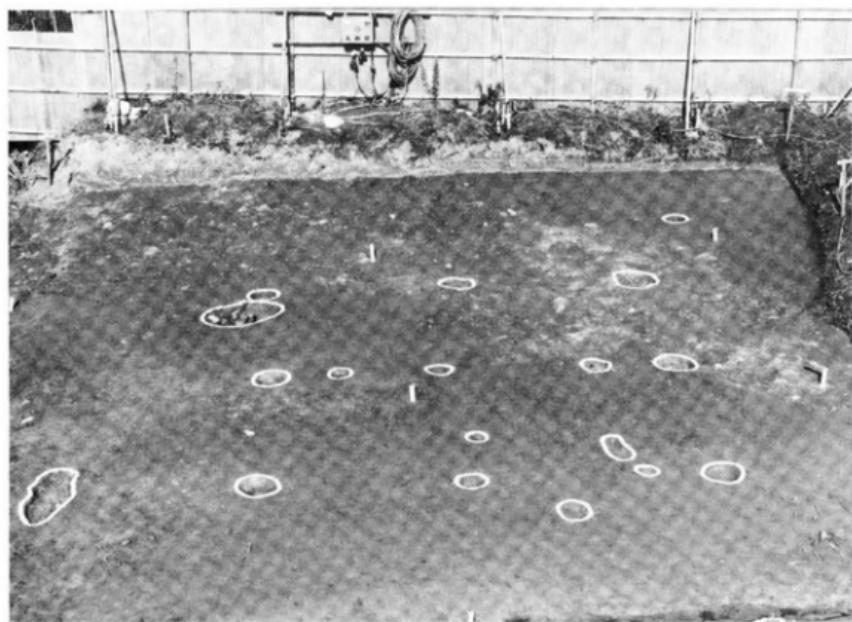
建物 4-801



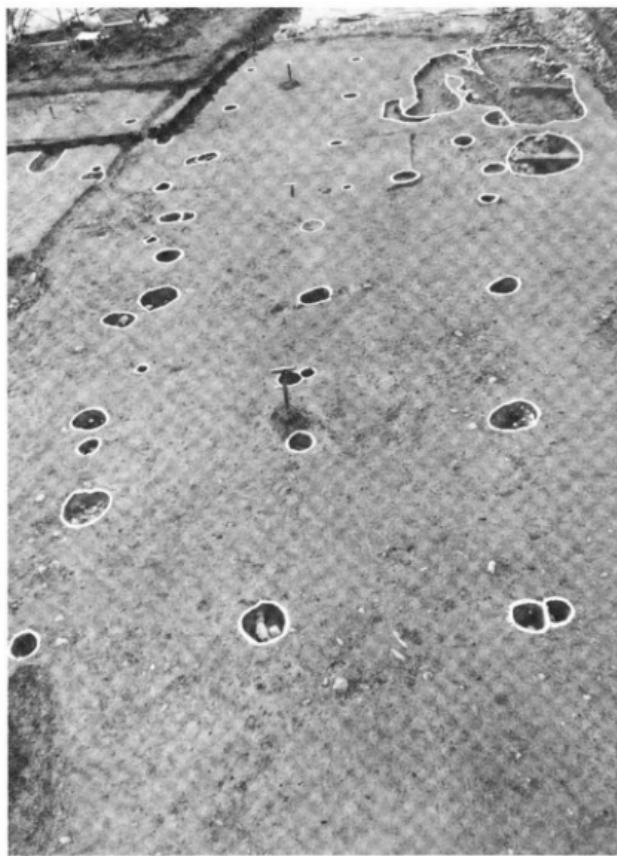
建物 3-3



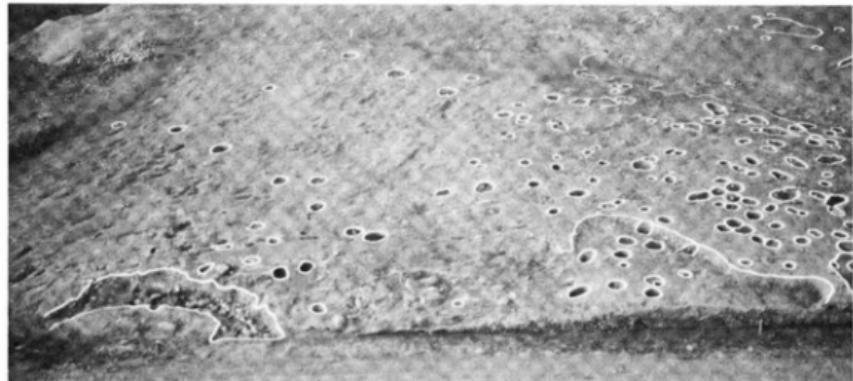
建物 3-6



建物 3-7



建物 3-17



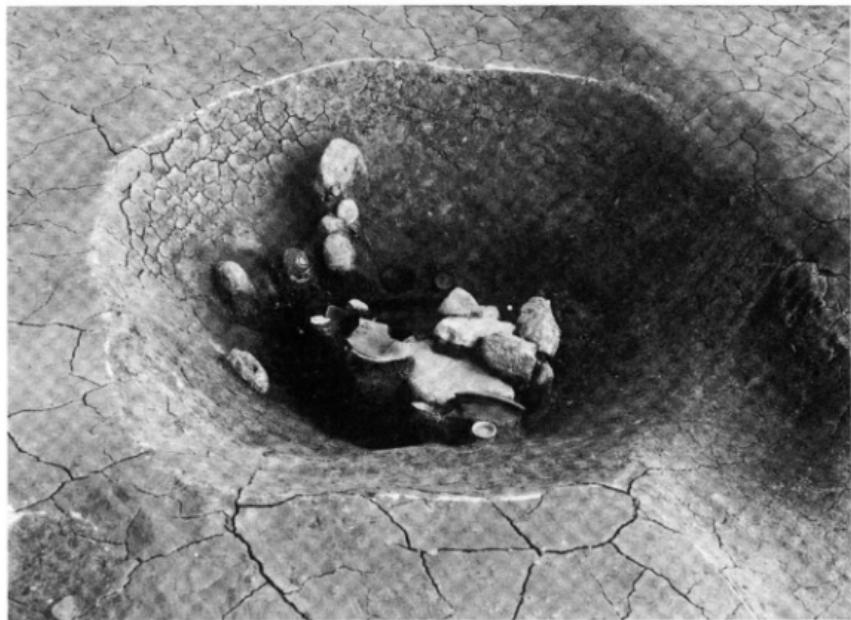
建物 2-8 建物 2-9



袋状土塙 羽箭出土状況



袋状土塙 完掘



井戸 3-1



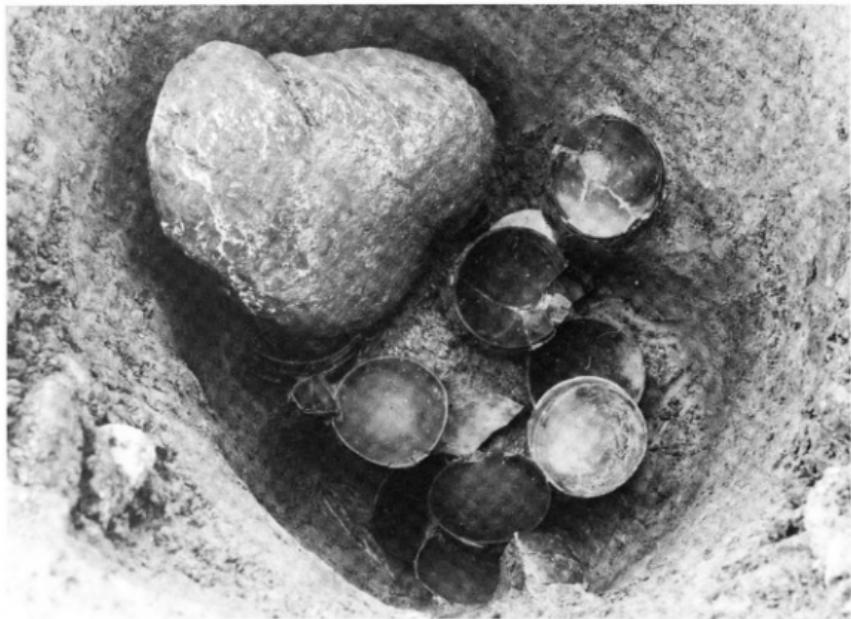
井戸 3-9



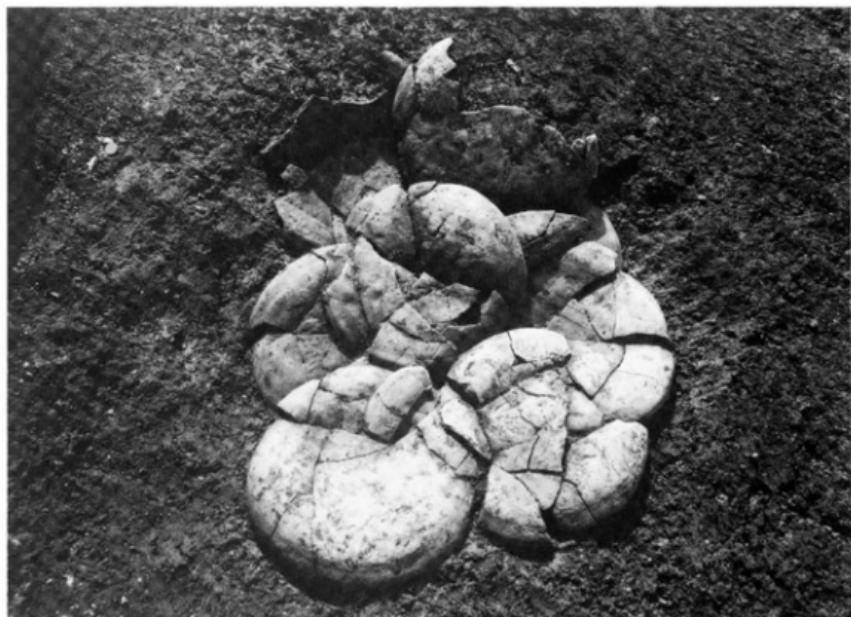
井戸 3-2



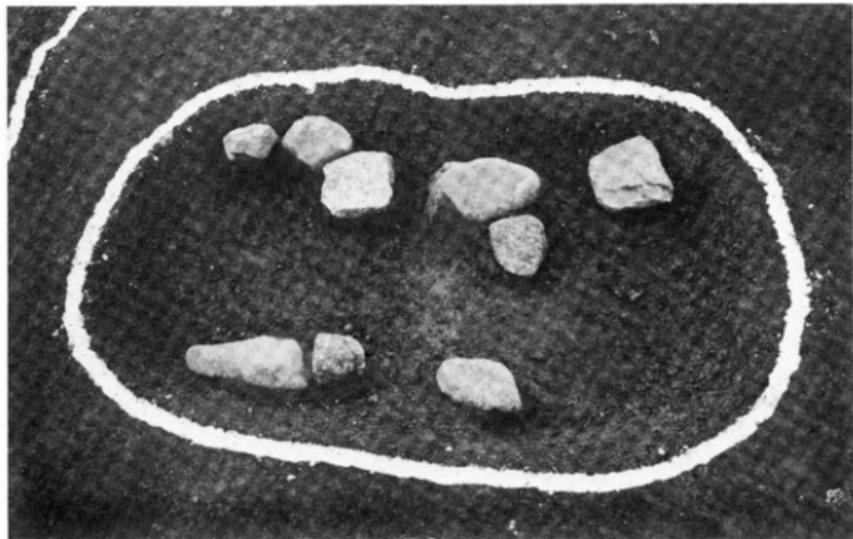
井戸 3-2 完掘



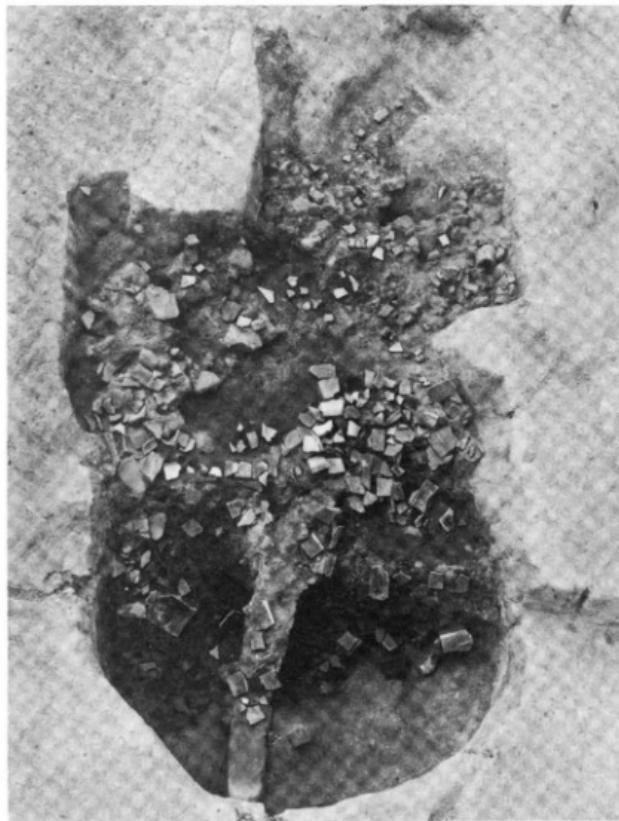
井戸 4-307 瓦器出土状況



ピット 4-511



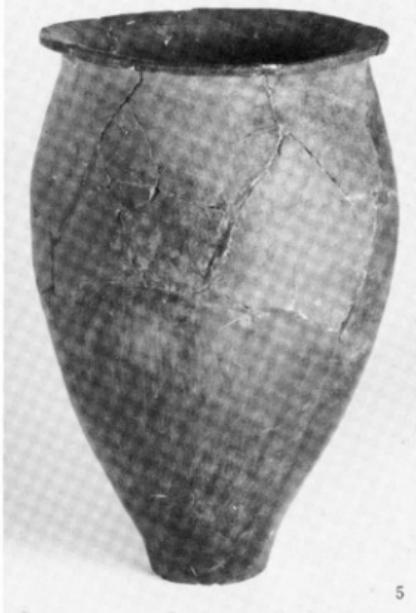
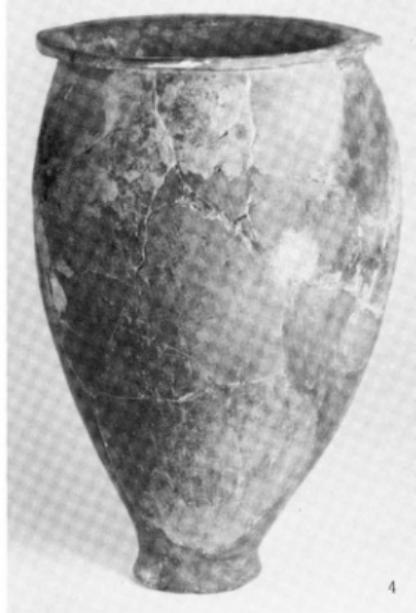
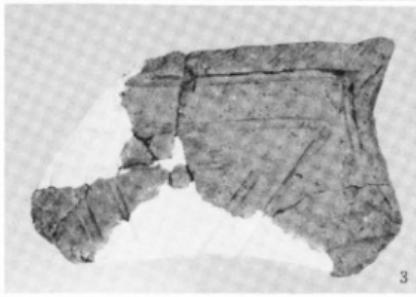
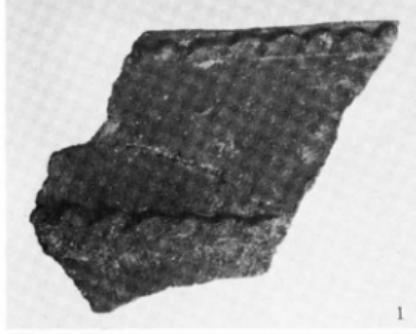
土塙 3-96



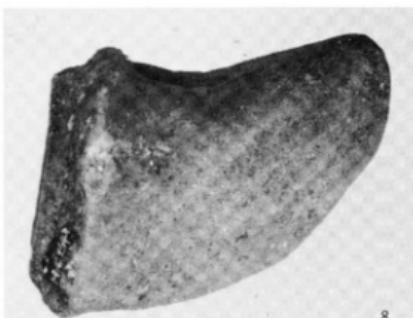
瓦窯



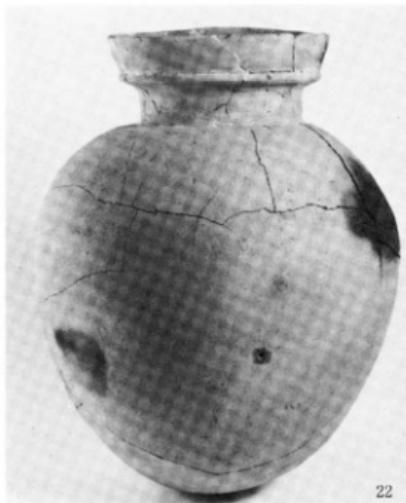
土塙 3-156



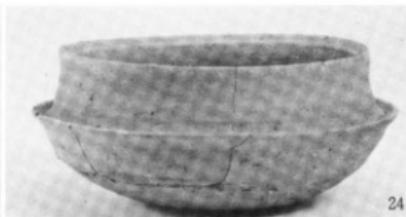
圖版 57 韓式系土器甌(8·15)、土師器壠(18)·高杯(16)·甕(19)·小型丸底壺(21)



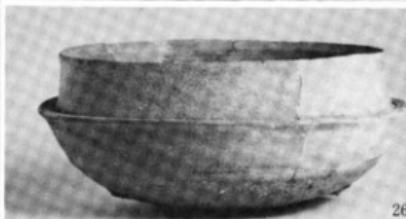
土師器壺(22)、須惠器杯蓋(25·28)、杯身(24·26)、塊(27)、高杯(29)、甕(33)



22



24



25



26



27



28



29



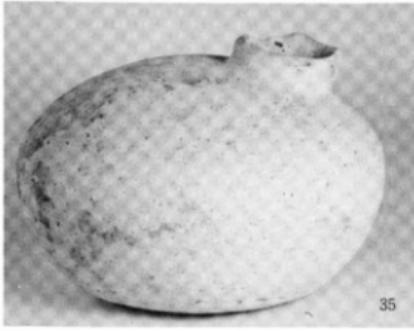
31



30



32



35



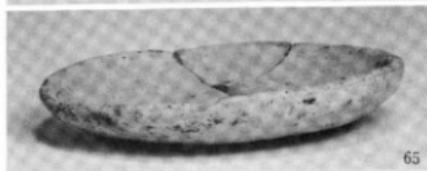
37



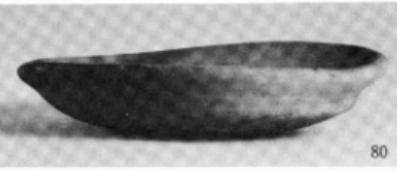
64



77



65



80



68



71



70



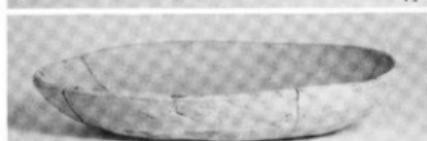
82



71



84



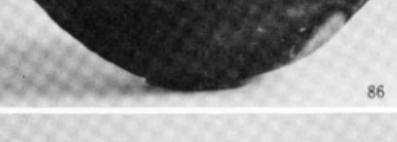
72



85



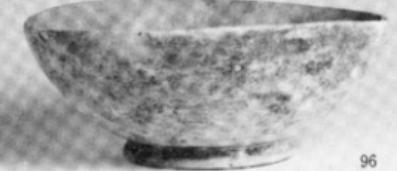
73



86



76



96



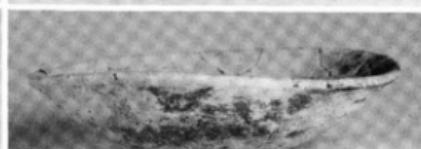
98



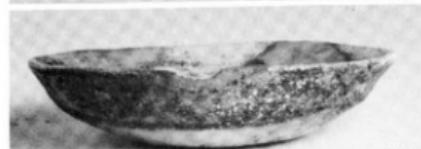
115



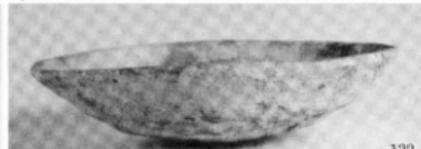
103



120



104



122



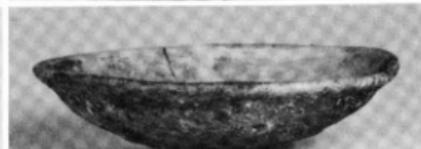
119



121



114



125



117



126



99



100

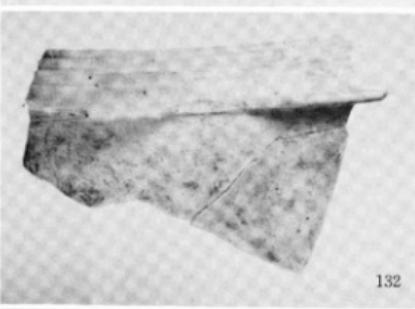
瓦器塊(128)、青磁碗(130)、瓦質羽釜(132)
 • 133
 • 135
 • 139
 • 140
 • 141
 • 142



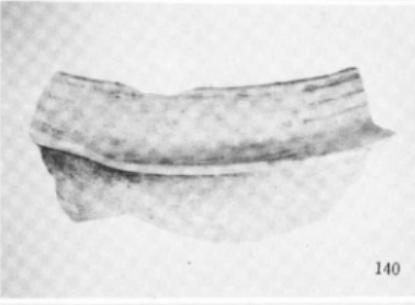
128



130



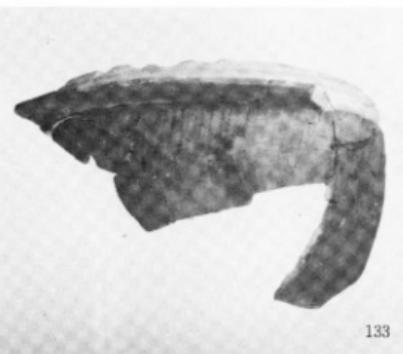
132



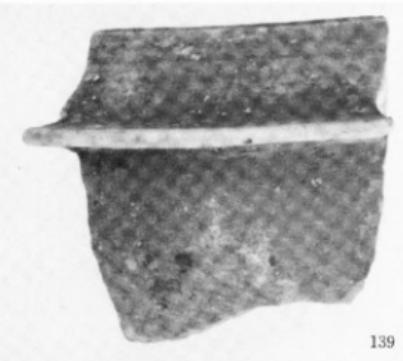
140



135



133



139



141



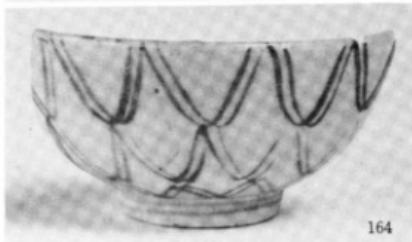
142



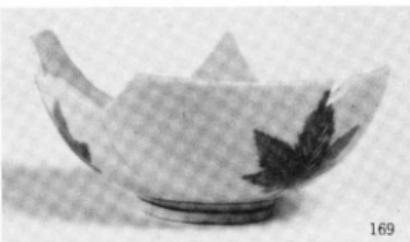
149



159



164



169



165



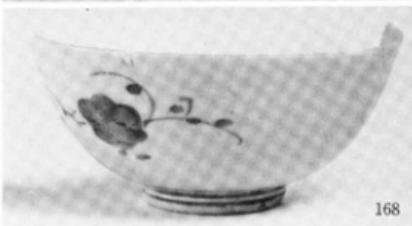
170



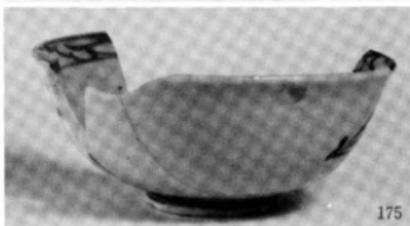
167



171

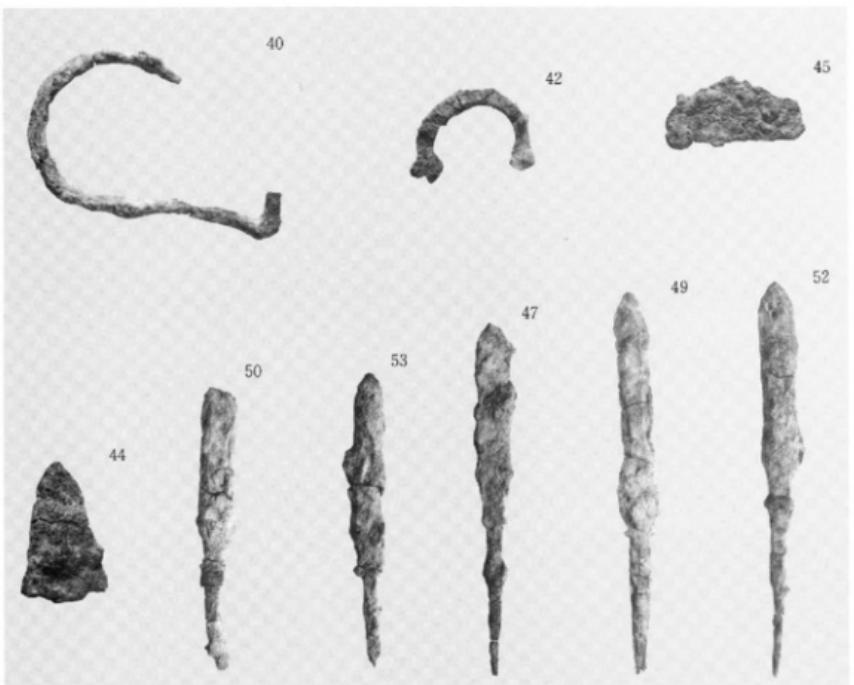


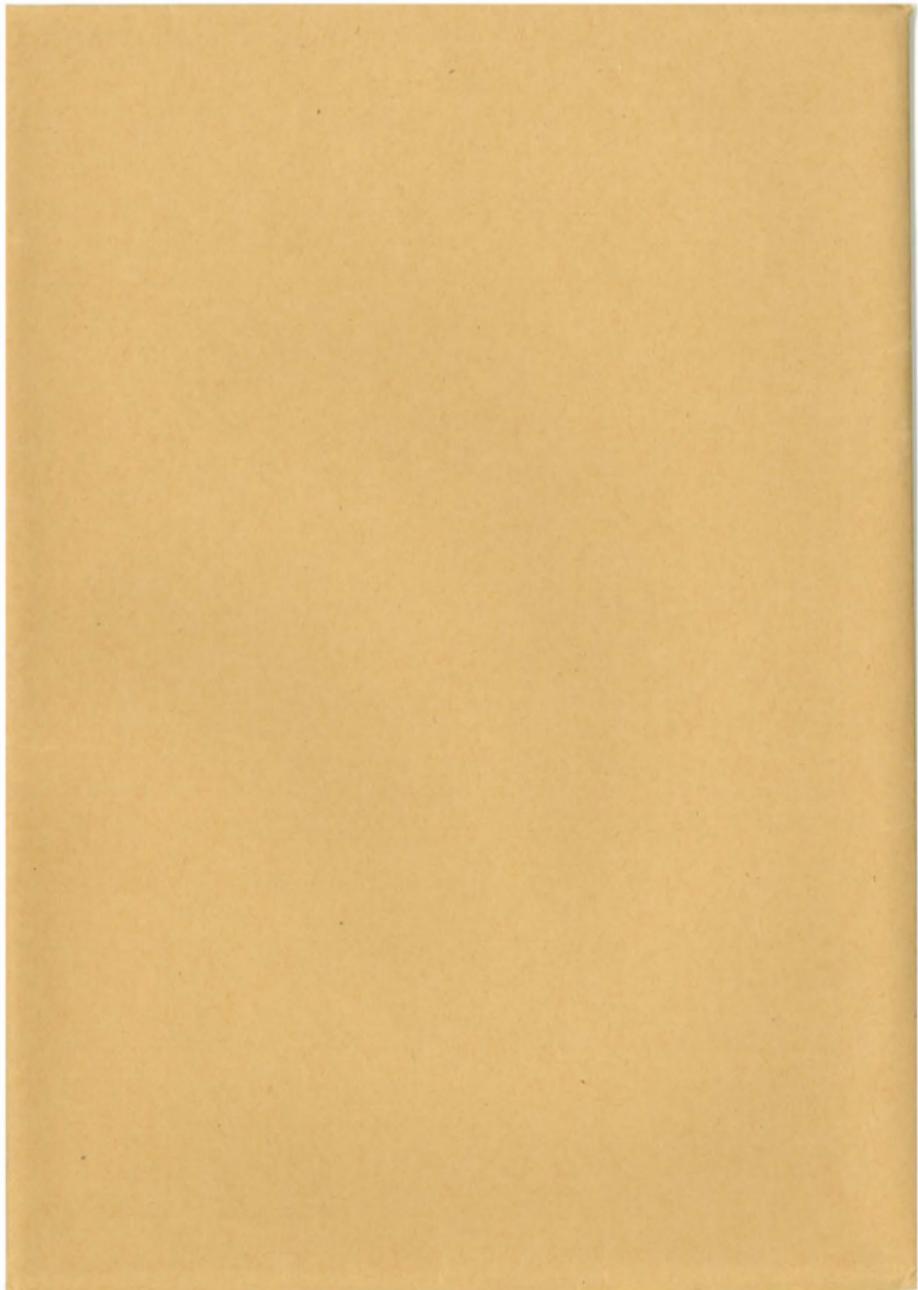
168

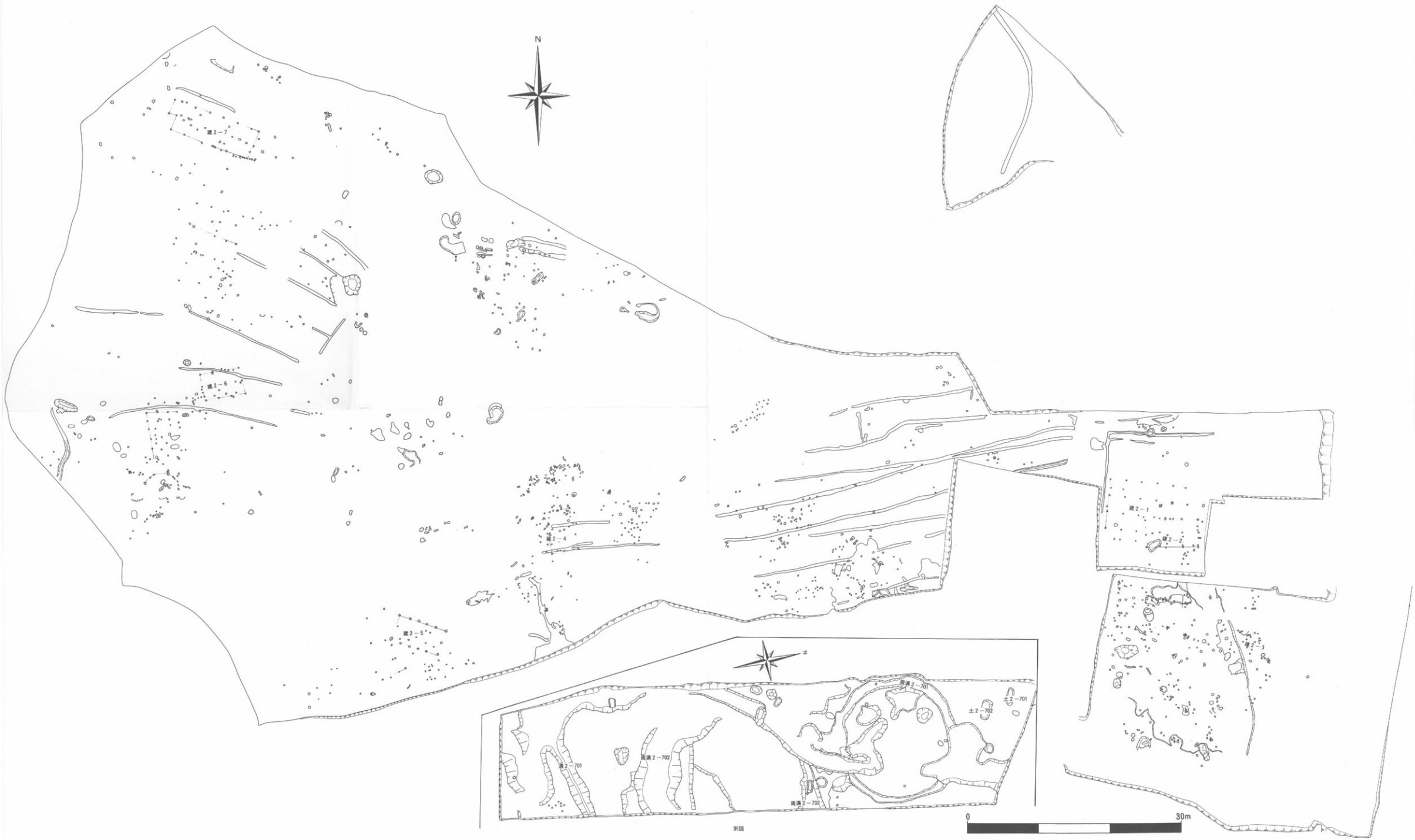


175

圖版 64
馬具(40·42)、鐵鎌(44·45)、
鐵劍(43)、ミニチュア土製品(186·189)



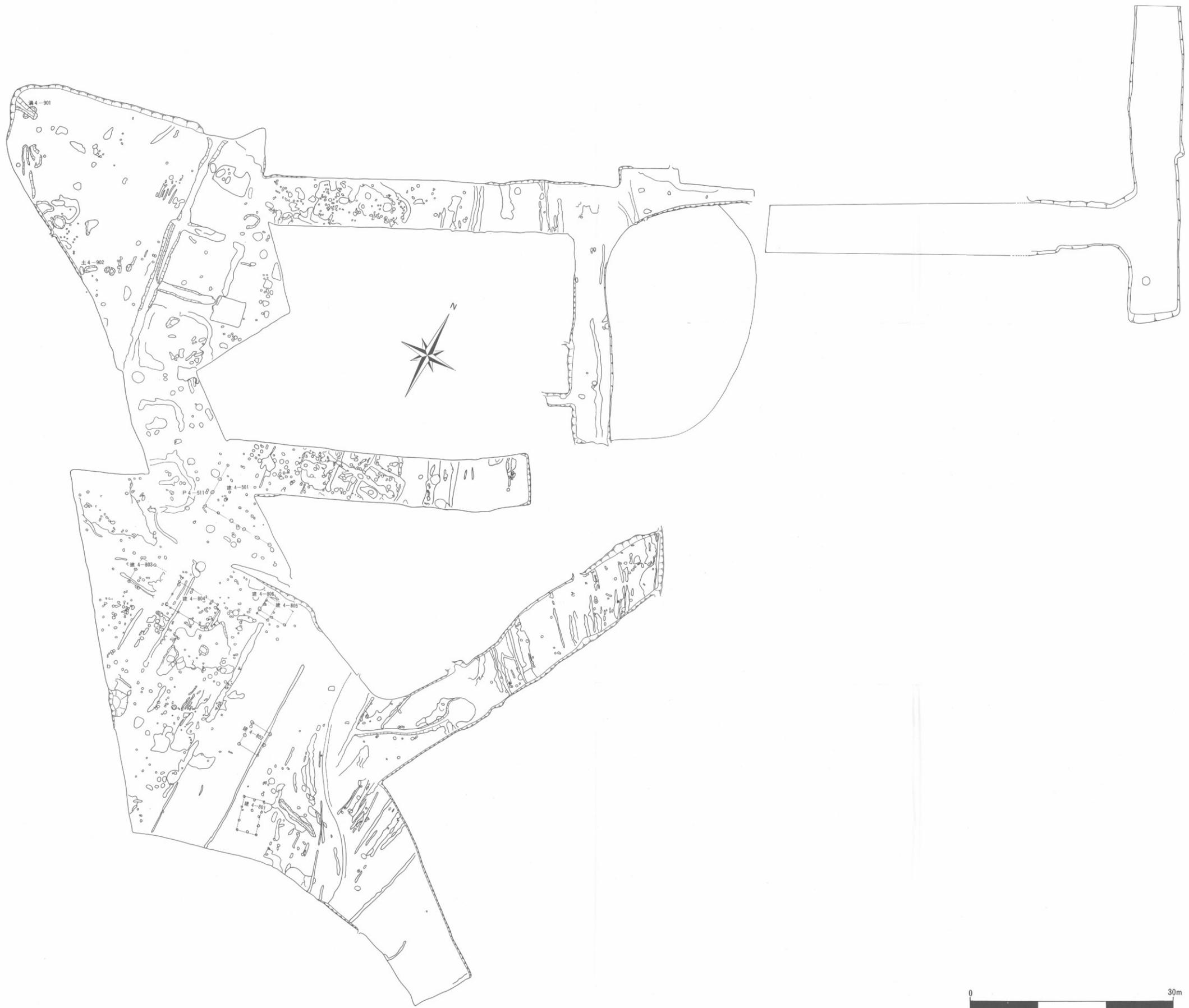




付図1 調査区No.2 遺構全体図



付図2 調査区No.3 遺構全体図



付図3 調査区No.4 遺構全体図(1)



付図4 調査区No.4 遺構全体図(2)



付図5 調査区No.5 遺構全体図